

向日庵

9



表紙のマークについて



寿岳文章が、居宅「向日庵（こうじつあん）」から出版した
私家版の印。庭に植えられていた茶の木から「茶の実」をあ
しらったもの。蔵書印としても愛用していた。

第9号 目次

澤島英太郎特集

- 近代住宅としての向日庵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
石川 祐一（京都市文化財保護技師）
- 満州の澤島英太郎・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
澤島 哲郎（NPO 向日庵会員）
- 澤島英太郎の建てた家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
中島 俊郎（甲南大学名誉教授、NPO 向日庵理事長）

民藝論

- 寿岳文章と三宅忠一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
島貫 悟（明治大学研究知財戦略機構研究推進員）

読書論

- 読書空間としての「向日庵」―寿岳しづと読書―・・・・・・・・・・・・・38
長野 裕子（NPO 向日庵会員）
- 寿岳しづ『朝』の書評・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

寿岳文章の逸文

- 寿岳文章エッセイ抄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
- 寿岳文章の童話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
- 未発表書簡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

思い出と追悼

- 寿岳文章先生の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
増野 正衛（元甲南大学教授）
- 寿岳潤先生のこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
平田 和代（NPO 向日庵会員）
- 寿岳文章追悼文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

- 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

秋友 達也（NPO 向日庵理事）

近代住宅としての向日庵

石川祐一

1 はじめに

向日庵は、壽岳文章（1900～1992）の邸宅として建築された。住宅は施主、設計者、施工者によってつくられるものである。本講演では、様々な分野で活躍した施主の壽岳文章が、どのような空間を志向したのか、設計者や施工者との関係の中でどのような意匠や空間が実現したのかを考察する。その結果として建築された向日庵を、近代住宅としてどのように評価することができるか考えたい。

2 同時代の近代住宅

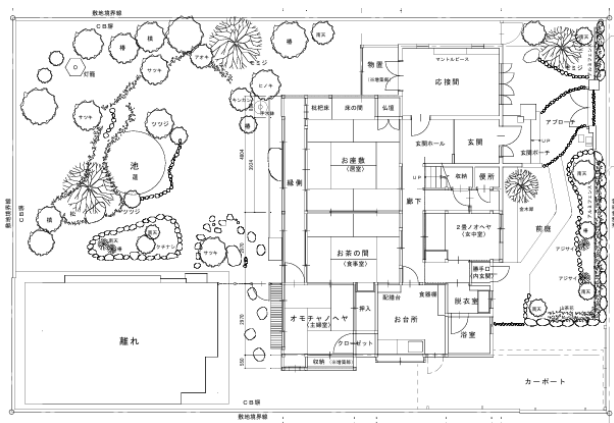
明治後期には、新中間層と呼ばれる賃金労働を行うホワイトカラー、いわゆるサラリーマンが登場した。彼らに次第に浸透していった生活スタイルは、郊外に居住して、都市部の職場に通勤するというものである。大正期には、都市部周辺における交通網の整備によって、郊外住宅地が開発されていく。関西では小林一三が箕面電気軌道（後の阪急電鉄）の路線経営と住宅地開発をセットで行うなど、私鉄によって開発が主導された。

郊外に建てられた新中間層の住宅として主流だったのが、「中廊下型平面」と呼ばれる形式である。中廊下型は明治末に出現したと考えられている。中下級武士の住宅や民家建築に由来する従来の日本の住宅は、部屋を通り抜けないと奥に向かうことができず、プライバシーが欠如していると批判された。中廊下を設けて部屋を配置する中廊下型住宅は、そうした点を改善するための合理的な思潮を背景としている。通常、東西方向に延びる中廊下の南側に、接客空間である座敷や次の間を配し、その前面に主庭を築く。一方、中廊下の北側には、茶の間や台所など、家族の生活空間が配置された。つまり、南側の明るく暖かい場所が接客空間に、北側の暗く寒い場所が家族の生活空間とされたのである。

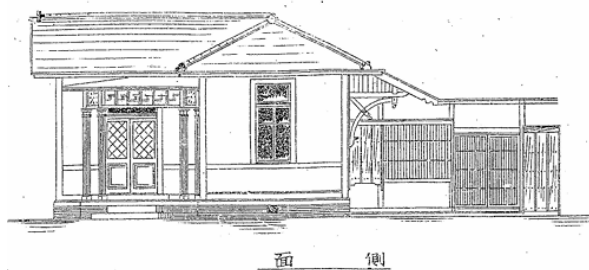
中廊下型住宅には、和風住宅を基調としつつ、玄関脇に洋風の接客空間として洋室を設ける事例も多い（図1）。これは和風の生活を基調としつつ、表側の接客空間を洋風とする型式である。明治期の上流階級の邸宅では、表側に接客空間としての洋館、奥に生活空間としての和館を設け、両棟を接続する和洋併置（並列）型の平面が普及した。従来の和の生活を踏襲しながら、表側の接客空間を洋風とするものである。こうした和洋併置型の形式を縮小して、和風住宅の玄関脇に洋風接客空間を付加する案が、明治期に提唱されている（図2）。こうした案は、大正後期から昭和初期における洋風応接付きの中廊下型住宅として普及することになった。

大正半ばには文部省が主導した生活改善運動や、住宅改良会などによる住宅改良運動が展開され、家族本位の住宅の必要性が主張された。家族生活を重視した住宅として提唱されたのが、「居間中心型平面」である（図3）。居間中心型では、庭に面する南側部分の中心に居間（リビング）を置き、その周囲に各室が配置される。家族の空間である居間は最も大きな空間を占める。これは生活改善、住宅改良の思潮による家族本位を目指した住宅である。

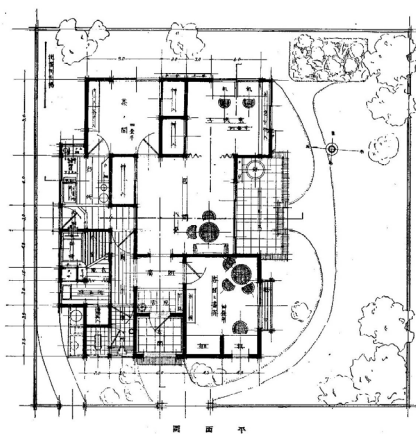
家族本位の住宅を積極的に提唱した建築家として W.M.ヴォーリズをあげることができる。ヴォーリズ建築事務所設計の駒井家住宅（1927年）は、スパニッシュを基調とする洋風住宅である。庭に面する1階の中心には居間（リビング）と食堂（ダイニング）が配置され、両室境の建具を開放すると1つの空間として使用することができる。ヴォーリズの住宅作品の多くは、駒井家のように室内に西洋の伝統的な意匠を踏襲しつつ、家族の空間を中心に置く居間中心型となっている。ただし、戦前期の段階では新中間層の住宅の主流となったのは洋風応接室を伴う中廊下型平面であり、居間中心とするモダンリビングの考え方が普及するのは、戦後を待たねばならなかった。



(図1)
洋風応接室のある中廊下型平面
：京都市内の住宅（1934年）



(図2)
北田九一「和洋折衷住家」
：『建築雑誌』（1898年12月号）



(図3)
居間中心型の住宅
：『朝日住宅図案集』設計競技案（1929年）

3 向日庵の建築

近代住宅史の流れを踏まえて、住宅建築としての向日庵を見てみよう。立地する西向日は、1928年（昭和3）に新京阪鉄道（現阪急京都線）が開通し、住宅地として開発された郊外住宅地である。向日庵は、澤島英太郎（1904～1945）の設計、熊倉工務店の施工により、1933年（昭和8）に上棟している。設計者の澤島は、1931年（昭和6）に京都帝国大学建築学科を卒業し、同大学院に進学した。1943年に文部省宗教局国宝建造物調査室に勤務し、その後満州国国務院建築局勤務のため渡満した。終戦後、引き揚げに際して死去したとされる。澤島は京都帝国大学建築学科時代に、武田五一（1912～1938）、藤井厚二（1888～1938）らの教えを受け、特に藤井に大きな影響を受けている。

藤井厚二について簡単に触れておきたい。藤井は、東京帝国大学建築学科を卒業後、竹中工務店入社（1913年）する。その後、武田の誘いにより京都帝国大学建築学科に赴任し（1921）、後に教授となる。藤井は日本の気候風土に合う住宅の科学的考察に取組み、これは現在の住宅環境学の起点とも言えるものであった。広島県福山市の醸造業の子息であった藤井は、恵まれた財力を用いて、5回にわたる実験住宅の建設を行った。第1回住宅（1915年）を神戸に建設した後、第2回から5回住宅を京都府大山崎町に建てている。第5回実験住宅は聴竹居（1928年）として現存し、藤井の代表作となっている。住宅設計に際しては、換気・通風などの住宅環境を考慮するとともに、板間と一段高い畳敷を接続して、イス座とユカ座の調和を目指したことが知られる。意匠的には、数寄屋とモダンデザインの融合をめざした。主な作品として、村山家書院棟（1918年）、聴竹居（1928年）、八木家（1930年）、小川家別邸（1934年）、扇葉荘（1937年）などを挙げるができる。

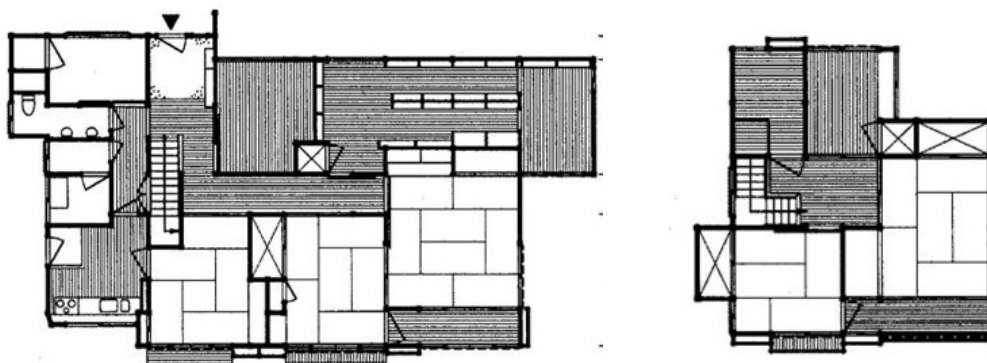
向日庵の施工を請け負った熊倉工務店についても触れておく。澤島は、熊倉工務店の社長・熊倉吉太良（1894～1982）と親交を持ち、向日庵の他、盛新之助邸（1932年）でも設計を担当している。熊倉吉太良との交友は、1932年に上西亮二から自邸建築を相談された際に、武田五一から熊倉工務店を紹介されたことに始まるとされる。熊倉は、京都帝大施設の施工に参加したことを契機に、京大建築学科の人脈との交流を持つことになった。武田五一、藤井厚二、永瀬狂三らと交流し、大正後期から京都を中心として、多数の洋風住宅を手掛けるようになる。熊倉も藤井厚二に薫陶を受け、藤井風の意匠を用いた作品を設計施工している。また、熊倉は河井寛次郎や民藝を好んだ施主の影響から、民藝運動にも関与している。民藝の影響を受けた作品として、自在軒（1939年）、旧岡本邦二郎邸（芙蓉荘）（1940年）、祿々荘（1966年）がある。

■向日庵の建築

向日庵は、木造2階建、棧瓦葺の建物である。外観は1、2階ともに建具の入る内法の高さまで板を張り、その上部は真壁造とする和風の外観である、こうした外観は澤島が影響を受けた藤井厚二の作風に類似している。北側に玄関を設け、玄関ホールから東西方向の中廊下が延びる。廊下の北側に応接室、書斎、南側には居間、座敷などの和室を配置する。中廊下型平面を踏襲しながらも、北側に書斎、生活空間を南側に配置する点が特徴的である。

応接室は板敷でイス座の空間である。壁面は真壁造で、一段高い押板風の床（とこ）と地袋を

備えている。1階和室では、床柱に磨き丸太を用い、床脇には地袋と引出しを段違いに組み合わせる。応接室の内装や座敷の床脇には、和とモダンデザインを融合する藤井厚二の意匠の影響が感じられる。また、外壁の妻面に開けられた小屋裏の通気口や、床面近くの通気・掃出し用の開口も、藤井の作品に必ず現れる住宅環境面での手法に共通する。



向日庵平面図（『京都府の近代和風建築－京都府近代和風建築総合調査報告書』より）



外観



1階座敷



1階応接室

(写真はいずれも石川祐一撮影)



1階書斎



通気・掃出し用の開口

4 壽岳文章の向日庵建設に関する言説

施主である壽岳文章が、向日庵や住宅全般についてどのような志向を有し、それがどのように反映されたのかを考察したい。まず、彼の業績について確認しておこう。壽岳文章は、兵庫県押部谷村（神戸市）に生まれ、京都帝大文学部卒業後、関西学院、甲南大学で教鞭をとった。京都帝国大学在学中に新村出、柳宗悦、河上肇と親交する。多岐にわたる業績をかいつまんで述べると、ブレイク研究、ダンテ神曲の翻訳など英文学の仕事がある。また、ケルムスコットプレスに触発された私家版・向日庵本の出版が挙げられ、ブレイク作品、式場隆三郎『テオ・ファン・ホッホの手紙』（1934）、芹沢蛙介画彫『絵本どんきほうて』（1936）などを手掛けている。柳宗悦との交流の中で、民藝運動に理解を示し、参加することになるが、その実践の一つが和紙研究であった。1937年（昭和12）から全国の調査を行い、その紀行は『紙漉村旅日記』（1943）として刊行されている。

（書齋について）

まず、英文学者、執筆者としての壽岳が志向した、書齋に関する言説を見てみよう。

- ・「書齋というものも作り方をいろいろ研究して、適当な広さをもって設計し、当時としては最良のものが出来た。そのころはまだ、そんなことをしている人はいなかった。」（壽岳文章、壽岳章子『父と娘の歳月』1988）
- ・「しかし家族の一人一人が書物を読んだり物を書いたりすることを条件とする私の家では、各室はある程度まで完全に独立した存在であらねばならず、かつ相当数の蔵書があるから民家をそのまま利用するわけにはゆくまい。」（住宅文化研究会『家庭文化住宅雑誌 家』昭和16年2月号）

壽岳は、書物を読み執筆する空間は独立したものであることが必要とした。書齋の設計において研究した結果、適当な広さの部屋となったと述べる。

（和紙の使用）

- ・「今住んでいる家は、十年前程前に、澤島英太郎氏に設計やら監督やらをお願いして建てたものであるが、大体は私の希望が参酌されている。殊に和紙をどう使ふかと云ふことについては、すっかり私の我儘をゆるして貰った。」（「和紙と建築」『壽岳文章・しづ著作集』1970）
- ・「私の家では、出雲産の無地の雁皮紙を主とし、主婦や子供の部屋には、うるおひを持たせる意味で、腰に同じく出雲産の染紙や、奥州白石の管野新一君が藍や胡桃で染めた模様紙を使ってみた。」（「和紙と建築」）
- ・「電気照明にもつとめて和紙を使った。市売の、いやに豪華な、へんにきどった、わざと繊維を誇張した紙は我慢にも使へないので、ごく簡単なのを大工に作って貰ったり、「たくみ」で売っている鳥取製のをつけたりしている。書齋のスタンドは、バァナード・リーチの考案になるのを使っている。」（「和紙と建築」）

このように、澤島に設計を依頼した際の要望として、和紙の使用を挙げており、部屋の用途に合わせて和紙の種類を選んだと記している。また、照明にも和紙を使用し、紙の種類やスタンドにこだわったとしている。

(住宅における民藝観)

- ・「三十年前、京都の南禅寺山内の寓居から、日あたりのよい西向日町に定住したときは、家に病人をかかえていて、建築をたのしむ心と時間のゆとりは全く無く、設計その他、ほとんど故・沢島工学士と熊倉工務店にまかせた。今から思うと、諸式が安いどん底で、一万円も金があったらずいぶん立派な家が建った。しかしその金が思うにまかせなかったので、粗末な杉材を主とする結果となった。もちろん、民芸調をことさらに出すなどは論外で、住みやすさと健康を第一に考えて家を造った。明るい家なので、民芸の友だちは<寿岳のガラス家>などとわる口を言った。」(寿岳文章「私と民芸品」『柳宗悦と共に』1980)
- ・「妙なもので、民芸を意識しないで建てた家でも、家具や調度品に民芸品を入れ、三十年の風雪に耐えると、どことなく民芸的な格ができるのみえ、私の家にやってくる人は、純粹の民芸の暮らしに徹していると思うらしい。そうではないのだ。(中略) ごくあたりまえに衣食住の中にとけこんでいる民藝品を相手に、何の抵抗も感じずに毎日毎日を暮らしてゆく。これが民藝の本義だと私はこころえている。」(「私と民芸品」)
- ・「もしもう一度この土地に自分の家を建てる機会に恵まれるなら、こんどこそ始から終まで自分が監督して、周到な用意と構想のもとに、もう少し自分の性格を出した家を作りたいとの夢を描くこともある。その夢に描かれる家は多分に民家のよさを第一に材料の建實さを取り入れたものであり、重厚、篤実な感じが溢れるものである。」「例えば養蚕を目的として発達した奥羽東北の二階造りの民家を、いかに外観が美しいとて、そのまま我々の生活にとり入れるわけにはゆくまい。(中略) 土地に即し、職業に即し、そして人格と良心に即してこそ美しい家であろう。」(住宅文化研究会『家庭文化住宅雑誌 家』)
- ・「引き手は鳥取の吉田璋也さんから送ってもらった。」(「私と民芸品」)

寿岳にとって民藝を体現する住宅とは、住みやすく、健康的で、堅実な材料を用いた重厚、篤実な住宅であった。ごく当たり前の衣食住に溶け込む品々の中で、毎日を暮らしていくのが民藝の本義であるとしている。対して、美しい民家であっても、その土地や生業から切り離されたものは、民藝の本義に反すると考えたようである。

民藝運動においてつくられた建築作品群と対比した際、寿岳の住宅に対する民藝観は、異なった性格を有している。向日庵と比較するために、民藝運動メンバーによる昭和初期の建築作品を紹介しておきたい。民藝運動は日用品である「下手物」が持つ「用の美」を評価した。建築における「用の美」とは民家のそれであり、民藝の建築作品には民家の意匠が用いられた。

民藝運動の主要メンバーは建築における専門家ではなく、案を自ら大工に指示することで志向する意匠や空間を実現した。柳宗悦が中心となった設計した「大札記念博覧会民藝館」(1928年)は、現代の生活に適した和風住宅が意図された。経費の約8割を建物・建具に、2割を「什器調度」に割り当てることで、総合された民藝の空間を目指した。民藝の精神を表現した結果、民家風、東洋風(中国・朝鮮)、数寄屋風、洋風の意匠が用いられた。こうしたハイブリッドな空間は、民藝の建築作品全般にわたる特徴と言える。代表的な作品として、柳宗悦による柳邸



日本民藝館（1936年）

（いずれも石川祐一撮影）



河井寛次郎記念館（旧河井邸）（1937年）

（1935年）、日本民藝館（1936年）、河井寛次郎による土橋邸（1934年）、河井邸（1937年）、濱田庄司による濱田邸などが挙げられる。いずれも、日本民家を基調としつつ、朝鮮風、洋風など、民藝の眼で見い出された意匠が引用される。民家の意匠について見ても、異なる地域の形式が組み合わせられ、どこにも実在しない民家となっている。

5 向日庵の建築史的価値

向日庵は、昭和初期における郊外の新中間層（中流階級）の住宅である。玄関脇に洋風応接室を設ける中廊下式であるが、家族の居室を南側に配する点に家族本位の近代的な思潮が現れている。大きな書斎を中廊下の北側に配置する点は、研究、執筆を業とする壽岳の志向が反映された部分であり、書籍や資料の所蔵に北側からの採光を求めたことが推測される。

向日庵において設計者の澤島英太郎は、外観や内部の意匠、換気や通風への配慮の面に、師である藤井の影響による手法、作風を用いている。澤島による意匠は、民藝運動のメンバーによる建築作品とは異なるもので、民家風の意匠は向日庵には確認することができない。ここには、民藝風の強調を批判し、住みやすさや堅実さを民藝の本義と考える壽岳の民藝観が反映されていると言えよう。ただし、和紙の使用など特定の部分に壽岳の民藝的志向が見られる。

以上のように、向日庵は昭和初期の新中間層による中廊下型の郊外住宅に分類される一方、「文化人」壽岳文章の志向が反映した特徴的な事例として評価される。また、設計者・澤島と施工者・熊倉吉太良の作品から、藤井厚二の手法、作風の影響が確認できる事例としても興味深い。向日庵は、文化史的な側面に加え、建築史学から見ても重要な作品であり、重層的な価値を有する住宅遺産として高く評価することができる。

<主な参考文献>

- ・寿岳文章『柳宗悦と共に』（集英社、1980）
- ・『京都府の近代和風建築－京都府近代和風建築総合調査報告書』（京都府教育委員会、2009）
- ・藤田治彦、川島智生、石川祐一、濱田琢司、猪谷聡『民芸運動と建築』（淡交社、2010）
- ・石川祐一『近代建築の夜明け 京都熊倉工務店－洋風住宅建築の歴史』（淡交社、2006）
- ・志賀直邦『民藝の歴史』（ちくま学芸文庫、2006）
- ・中島俊郎「文化遺産としての向日庵－過去を見つめ、未来を見すえる「開かれた場」－」
『甲南リベラリズムの源流を求めて－平生夙三郎の建学精神と地域開発をめぐる』（甲南大学総合研究所、2018）
- ・『民藝』835号（日本民藝協会、2022）

満州の澤島英太郎

澤島哲郎

中島俊郎様

この度は「向日庵の建築文化史」をご恵贈いただき、厚くお礼申し上げます。

今回は、父・英太郎が渡満した経緯などについて、うろ覚えですが、私の記憶を頼りに、記してみたいと存じます。父は当時、満州国の国務院建築局長を務めていた京都大学工学部建築学科の先輩・岡大路氏の招きで、満州国皇帝・溥儀氏（映画『ラストエンペラー』の主人公ですね）の皇宮を設計するために、勤務していた文部省（国宝保存課）を辞めて渡満したと聞いています。

父の1年後、1941年春に満州へ移住した私たち家族は、父の書齋に皇宮細部の設計図が多数あったことを覚えています。戦争の激化で、皇宮の建設は結局行われず、父も残念だったことでしょう。

1945年8月に戦争が終わり、満州では奥地に入植していた開拓団員が、日本人が多くいる新京市に集まってきました。最低気温がマイナス30°Cにもなる冬が迫っていた時期であり、彼らが越冬するバラックを建設することが急務でした。父は連日バラック建設の指導に出向いていましたが、そこで移されたシラミが媒介する発疹チフスに感染し、10日間ほど寝込んだ後で死去しました。発疹チフスは現在では死亡率3%程度の感染症ですが、父は疲労が溜っていたため、体力がもたなかったのでしょう。

終戦とともに、満州では蒋介石の率いる「国府軍」と毛沢東の「八路軍」（共産軍）との内戦が始まり、1945年の初冬には我が家の周りでも市街戦があって、銃弾が2、3発窓から飛び込んできました。当時住んでいた官舎では、集中暖房のためにボイラー場から地下溝経由で各家庭に蒸気を送る仕組みになっていましたので、私たちは市街戦の最中にはこの地下溝に避難していました。

市街戦が過ぎたあとには、あちこちに手榴弾や不発弾が落ちており、近所の子供が拾った手榴弾を投げて爆発させ、死亡するという痛ましい事件もありました。また、戦死した兵士の凍結した死体が井桁に積み上げられていたのを憶えています。

1946年の夏、蒋介石の計らいで日本人が送還されることになり、終戦当時中学2年生だった長男の私は、母と弟3人、妹1人の6人連れで多数の日本人と共に新京（長春）から無蓋貨車に積まれて遼寧省南部の葫蘆島経由で日本へ引き揚げました。引揚船は日本海軍の練習巡洋艦だった「鹿取」で、乗組員はすべて元海軍の軍人でした。

当時瀬戸内海はまだ機雷の除去が終わっていなかったため、引揚船は四国の南太平洋を通り、浦和へと到着しました。引揚者たちは感染症にかかっていないことを確認するために、浦和の元海軍病院で1週間ほど待機させられたのち、迎えに来てくれた叔父とともに郷里の京都へと向かいました。昭和21年のことですから、国鉄の列車はすべて超満員、網棚の上で寝ている人がいたのを覚えています。

京都駅に近づくと、滋賀県方面で買った闇米を、下で待っている人目当てに鴨川に投げ落としている人が多数いたのが印象的でした（京都駅まで持ってゆくと没収されるので）。

京都は戦災を受けなかったため、浴衣地のプリントを行っていた広大な実家は昔のままに残っていました。皮肉なことに堀川通拡幅のため実家は強制立ち退きさせられましたが…。

母と子供5人の一家は私が就職するまで赤貧状態の生活でしたが、親戚の援助なども得て何とか生きのびることができました。

以上、長々と私ごとを書き立てて申し訳ありません。どうか今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

2025年4月1日

澤島哲郎

* 貴重な資料ゆえ、私信の掲載をお許し下さった澤島哲郎氏に謝意を表します。

澤島英太郎の建てた家

中島 俊郎

寿岳文章邸と山本修二邸が問いかける意味

寿岳邸、山本邸ともに同じ建築家澤島英太郎によって昭和8年に建造された。両者は英文学を専攻する学者の居宅である。よって両者とも書齋が重視され学者としての活動の核となり、研究の成果、文化発信の場となったのである。両者ともまさに書齋を中心にすえ日常生活を営み教養を育み、文化の諸相を生み出していった場にほかならない。「学者らしく大規模な書庫を備えた主屋」というのが、向日庵が有形文化財に指定された一因であった。

寿岳邸と山本邸を合わせ鏡のように相対化させると、多くの共通点が浮きあがり建築家の本質を照射してくれるはずである。と同時に、この作業のなかで両者が補完しあうことで寿岳邸と山本邸の個性がより鮮明になるであろう。また共通性だけが設計者の個性を特徴づけるものではない。差異こそがより豊かな個性の実体を明してくれるのではなからうか。そして家屋は生活の容器であり、もっとも重要なのは、「そこから何を生み出し育てていったのか」という実態を無視してはならない。むしろこの問いかけこそが両者の存在意義にならう。澤島英太郎が両家にこめた建築家の祈りが、社会に対してどのような形となって発信されたかを具体的に確認する作業とならう。

1 寿岳文章邸と山本修二邸の設計と竣工

家族アルバムとして寿岳家にのこされたアルバムには、向日庵の棟上式の写真が六葉貼付されている。寿岳文章の筆跡（インク）で「竣工しつつある向日庵（澤島英太郎氏撮影）左下隅の一枚をのぞき、他は昭和八年三月四日上棟式の日うつす」とキャプションが明記されている。この貴重なアルバムは「向日庵資料」として向日市立文化資料館に保存されている。なお筆者はかつて寿岳の向日庵の意義について、設計士澤島英太郎とともにかなり詳しく「向日庵の建築文化史」（『甲南大学文学部紀要』第175編、2024）において論評したので山本邸との比較において適宜参照して欲しい。ネット上で簡単にアクセスできる（<https://konan-u.repo.nii.ac.jp/records/2000684>）。

他方、山本修二邸（京都市左京区北白川平井町）は自らの記録として、「鉄筋コンクリートの夢—書齋を語る」（1936年）という一文がのこされている。そこには旧居で二階に収められていた五千冊もの蔵書のため地震による生命の危機が察知され新居の建造にふみきったとある。向日庵が新築された一因として旧居にあふれる蔵書への対策があげられていた事実を想起させるものである。両者とも洪水のように押し寄せる蔵書への対策として書齋の拡充を希求していたのである。当然、書庫の充実も求められよう。

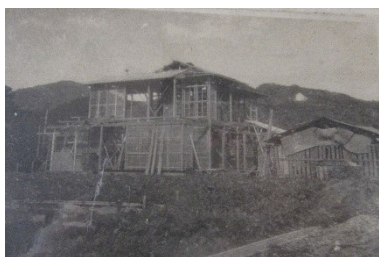
山本邸は昭和8年6月に建築が始まった。修二の子供である船坂まりと山本峻（たかし）は、亡父の生誕から家を建てるまでの日々の記録を文集『むかしむかし—幼かった姉弟の思い出』（私家版）と題して書きとめている。修二からの直話、伝聞をまじえた記録であるが、母親が一年間のおよぶ日常生活の動向を書きしるした貴重な手記『母の日記』も含まれている。しかもその記

録された年が「昭和8年」となると、重要度はかなり高くなる。

山本邸を建てる北白川の土地であるが、百坪余りを一帯の大地主である、売却は絶対にしないという会田龍雄から譲ってもらった。「売渡土地代金領収書」によると、百〇六坪、代金四千貳百四十円であった。寿岳との関係で言うと、土地売却者は京都中学校で生物を教えてもらい父親のような想いを寿岳が寄せていた恩師、生物学者の会田龍雄である。

澤島がひいた山本邸の青焼き図面には「昭和八年七月 設計士澤島英太郎」と明記されている。山本峻は設計士について、「設計は昭和三年、三高の理工出身者で、昭和六年、京大建築科を卒業されたばかりの新進の建築家澤島英太郎氏によるもので、当時としては斬新な和西洋折衷のスタイルになっている。澤島さんは早く亡くなられたので、その名は忘れられているが、ブルーノ・タウトによって再発見されたといわれている桂離宮についても、これに先駆けて詳細な研究を発表された方である」(p.210)と説明している。

田圃であった土地を固めて住宅用地にならすところから家具類が搬入される過程までが子供の眼から活々と生鮮ある筆致でとらえられている。建材の切れ端を大工からもらい玩具の電車などを作っては楽しんだという。



水を多く含みぬかるんだ田圃であったため、近くの農家の女性たちが音頭をとりながら人夫たちが大きな槌を大地に打ちつけ土地を固めた。建築が進むなか、8月、三条大橋にある冷蔵庫製造所（渡瀬佐太郎）から氷でもって冷やす冷蔵庫（代金21円）が届いた。そして、「この冷蔵庫の大きさに合わせて台所の炊事場」が設計された。当時の家屋は台所を中心におく重要性が声高に唱えられていたのでこの指摘は意味が重い。

建築は一乗寺の大工永田源之丞が棟梁になって進められ、その見積書では、木造瓦葺二階建、建坪参拾七坪五合（延べ五拾坪五合）で金六千壹百九拾貳円五拾銭也となっており、そこから壱割引きになり、最終的には五千参百参拾五円也となった。



一方、寿岳は預金千何百円かを元手にして、まず百七坪の土地を購入し、建坪五十坪の建造物を設計した。購入した土地を担保にして五千円を借りて建築資金とした。寿岳邸、山本邸ともに土地面積から建坪まで極似している。購入金額、建築金額までほぼ同じになるほどの時代環境があったのであろうか。ともあれ山本邸は昭和8年12月24日、「まだ充分い壁も乾き切らない中」に引越しを完了している。

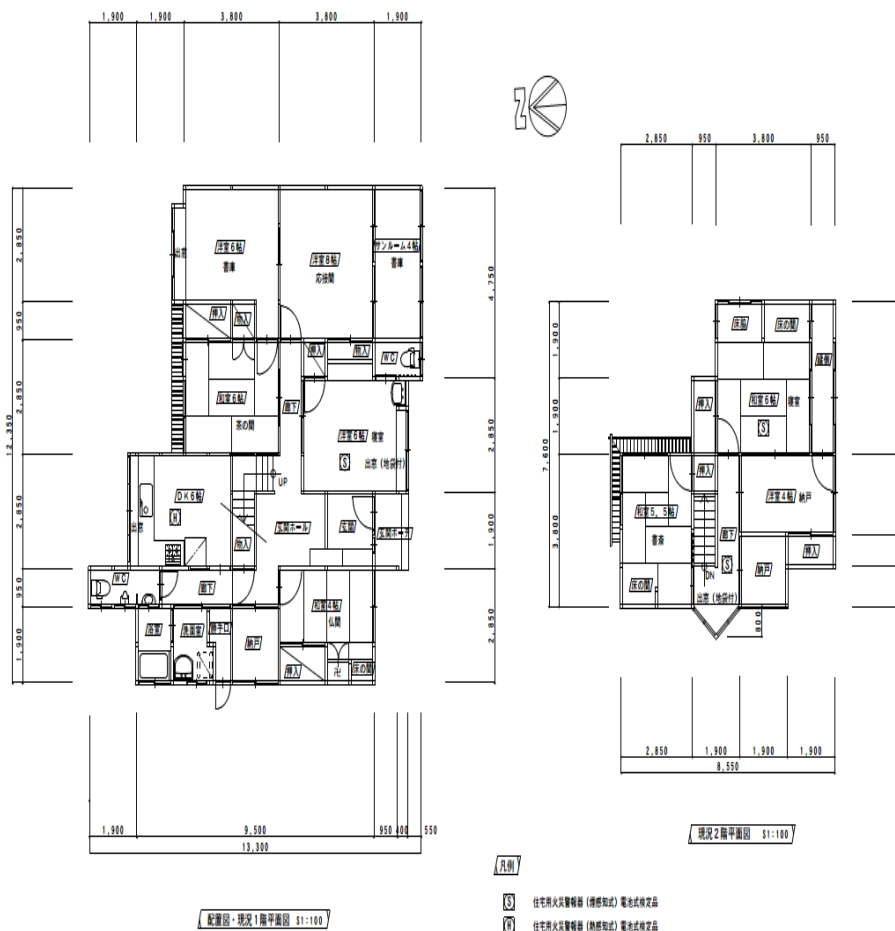
寿岳は「この家の器材は超一流のものを使ってないが、非常に為を思ってしっかり建ててある。いい工務店、設計をしてくれた京都大学の澤島さんのおかげだと思う」(『父と娘の歳月』pp.105-106)と感謝している。

2 山本邸の間取り

さて山本邸の間取りは、玄関を入れて左へ進むと仏間があり、逆の右へ行くと子供部屋であり本棚が組み込まれている。廊下をはさんで北側に居間があり食堂を兼ねていた。土間にない台所

が居間に続いており小窓からも料理が運ばれた。廊下を突き当たった所に応接間があり、南側は日差しのよい書斎、北側には両サイドに書棚を設えた書庫がある。さらに仏間の北側には女中部屋、風呂場、便所と並ぶ。

階段をあがった二階の南側には床の間付きの客間、北側には客用の寝室があった。現在、成瀬無極の額が架けられている。見て理解できるように、向日庵とよく似ているのが明瞭であろう。一階、二階ともに設計図を下記にかかげておこう。



3 通気

今日では両家とも建ってから 90 年以上が経とうとしている。台風などの天災、白蟻などの虫害などに遭遇し補修したが、目立った大きな改築はない。娘章子の証言にあるように、「とても親切に建てられた家で、夏には枕元から涼しい風が入るようになっている」(p.106) とあるように澤島建築の一大特色である換気性も共通している。

ただ澤島が設計した家屋は通気がよかったが、反面、冬の寒気には両刃の剣になってしまったようである。関東大震災により関西へ移住し京都に在住していた小説家谷崎潤一郎は、「京都の冬は底冷が堪えがたく、加うるに東山寄り朝日の当り方がおそいとかで…京都を引き上げて苦楽園へ逃げ出してしまった」（『岡本にて』大阪新聞（1929年6月30日））と冬の厳しさに屈服してしまった。現在、山本邸に居住されている高木氏は、夏の冷風を取り入れる換気口から寒気がしんと侵入してくるのを防ぐため網目をおおう板をおいて防御していると実際にみせてくださった。

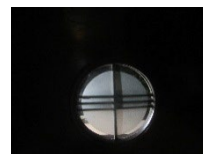
4 採光



寿岳邸は友人たちから「ガラス家」、つまり窓などにガラス材が数多くはめられ採光がよすぎて温室のようだと噂された。当初、寿岳自身も光がはねすぎて精神が集中できないと愚痴るほど豊かな光線が射し込んでいた。山本邸も例外ではなくサンルームまで完備され光をとり入れる工夫が随所にみられる。もっとも印象的なのは、階段の踊り場を利用した採光スペースである。

壁を遮断することなくそのまま活かし硝子戸を最大限に解放し船舶の先頭のような斬新な空間を設け、そこを飾り棚のように利用し階段のアクセントとして機能し、下につくられた袋戸棚は小物の整理にも重宝である。

寿岳邸同様、玄関の目線に合わせた設えはあでやかなデザインで人目をひくものではないが、ベラスケス『青いドレスのマルグリータ王女』（1659）に登場する鏡のような不可思議さを誘う意匠である。設計士が存命ならば意図、用途、デザイン性について詳細に説明して欲しいところである。



5 書斎

有形文化財に選定されるとき、向日庵は書斎のある居宅として評価された。そもそも書斎とは何であろうか。書斎は英語で「スタディ（study）」と言うが、フランス、ドイツ、イタリアいずれの言語においても語源はラテン語の「ストゥデーレ」であり「熱中、集中」を意味する。よって書斎とは精神を集中させる空間、と考えてよい。そこから勉強、研究する場に派生しても自然であろう。

最晩年、寿岳は娘に口承で伝える自伝のなかで、書斎について言及している。「書斎というものも作り方をいろいろ研究して、適当な広さをもって設計し、当時としては最良のものが出来た。そのころはまだ、そんなことをしている人はいなかった」（寿岳文章・章子『父と娘の歳月』）と語り自らの書斎を評価している。だが、「そのころはまだ、そんなことをしている人はいなかった」という発言は多少のチェックを要する。

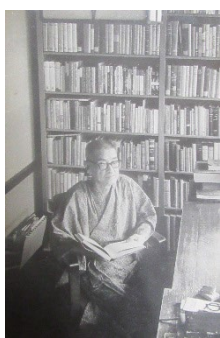
向日庵の書斎が全国に初めて披露されたのは、『書物展望』（1934年12月号）の口絵においてであった。「書斎めぐり」と題された作家、知識人たちの書斎探訪がシリーズ化され、その第24回目に寿岳夫妻が書棚を背に撮影されて登場している。知識人にとって新居に書斎を構えるのは、何も目新しいものではなく、むしろ必備の空間だと考えられていたのである。寿岳が敬愛していた英文学者の先達たち一市河三喜、福原麟太郎、土居光知、矢野峰人、竹友藻風など一は、早く

からいずれも書齋らしい書齋をかまえ、蔵書目録を作成するほどの蔵書家であった。こうした英文学者たちが自らの書齋や蔵書について語る随想を寿岳はくまなく読んでいたはずである。ひとかどの英文学者になろうと尽力していた寿岳もまた研究に必要な蔵書をそろえ、研鑽を積む場の書齋を必要としていたのは言うまでもない。

「書齋」の写真と対置された寿岳の著書『書物の道』の広告によって寿岳が江湖にどのようにとらえられていたか、が明瞭になってくる。「著者寿岳氏は篤学なる英文学者として知られているが、しかい書物を好み愛する人達には日本における唯一の私版刊行者たる向日庵主としての寿岳氏、書誌学者としての寿岳氏に、よりいっそうの親しみを感じる。書物への深き慈愛、汲々として倦まざる美書製作への努力、まことに、よき書物の理解者の乏しき当今、寿岳氏の存在は闇夜の燈明である」とあり、寿岳文章を理想の書物人として讃美している。この一文と書齋の写真が相対化されることで、向日庵の知的機能の中枢をになう書齋の重要性が浮き上がってくるのである。

まず、寿岳、山本ともに学者共通の悩みをかかえていた。寿岳は南禅寺近くの寓居の各部屋にあふれかえる書籍に対処できないでいた。また本棚のなかにハチが巣づくりするなど空気の換気が悪く健康を害するほど湿気の高い家屋に閉口していた。増殖がとどまるどころを知らない本の始末に困り果てた結果、書齋を中心にした家屋を欲した点で両者は完全に一致している。

学生の頃から溜め込んできた洋書だけでもすでに4、5千冊を越え、所かまわず積み上げてきた和書を加えれば、地震がやってきたら間違いなく生命はあるまいという危機を山本は肌で感じていた。だから山本が家を建てようと一念発起したのも「生命の危険」を慮ってのことであった。そこで当初、山本が考えた案は、「書齋だけは鉄筋コンクリート」にして欲しいというものであった。だが諸事情からこの試案は放棄され木造の家屋になった。



両者の書齋案を検討してみると数多くの点がみごとにまで一致している。これは設計士澤島英太郎と話合った結果なのか、それとも澤島からの提案なのか、不明であるが不思議なくらい共通している。書齋の中心の一部になる書庫、とりわけ書棚の設計についてはまったく同一と、と言っていいくらいである。

山本邸の書齋について、「本棚は造り付けにしなければいけないこと、その土台は特別堅牢でなければならないこと。天井は防音のためテックス貼りにすること。およそ書齋の窓は北向きであるが本格であること」を基本条件として提示されたという。

一方、向日庵の書齋について、寿岳は新築した家では書齋の設計にできる限り意を尽した。まず書齋の場所は光線と風位にもっとも適した階下東北隅を選んだ。北から入る光線が柔らかで激しい変化もなく心持ちを落ちつけるためであった。書庫と書齋は接続させて、両者の行き来を自在にするようにした。一万冊くらい所蔵できる書棚はテックス貼りにした天井までとどく八段からなり、作り付けにした。

「幸にも設計と監督に当たってもらった澤島工学士は、住宅建築に明るい藤井厚二博士の高弟で、

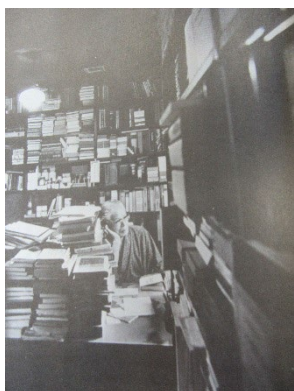
博士の主張を巧みに生かされ、書齋のみならず各室の通風と採光とには申し分ない設備を施された」(p.18)と寿岳は安堵している。

他方、山本邸の書齋設計について、山本は設計者の言葉を「一々感服して傾聴した」という。結果、変な注文を出してまとまりに欠けるようでは困ると危惧し一切を澤島氏に任せた。以来、山本とは「割合に便利なものが出来上がって何不自由なく暮らしている」と語り、「私の創意が何ひとつないのだから自慢をする種もない」と澤島英太郎に対して全面的な感謝を捧げている。「鉄筋コンクリートの夢—書齋を語る—」『ホームライフ』(1936年11月)

両者の書齋に対する見解がほぼ同時期に吐露されているのは興味深いところである。

6 書齋の錬金術

書齋のなかで文学研究者の執筆原稿はどのような錬金術を経てうまれてくるのであろうか。開かれた書物から一片の情報、事実、事項もしくは読後の印象、情感、反応などがもたらされる。当初は何の変哲もない知識に過ぎないものが他の知識とまざり融合し、それまで形すらうかがえなかった断片が明確な輪郭をつけてひとつの意味となり書き手に訴えかけてくる。書齋にとってもっとも重要なのは、この思索空間を得れるか否かにあると言っても過言ではない。



よく「明窓浄机」という言葉が書齋の必要条件としてうたわれるが、これは何も物理的空間を意味しているのではなく、言葉をつむぎ出してくる精神空間を指しているのではあるまいか。もっとも執筆量が多く生産的な日々をおくっていた向日庵の主は、乱雑に積み上げられ往来もままならない書齋から何篇もの佳作を書き続けていた。まさに精神が「明窓浄机」の状態にあったのであろう。

寿岳は精神における「明窓浄机」をよく理解していた。換気と採光を熟慮し、とくに採光について、「夜は紙を透して電燈のえがく柔かく書物の上に落ちる」(「書齋からの断想」)という。まさに精神の集中を高め良好な環境を誘導しようとする工夫にほかならない。

書齋とは何も書棚や立派な机や椅子が完備した部屋を指すのではない。関西学院で同僚であったアメリカ文学者志賀勝について、蔵書らしい蔵書を持たないことを志賀は研究者として恥じていたが、寿岳の評価は全く逆であった。英米文学の研究者として名を成した者のうち、「同君のように極度の書物の不自由さととりくみながら、あれだけの仕事をなしとげただろうか。恐らく他に例があるまい」(「志賀勝」『わが日わが歩み』p.399)と感服している。

つまり貧困のなかにあつて書齋はおろか研究書まで事欠いたが、精神を研究に集中させ、高質な業績をあげた志賀を寿岳は高く評価したのである。この例で分るように、書齋は何も研究する物理的空間を指すのではない。寿岳もまた、勤務校への往復三時間すぐす車中を良き書齋と考え、読書に集中していた。「私は昔から電車で本をよむとき、硬軟いずれを選ばず、特別なハンディキャップを与えぬことにしています」(『読書の伴侶』、p.52)と本のいずれのジャンルも問わずひたすら読むことに集中する態度を表明している。

書齋から生み出される著述に子供たちは関係がなさそうであるが、両家とも子供の参加があつ

た。山本家の子供は修二が翻訳したシングの戯曲を取めた岩波文庫の校正にかかわった。徹底した訂正作業で誤記を一掃したという。寿岳潤は『紙漉村旅日記』の各地方の味わい深い絵地図を手書きで作成した。親子が協力してひとつの作品を完成する。じつに微笑ましいエピソードである。



なお寿岳文章の全著述は大久保久雄・笠原勝朗編『寿岳文章書誌』（寿岳文章書誌刊行会、1985）に記録・所収されている。また山本修二の全著述は『山本修二の書齋—山本文庫演劇書目録・年譜・著述目録』（日本演劇学会関西支部、1999年）に記録されている。無極が山本邸に命名し認めたのは、「對嶽莊」という。杜甫の五言古詩「望嶽（ぼうがく）」に共鳴する命名であろう。ちなみに左京区岩倉にある岩倉具視旧宅にある文庫は「對嶽文庫」と称している。

7 山本修二

ここで山本邸の主を紹介しておこう。山本修二（1894-1976）は昭和を代表する英文学者、演劇研究者の一人である。明治27年に京都市に生まれ、三高を経て大正8年、京大英文科を卒業し、大正10年に龍谷大学教授、大正14年、三高教授、昭和24年、京大教授、昭和32年、京大名誉教授、立命館大学教授、昭和42年、龍谷大学教授を歴任し、昭和51（1976）年に逝去した。

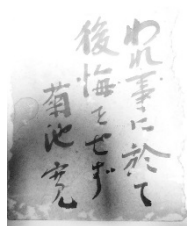
研究者としては英米の演劇、とくにアイルランド劇文学を専攻し、『アイルランド演劇研究』（1968年）などで知られる。だが、山本は象牙の塔にこもる学者ではなかった。寿岳が自らの学問研究を机上だけのものではなく「行じた」ものであったのと同じく、山本もたえず演劇の実践の場に身をおき、たえず「演劇とは何か」を問い続けた。

山本が著した、一般読者にひらかれた著書『演劇芸術の問題点』（昭和46年）をひもとけば、「19世紀のイギリス演劇」、「初期浄瑠璃劇にあらわれた空間性と時間性」、「人形劇論」、「新劇と歌舞伎」、「森本薫前期の作品」などの諸篇をみると、欧米の演劇、日本の歌舞伎、浄瑠璃、文楽、能楽、義太夫から人形劇、新劇まで演劇一般に精通していることが理解できよう。日本演劇学会関西支部長、日本演劇協会顧問などの要職をつとめている。

山本修二が1958年から1961年にかけて朝日新聞夕刊に発表し好評を博した連載「演劇寸史」に「カブキの危機」という一文があるが、ここには山本の演劇に対する姿勢が明瞭にうかがえる。これまでカブキ劇は数度の危機—承応元年の若衆カブキの禁止令、天保13年の緊縮政策令、昭和22年のアメリカ進駐軍による、敵討ち、封建的忠義、国家・天皇への讃美などを理由とするカブキ劇の制限—に直面してきたという。だが、カブキ劇はこうした上からの激しい圧迫にたえて生き残れたのも「民衆の支持」があったゆえであったと山本は指摘する。そして、この支持をうしなつた時こそ、「日本古典劇の滅びる時である」と直言している。演劇研究者の在り方を示す言葉であろう。

後に小説家になる菊池寛は、大正14年、山本修二と共著で新潮社から『英国愛蘭 近代劇精髓』を出版した。イギリスとアイルランドの近代劇の通時的展開を作家ごとに跡づけた研究書である

が、「著者序文」において、菊池は山本を京都大学出の新進英文学者であり、劇文学の「稀に見る篤学者である」と紹介し、作家としての自分と学者としての山本が共力した本書は、「理解と研究において」かなり自信をもっていいものであると誇っている。そして「共力とは言え、結果において山本君の努力は私に数倍するのがあったことを感謝」したのである。最後に本書が外国の研究書の「ひきうつし」ではなく、「日本人によって観、日本人によって感ぜられ、日本人によって考えられた英・愛の『近代劇精髓』である」と大書している。



山本邸には菊池が剣豪、武蔵の言葉を自らの心境に重ねたい筆でしたためた色紙が遺されている。墨跡もあざやかな「われ事に於て後悔せず」との言葉は、『文藝春秋』を創刊し新しいメディアを形成していくのに何ら逡巡するところもなく我道を歩んで行った作家の潔い態度を示唆している。

さて、現在の居住者である高木氏は居宅に対する想いを語っている—「家にいるのが大好きだ。古い家とてあちこち修理が必要で費用もばかにならないが、どこにいても落ち着ける空間で、冬など通風のよさが仇となって現代人にとっては凍える寒さにさらされるのだけれど、それでもやはりこの家が良い。田宮虎彦や梶井基次郎といった文学史上に登場し、実際に作品を手にとったことのある人たちが若かりし頃、応接間で義祖父と対面し、ソファに腰かけていたのかと思うと、まだまだ大切にしていかなければならないと切に思っている」。ここで言及されている山本邸の文化的意義を看過してはならないであろう。

8 田宮虎彦と森本薫

1930（昭和5）年、森本薫は旧制三高へ入学し、第2学年のとき山本修二の英語クラスに属する学生になった。後年に小説家になる田宮虎彦も同じクラスに在籍していた。森本は無口で山本宅へ田宮ら学友たちとともに訪ねてきてもほとんど言葉を発せず、弱気な青年そのものであった。同じく田宮も内気さでは森本の比ではなかった。後年、小説家丹羽文雄は田宮の文学を評価して、「田宮君の文学はいわゆる流行作家になれる性質のものではなかった。温厚篤実な性格がそのまま作品に現れている」（「田宮君のこと」『現代日本文学大系 第21巻 月報』昭和42年5月）と指摘している。山本はこうした学生たちの誠実な資質を見抜き暖かく遇した。これは子弟の関係を凌駕した人間的付き合いである。

山本邸には後年著名になる小説家たちが他にも出入りしていた。そのなかに名作「檸檬」の作者梶井基次郎がいた。新劇団結成のため、梶井は何度も外村茂、中谷孝雄などと山本邸を訪れていた。やがて同人誌『青空』が刊行され、巻頭を「檸檬」が飾った。（山本修二「丸善・京都支店」『学鑑 丸善創業100年記念号』[1969年1月号] p.156.）

さて、森本は自らの創作によって脆弱な自己から抜け出しひとつの人格を獲得していった。1933（昭和8）年、京大へ進学し、同人誌『部屋』のなかに発表した「一家風」が「劇作」同人の注目を集め、間もなく『わが家』が築地座で上劇された。『みごとな女』『華々しい一族』『かくて新年は』などを立てつづけに発表し、いちじるしい進境の変化をとげていった。その頃になると、森本は「満身に溢れんばかりの自信」（p.85）をたぎらせ、師である山本の目から見れば、「人間こうまで変わるものか」というほどの変貌ぶりであった。

演劇学者である山本にとっては一篇の劇とても学説のひとつに過ぎなかったが、森本には学説（理論）は実践でしかありえず、彼の「全生活」と不可分であった。戦争末期、ほとんどの劇団が閉鎖、解散に追い込まれていた。森本が属していた文学座も例外ではなかった。そんな時期、山本は東京にいるはずの森本から突然の来訪をうけた。師の前で吐露した意見は深刻であった。解散してしまう方が、芸術的純粋さを保つことができる。でも、自分としてはどこまでも上演にこだわり、森本は「どんな困難の中でも上演をやり続けていくのが本当だと思う」と心情を訴えた。その気迫に圧倒された山本は、「あの晩ほど演劇ひと筋に打ち込んでいる」森本の気高さを見たことがなかったという。山本修二「森本薫と京都」『悲劇喜劇』（1968年10月号）

敗戦後、アメリカ占領軍は映画、演劇に関して制限令を発し、忠義や復讐をテーマとする演目は大幅に制限された。昭和22年、森本も加えて安藤鶴夫、八田元夫、菊田一夫たちが雑誌『演劇人』（昭和21年4月号）を起した。その編集後記には山本のもとへ相談に来た、その後の森本薫の姿が点描されている。名作『女の一生』のあと東京、落合で罹災し、郷里に疎開していた森本が病魔に襲われ、闘病生活を余儀なくされていた。病床を見舞った友人は、森本が劇談に終始し、「文学座を案じ、新作執筆の衝動を鷹揚に説く」気丈な姿に、「友の平癒を祈るや切」との心情をかくせなかった。

山本邸が文化的重要さを強調するのは、何も人間関係ばかりではない。作品のなかで血肉化され骨格となっていたのである。新進作家であった森本薫は新築された山本邸をわが家のように訪れ、二年後に発表された、家族内の恋愛模様を描いた風俗喜劇『かどで』（1935年1月）には新居である山本邸の間取りがそっくり再現されていたのであった。

9 成瀬無極と厨川白村

山本と寿岳を結びつける共通の人間関係として、ドイツ文学者の成瀬無極と京大英文科教授、厨川白村の二人をあげることができよう。

成瀬無極（本名は清、なるせ・むきょく、1885-1958）は、高名なドイツ文学者で、東京帝国大学独文科卒後、京都帝国大学講師、助教授、教授を経て、1945年4月、定年退官し名誉教授となった。教授に任官された翌年1931年、日本ゲーテ協会を創立している。18世紀後半、ドイツで勃発した革新的な文学運動「シュトルム・ウント・ドラング」を「疾風怒濤」と訳したことで知られている。ドイツ文学研究・翻訳に加え、創作では劇作をものして、『加茂川殺人事件』は帝劇で上演された。また創成期のNHKでは放送劇を執筆し声優としても出演していた。教育・研究のほかに翻訳、評論、随筆などでも八面六臂の活躍をした。とくに『東山夜話』（内外出版、1921）、『人間凝視 評論集』（政経書院、1934）、『文芸百話』（第一書房、1934）、『無極随筆』（白水社、1934）、『人生案内』（甲文堂、1936）、『南船北馬』（白水社、1938）、『木の実を拾ふ』（白水社、1940）などに収められた軽妙な随筆は多くの読者を得た。

寿岳の処女作はロシアの文豪トルストイの家出をテーマにしたトルストイの弟子チェルトコフの翻訳『晩年のトルストイ』（岩波書店、大正15年）である。出版の前年から早くも訳稿はできあがっており、寿岳は京大助教授である石田憲次に原文と訳文のチェックを依頼した。そしてどこから出版するかを石田に相談した寿岳は、石田がすでに『改造期の文学者 バーナード・ショウ』、『カ

ーライル研究』、カーライルの翻訳『過去と現在』、『ミル自叙伝』、ラスキン『この最後の者にも』などを出していた弘文堂あたりを紹介してもらえまいかと思案し、石田に相談したところ、さらに訳稿は石田から河上肇に渡った。だが「先生は内容に興味を示されなかった」という石田の言葉とともに訳稿は寿岳の手もとにもどってきた。ただ、翌年、寿岳の読解力を見込んだ河上は子息、政男の英語家庭教師を寿岳に依頼している。

出版の見込みがないこうした訳稿を岩波書店に取り継いだのは京大教授の成瀬無極であった。翻訳書の「訳者序」には「私の最も深い感謝は、この訳書の出版についていろいろお力添えをして頂いた成瀬無極先生、石田憲次先生、並びにこのぎこちない翻訳の出版を引き受けて下さった岩波書店に捧げられねばならない」(p.4)と認められている。

「私の処女作と河上肇博士」(『読売新聞』、1974年4月28日号)という一文のなかで、寿岳は「最初の本が、大学二回生のとき、岩波書店から出たことを私は果報に思う。しかし私にとって、その思い出の最も感激的な部分は、三年後には京大教授の職をやめねばならない河上博士の、親切な校正を経た事実である」とも語っている。だが、実際に岩波書店に紹介の労をはたしたのは成瀬無極であった。向日市立文化資料館に保存されている寿岳宛成瀬書簡をみてもこの経緯を強調して揺らぐことはない。

一方、1912(大正)元年、山本修二は三校に入学したが成瀬から二年間連続ドイツ語を教わる幸運に恵まれた。成瀬の授業は「水ぎわだっており」、難解なドイツ語の原文も「美しいリズムの日本語」に変化し、「口をついて出る警句と皮肉と駄洒落」には学生たちはとうてい太刀打ちできなかった。『文学に現れたる笑之研究』(宝文館、1917)という笑いに関する研究書があるほど、笑いについては理論と実践をいささかも欠かさず、何事でもシャレのめした。成瀬無極の講義に出た私の恩師、増野正衛先生の直話によれば、無極が講義を終了するとき、「ドイツには三文豪あり、ゾーデルマン、ハウプトマン、そしてトーマス・マンという。私の講義も散漫になるからこれにて終了する」といつも講義はこの駄洒落(押韻)でもって終わったという。言うまでもないが、「三文豪」と「散漫」も頭韻をふんでいる。教壇よりも高座かと思まがうほどのみごとな芸である。

10 恩師、厨川白村

厨川白村は明治13(1880)年、京都に生まれ京都一中、三高を経て、東京帝国大学文学部英文科でハーン、漱石の教えを受け、首席で卒業した。漱石の『虞美人草』の「小野さん」のモデルと言われた。五高、三高、京都大学教授。大正12(1923)年9月、鎌倉で関東大震災の津波により逝去した。

山本は友人の矢野峰人とともに京大英文学会を代表して、厨川未亡人に同行して白村の遺骨を迎えるため一週間東上した。地震により火葬場が倒壊しており、山本と矢野は二人で恩師を茶毘にふさざるをえなかった。雑誌『英語青年』は大正12年10月29日号より4号にわたり「厨川白村追悼号」を刊行した。多くの故人を悼む記事、回想記などが掲載された。山本は「厨川先生の著書」を寄稿している。鎌倉に「先生の亡き跡を弔う甲斐なき旅路に向うため」、ゆっくりと筆をとる時間がなく「三時間の間に本稿を綴った」とある。白村が出版した9冊の単行本について論評を加えたものである。他の追悼文が故人との思い出に終始しているのに対して、山本の一文

は本を介在させた恩師との濃密な精神的対話になっている。「私はただ私の書棚に並んでいる先生の著書を描き出して、心に映ってくるさまざまな思い出を乱雑に書きしるしておきたいと思う」(p. 39) と述べている。さらに龍谷大学が発行している雑誌『宗教と芸術』(厨川白村追悼号、大正 13 年 10 月 25 日号) にも山本は「厨川先生の断面」と題した一文を寄稿し、「博識と独創」にあふれる学者の姿を描いている。寿岳が河上肇、新村出、石田憲次らに師事したように、山本は白村の教室で薫陶をうけ、結婚の仲人もしてもらい生涯を通じて敬愛の対象であった。恩師であるばかりか、人生の指標として白村を崇めていた。

山本はとりわけ厨川白村の民主主義的な生き方に多大な共感を寄せていた。寿岳もまた厨川白村の民主主義的姿勢に深い共感を寄せていた。具体的に言えば、「現行の憲法を貫く男女平等・人権尊重の思想はつとに白村にあり、京大文学部当時、女子入学希望者のために門戸を開けと教授会の席上で最も熱心に主張したのは彼であった」(「私の戦中戦後史抄」、p. 992) と指摘している。とくに女性の大学入学の件では長女が京大入学を希望したが門戸は閉ざされたままで、代わり女性の学生を受け容れていた東北大学に入学せざるをえなかった切実な問題を体験していた。よって白村が恋愛至上主義者であるというような浅薄な世評には組せず、女性の自立を促し男女平等をうたっていた白村には強く共鳴した。

11 反戦の表明

寿岳家、山本家は表面的な相違は明白であるにもかかわらず、より印象的な類似点を示しており比較と検討を自ずと誘いだす。そのなかでも両者に共通するのは強い反戦態度である。子息は新築された昭和 8 年の動向を冷静に記録している。昭和 7 年秋、満州事変に関する国際連盟の調査リットン報告書が発表された。発端となった事件での日本軍の行動は自衛手段とは認め難く満州国政府は自発的独立ではない。結論として、満州を完全な自治体とするよう、日本軍の撤退が勧告された。2 月にこの報告書に基づいた十九国委員会の勧告が作成されたが、日本は受け入れ難いと拒否した。総会に上程され 4 2 対 1 (日本) で採決されたのに、松岡洋右全権は連盟脱退を宣告して議場を去った。さらに続け、「連盟加盟国からは総スカンを食ったのには気付かず、軍部の宣伝の尻馬に乗った新聞雑誌の報道に踊らされて、僕たちは彼に英雄のような喝采を浴びせた。しかしこれが日本の国際的孤立の第一歩だった」と戦争への発端を語る。「松岡はその後外相となり、ヒトラー、スターリンに伍せるのは自分だけとの思い上がりから、三国同盟締結後、日ソ中立条約を結んだが、彼の重なる独断行動は太平洋戦争へと破滅の道を促進することになった」と動向を記述し、「民主主義にも欠陥はあるにしても、これに反する独裁的行動は必ず国民に付けを回す悲劇を生むとの教訓を忘れてはならない」と厳しく戒めている。そして、この自戒は現在にも通じることを指摘している—「戦争が国民生活破滅への道を辿ることを、身を以て感じたことのない、跳ね上がりの政治家が多くなった世の中、憲法を重んじるという当り前のことを少しは見習って欲しい。」戦後、戦争への道を二度と歩んではならないとした寿岳の反戦活動の抗議の声と酷似していよう。

12 澤島英太郎の逝去

両家の居宅が新築されてからほぼ 10 年後、設計家のうえには大きな変化が生じていた。戦争

が具体的に姿を現してきたのである。昭和17年2月20日に出版された、遺著になった澤島英太郎、吉永義信著『二條城』は、共著になっているが単著とみなしてよい。と言うのも全10章のうち9章までが澤島の筆になり、第10章の庭園部分のみが吉永義信の執筆である。「昭和16年10月新京にて」と澤島自らが書いた「標題」には「この[昭和16年]6月以来満州国の國務院建築局に勤務することになったので、一つは記念の意味も加えてここに小著にまとめることにした」(p.2)とある。「記念」とは日本での仕事に区切りをつけるというくらいの意味であったのであろう。

背景には満州への転勤がかなり急であり、本務に専念せざるをえない状況があった。「昭和16年10月新京にて」とあるように満州国の首都、新京(現在の中華人民共和国吉林省長春市)に勤務していたのである。そして吉永義信の「付記」によれば、

「真摯なる日本建築史家・澤島英太郎が文部省宗教局保存課にあって永らく古建築物の保存に尽力せられ、今初夏満州国に御栄転せられた」(p.112)とあり、澤島の言葉と一致する。第四番目の刊行として予定されていた同書の広告をみれば時代背景がよく理解できよう。東京大学の安田講堂の設計者として知られる東大建築科教授、岸田日出刀の『ナチス独逸の建築』は戦時下のドイツ建築を批判して物議を

1	國民學校	伊藤正文著
2	工場建築	平岡正夫著
3	日本住宅小史	關野克著
4	二條城	澤島英太郎著
5	ブルーノ・タウト	藏田周忠著
6	建築と火災	内田静文著
7	住宅問題	西山卯三著
8	ナチス獨逸の建築	岸田日出刀著
9	規格家具	劍持勇著
10	樺太アイヌの住居	山本祐弘著
11	住宅の平面計畫	市浦健著
12	防空と偽装	星野昌一著

以下續く。昭和十六年出版部印刷人・澤島英太郎・岸田日出刀
東京大学出版部
昭和十六年六月二十日

かしました。澤島英太郎は満州の地で没したのであった。

昭和7年に創元社から上梓した山本修二の研究書『英米現代劇の動向』の装幀をしたのは、寿岳であった。おそらくこの事実を山本は知らなかったのではあるまいか。両者のかすかな淡い接点である。だが両者はずっと大きな大団円を描いていたのである。同じ建築士、澤村英太郎に同時期に居宅を設計・建築してもらった寿岳、山本いずれも書齋に留意しそこから文化発信をたえず持続した。そして書齋の中核を形成した蔵書は、図らずも同じ甲南女子大学図書館に収蔵され、「寿岳文章文庫」「山本修二文庫」と命名されて図書館の同じフロアに設置されている。京都大学、英文学という縁故で結ばれた両者が、もっとも重視していた蔵書で相まみえることになるとは、まさに奇縁としか思われぬ。

謝辞 山本修二邸にお招き下さり、邸内を案内して下さり詳しいご解説をいただきました高木啓道、眞由様ご夫妻に心から感謝します。ありがとうございました。

三宅忠一の個人作家論を再考する

——寿岳文章はなぜ三宅を支持したのか——

島貫 悟

1. 個人作家問題と三宅忠一

民藝の展覧会に並ぶ河井寛次郎（1890年～1966年）や濱田庄司（1894年～1978年）等の作品を見て、果たしてこれらは「民藝」なのだろうかという素朴な疑問をもつ人は少なくないように思われる。民藝の提唱者である柳宗悦（1889年～1961年）も、日本民藝館でしばしばそうした疑問を投げかけられたという。

私は屢々民藝館で、河井や濱田の作品を見た人達から、「是等の品は民藝品ではないではないか」といふ疑ひのやうな問いを受けます。現に日本民藝館の一室には、いつも個人作家の作品が陳列されてをりますので、色々の混乱が見に来られる方達の心の中に起るのだと思はれます。無理もありません。一般の工人達が作る民藝品と作家の作品とには、色々な点で対蹠的な性質が見られるからであります。

一方は実用を旨と致しますのに、他方は鑑賞の品に傾き易く、一方の多量性に対しては、他方が少量となり、従つて一方が廉価なのに比べて、他方はどうしても高価になりがちであります。更に又一方は共通する伝統に依存する事が多く、他方は独自の創造の道を歩みます。従つて製作意識の点でも、両者には著しい差異が現はれます。誰にも以上数々の事が気付かれますので、作家品は民藝品ではなく、この二つは互に相反し矛盾するものの如く受取られることとなります。¹

「民藝」とはそもそも「民衆的工藝」の略称であり、「名もない工人達が作る実用的工藝品²」を指す概念である。それゆえ民藝は本来、実用を旨として多量に生産され、廉価であり、その意匠や製法は各地に伝わる伝統に依存する場合が多い、という特徴をもつ。それに対して作家品は「鑑賞の品に傾きやすく」、少量しか生産されないため高価となり、その意匠や製法は作家の個性を反映して「独自の創造の道」を歩むこととなる。このように、「工人達が作る民藝品と作家の作品とには、色々な点で対蹠的な性質が見られる」。したがって当然と言えば当然であるが、河井や濱田のような個人作家の作品は民藝品ではないのである³。だが、もしそうであるならば、

¹ 柳宗悦「作家の品と民藝品」、『民藝』92号（1960年8月）、『柳宗悦全集』全22巻（筑摩書房、1980年-1992年）14巻、55頁。以下、『柳宗悦全集』は『全集』と略記する。

² 柳宗悦「日本民藝館」、『民藝手帖』108号（1959年5月）、『全集』16巻、182頁。

³ 日本文学研究者のドナルド・キーン（Donald Lawrence Keene、1922年～2019年）はその日本文化論のなかで民藝運動に言及し「〔民藝派の〕有名な陶工の作品」が高価であるのは民藝の主張と矛

河井や濱田のように民藝運動に加わった個人作家⁴の存在をどのように理解すればよいのかという疑問が残り、なかにはそうした個人作家の作品が民藝館に展示されているのは矛盾しているのではないか、と考える人もいるであろう。

柳の生前に、民藝協会内部でこの点をもっとも鋭く批判した人物が、本稿で扱う三宅忠一（1900年～1980年）であったことはよく知られている。三宅は、1935年頃に『工藝の道』を読み、柳の思想に共鳴して民藝運動に加わった⁵。その後三宅は「日本民藝協会の有力なメンバーとして⁶」戦後は北海道で十ヶ所に上る協会を結成し⁷、さらに1949年に大阪に移ると、翌年同地に日本工芸館を創設して積極的に運動を推進した⁸。また、この間三宅は、大阪の肉料理店スエヒロの経営にも携わっており（1955年以降は社長）、店でも民藝の食器を実際に使用することで産地を経済的に支援するとともに、大衆への民藝の普及に努めるなど辣腕を振った⁹。

だが三宅は、1955年に日本工芸館の機関紙として『日本の工芸』を創刊すると同誌に連載した「民藝運動の道」と題した論考のなかで民藝協会のあり方を厳しく批判した。三宅の論考の内容はすぐ後で具体的に見るが、とりわけ三宅が問題としたのは、戦後の民藝運動が個人作家中心に進んできたという点であり、三宅はその解決策として、個人作家の活動を民藝運動から分離すべきであるとする主張を展開した¹⁰。しかし最終的に三宅による提案は民藝協会に受け容れられず、

盾すると語っている。そこからキーンは「海外で『民芸』を唱える人たちの理論的根拠はまったく薄弱なものであると思われる」と述べているが、このキーンの議論は河井や濱田のような作家の作品と民藝品とを混同したものにほかならない。ドナルド・キーン「日本文化の理解を妨げるもの」（1955年5月）、『碧い眼の太郎冠者』（中央公論社、1957年）、『ドナルド・キーン著作集』8巻（新潮社、2013年）28-29頁。なお柳はキーンの批判に対して「何を民藝と思ひこんでいるのか、見当違いの議論なのである」と述べている。柳宗悦「民藝陶器」、「山陽随筆」『山陽新聞』（1955年6月）、『全集』18巻、650頁。

⁴ 柳は、河井や濱田のような作家をどのように呼ぶのが適切かという問題に関して、「民藝作家」という呼称は「字句の乱用で、混乱を来すばかりである」と語っている。柳「民藝陶器」、『全集』18巻、650頁。実際、民藝の本来の語義を踏まえれば「民藝作家」という呼び方はひどく曖昧であることから、「民藝運動に加わった個人作家」ないしは「民藝派の個人作家」という呼称が適切であると考えられる。

⁵ 富永静朗『民芸如花——三宅忠一』（日本工芸館、1981年）11-19頁。

⁶ 水尾比呂志『評伝 柳宗悦』（ちくま学芸文庫、2004年）424頁。

⁷ 三宅忠一「民藝運動の道（23）」、『日本の工芸』29号（1958年2月）1頁。

⁸ 富永『民芸如花』42-46頁。

⁹ 三宅「民藝運動の道（25）」、『日本の工芸』31号（1958年4月）1頁。

¹⁰ 熊倉功夫は、三宅よるこの論争以前にも、日本民藝協会では1939年に、たくみ工芸店における作家品の扱いをめぐる『月刊民芸』誌上で論争があったことを指摘している。詳しくは、熊倉功夫『民藝の発見』（角川書店、1978年）148-151頁を参照。また同じ1939年8月に、青森県民藝協会の創設者である相馬貞三（1908年～1989年）等の主催により弘前市で開催された「民藝作家十氏」展の招待状には次のように記されており、民藝品と作家品の関係に対する問題意識が民藝協会において全

三宅は 1959 年に協会を脱退し、大阪で新たに日本民芸協団を立ち上げた。その結果、民藝組織は民藝協会と民芸協団の二つに分裂し、今日まで至ることとなった。

以上の経緯から、三宅の主催した民芸協団の活動は、これまで民藝運動のいわば傍流とみなされてきた感が否めず、三宅について詳細に論じた研究としては、濱田琢司による論考がある。濱田は、民藝品の生産と消費に関する考え方について三宅と柳の立場を比較し、両者の差異を分析している¹¹。だが、民藝運動における三宅の位置付け、とりわけその個人作家論に対する評価は、いまだ十分に定まっていまいように思われる。

三宅が民藝協会から脱退した後も、日本工芸館の理事長として三宅を支え続けた英文学者の寿岳文章（1900 年～1992 年）は「三宅忠一を除外して柳の民藝運動は語れない（中略）たくましい実行力を持ち、強い信念に生きた三宅忠一の実像を知ることは、柳宗悦の存在を高めこそすれ、決して低めはしないであろう¹²」と述べ、三宅研究の重要性を示唆している。そこで本稿では、民藝運動における三宅の位置付けを再考するため、民藝と個人作家の関係をめぐる三宅と柳の主張を比較し、両者の思想的関係を明らかにするとともに、寿岳が三宅の立場を支持した理由について検討したい。

以下ではまず、三宅による個人作家論の内容を整理したうえで、三宅に対する従来の評価を確認する（第 2 節）。次に、『工藝の道』における柳の個人作家論を分析し、その内容が三宅の主張の根拠となったことを示すと同時に、柳の主張が理論的問題を孕んでいたことを明らかにする（第 3 節）。その上で、柳が戦後に著した後期の工藝論では、民藝と個人作家の関係についての柳の考えに変化が見られることから、その内容を分析する（第 4 節）。最後に、寿岳が三宅を支持した理由を検討するため、前期から後期にかけての柳の工藝論における社会性の後退という問題を考える（第 5 節）。

2. 三宅の個人作家論とその評価

民藝運動と個人作家の関係をめぐる三宅の主張とは次のようなものであった。

職人は美を追わないで用を追っかけて物を作るが、作家は用を追わず美を追っかけている。この点作家と職人の相違が大きく開く。（中略）民芸運動の道を語るとなれば、民芸の内輪の者の中に作家を置くことは出来ないのである。（中略）私は、私の持論としていつも強調しているのは、

国的に共有されていたことが窺える。「民器と工藝作家とは遂には密に相結ばれねばならぬと存じます。しかも従来この二者が、その道の上に於て各がじしやゝもすれば乖離の傾向にのみあり立ちしことは、器にとりても、亦これを用ふる人々にとりても、まさに一の悲劇たるを免れ得ませんでした。」だが、こうした問題意識のもとに企画された同展の名称に、後に民藝協会では柳の考えに従って使用が慎まれることとなる「民藝作家」という表現が使われていることは（註 4 参照）、この時期には基本的な用語法のレベルで個人作家論の土台がいまだ整備されていなかった事情が窺える。

¹¹ 濱田琢司『民芸運動と地域文化』（思文閣出版、2006 年）251-280 頁。

¹² 寿岳「序」、富永『民芸如花』III 頁。

民芸協会を発展的に解散させて、新しく新生活研究会（仮称）を組織し、その中に民芸部と作家部を置き、民芸品と作家の作品の区別をハッキリさすか、或は、作家が民芸協会から脱退して別に作家協会を興すか、どちらかに区別しなければならないというのである。¹³

はじめに、三宅は工人と作家の製作意識が大きく異なることを指摘する。すなわち、先に見た引用で柳が語っていたのと同様に、工人は実用性を第一義として品物を作るのに対し、作家は美を目的として作品を制作することから、作家にとって実用性は第二義的な問題に留まると三宅は述べる。だが三宅はここからさらに、工人と作家の製作意識がそのように根本的に異なる以上、工人による実用品の生産を奨励する民藝運動において、作家の同人が中心的役割を果たすことは矛盾していると主張し、民藝運動から個人作家の活動を分離することを提唱したのである。

なかでも三宅が特に問題視したのは、個人作家が民藝の産地に赴き、工人たちの生産を指導するという運動の方法であった。三宅はそうした方法について、「素直に伝統を継いでいた各地の民芸が、協会同人の指導を受けたトタン、変てこなものになりさがった例は少ない¹⁴」と述べ、「原理の相反する立場にある作家が、分野をわきまえず、民芸に手を染め協会を指導するに至っては筋違いも甚だしいと言わねばならない¹⁵」と批判した。実際、民藝協会の会長を務めた水尾比呂志（1930年～2022年）は個人作家による指導について、「人と場合とによって、結果には成功もあり失敗もあった。仕事の稔りは作家たちに豊かで、彼等の作品は民藝の滋養を吸収して美しく育っても、工人の作物は必ずしも期待通りではなかった場合もある¹⁶」と証言している。三宅がそうした問題に対する解決策として、民藝協会の改組という大胆な方法を提案したことは、いかにも会社経営を手掛ける実業家らしい発想であったと言えるかもしれない。だが三宅は「柳先生に弓ひくものと攻撃されたこともしばしばあった¹⁷」と述べており、三宅に対する協会内部の風当たりは強かったようである。最終的に三宅の提案は受け入れられず、三宅が協会を脱退することとなったことは先述の通りである。その後、三宅の組織した日本民芸協団では作家による民藝産地の指導は行わず¹⁸、また日本工芸館でも作家品は展示せず、工人たちにより作られた民藝品のみを展示したという¹⁹。

三宅による以上の言動について、水尾は次のように否定的な評価を下している。

柳理論の正しい実践と唱えてはいても、三宅の見解と行動は、明らかにそれとは異なる性格のものであった。（中略）作家と工人の協力の失敗を、直ちに方法論の誤りとするのは短絡に過ぎる。

¹³ 三宅「民藝運動の道（5）」、『日本の工芸』10号（1956年6月）1頁。

¹⁴ 三宅「民藝運動の道（2）」、『日本の工芸』7号（1956年3月）3頁。

¹⁵ 三宅「民藝運動の道（13）」、『日本の工芸』19号（1957年3月）1頁。

¹⁶ 水尾『評伝 柳宗悦』425頁。

¹⁷ 三宅「民藝運動の道（19）」、『日本の工芸』25号（1957年10月）1頁。

¹⁸ 三宅「民藝運動の道（42）」、『日本の工芸』48号（1959年9月）1頁。

¹⁹ 熊倉功夫「解説」、寿岳文章『柳宗悦と共に』（集英社、1980年）344頁。

それは実際面での運用の不備から生じたものと見るべきで、状況に適応する措置を講ずることで十分に改善され得た、と考えられる。三宅は、それを徒に声高にあげつらうのではなく、作家と工人の間に身を置いて、慎重に実情を検討し改善の方途を探るべきではなかったか。²⁰

水尾は、「作家と工人の協力の失敗」は「実際面での運用の不備から生じたものと見るべき」であるとして、民藝組織からの作家の分離を主張した三宅の言動は誤りであったと主張する。だが、水尾によるこうした批判は、少なくとも三宅には受け容れ難いものであったと思われる。なぜなら三宅は、工人と作家の製作意識がまったく異なることことから、両者の協力はその実際的な運用以前に、原理的に不可能であると考えていたからである。また水尾は、そもそも三宅の主張は柳の民藝理論とは明らかに異なるものであったと述べているが、この点も三宅の言説と対立する。というのも三宅は1957年に書いた「民藝運動の道」のなかで、「私は三十年昔、柳先生が開かれた民芸運動の道を、そのまま忠実に守り通しているつもりである²¹」と述べていたからである。したがって、三宅に対する水尾の評価の当否を判定するためには、以上の認識のすれ違いがなぜ生じたのかを明らかにする必要があるが、そのためには三宅と柳の主張の異同を詳細に分析する必要がある。

他方で、水尾とともに『柳宗悦全集』の編集に携わった寿岳は、水尾とは対照的に、三宅の立場を擁護する考えを次のように語っている。

三宅さんは日本民芸協会をはなれ、日本民芸協団をおこした。古義に対する新義の意味をもつと見ては誤りであろうか。(中略)つまり高野山の現状にあきたらない覚鑿の気概に通うものが、三宅さんの心中に鬱積していたのだと思う。(中略)いわば民芸の法を守ろうとする三宅さんに対して、協会がわの人も、もっと虚心に、もっと無私に、親しみを持つべきではないか。²²

寿岳はここで、三宅を平安時代後期の僧である覚鑿(1095年～1143年)になぞらえている。覚鑿は高野山で真言宗の改革に努めたが、周囲の僧達の反撥に遭い、根来寺に退くこととなった。新義とは、覚鑿を宗祖とする真言宗の派を指し、古義とはそれ以外の諸派を指す概念である。民藝協会と民芸協団の関係を古義と新義に重ねるのは、いかにも真言宗の寺院に生まれ育った寿岳らしい喩えだが²³、この喩えは寿岳が三宅の言行をいかに重要な意義をもつものとして捉えていたかを示唆している。寿岳はまた、三宅は「民芸の法を守ろうとする」のだと語っているが、この見方は水尾とは対照的であると言わなければならない。なぜなら寿岳はここで「法」という言

²⁰ 水尾『評伝 柳宗悦』425頁。

²¹ 三宅「民藝運動の道(19)」、『日本の工芸』25号(1957年10月)1頁。

²² 寿岳文章「私の民芸教室」、『日本の工芸』70-78号(1961年7月-1962年3月)、『柳宗悦と共に』86頁。

²³ 寿岳文章「略年譜」、『わが日わが歩み』(荒竹出版、1977年)407頁。

葉を、サンスクリット語の dharma の訳語で「万古不易の法²⁴」といった意味をもつ仏教用語としての法を念頭に置いて使っていると考えられるからである。すなわち寿岳は、三宅の言動を、民藝運動においてつねに忘れてはならない重要な真理を守ろうとするものとして高く評価しているのである。

このように、三宅の個人作家論に対しては、肯定的評価と否定的評価の双方が存在することから、民藝運動における三宅の位置付けを再考するためには、そうした二種類の評価のいずれが正当なものであるのかを判定する必要がある。そしてその際には、個人作家に関する三宅の主張と柳の主張の関係をどのように捉えるかという点が最大の問題となる。

そこで次に、個人作家に関する三宅と柳の主張を比較し、その関係を分析したい。その際、先の引用で三宅が「三十年昔、柳先生が開かれた民芸運動の道を、そのまま忠実に守り通している」と語っていたことに示唆されるように、三宅の主張は柳の工藝論のうちの前期のもの、特に最初の工藝論書である『工藝の道』に多く依拠していることから、以下では『工藝の道』において、柳が個人作家の存在をどのように位置付けていたのかを三宅との比較の視点から検討する。

3. 柳の前期工藝論における個人作家の位置付け²⁵

『工藝の道』の冒頭部分で、柳は同書の要点を次のように要約している。

私が此書に於て最も強めて説かうとする所は、如何に工藝美が、「民衆」とか「実用」とか「多量」とか「廉価」とか「通常」とか云ふ平凡な世界と、深い結縁にあるかを示す事にあつた。否、それ等の性質こそ工藝美の基礎となつてゐるのを語るにあつた。だが自らでは力弱い彼等であるから、此不思議を演ずるのは、彼等以上の何ものかでなければならぬ。此匿れた背後の力を見究める事が私の求めであつた。私は彼等を守護するものが自然の叡智であり、相愛の制度であるのを見た。無心な自然への帰依や結合せられた衆生の心がそこに見える。その美は他力美である。此美に対しては、如何に「知識」とか「個性」とか「稀有」とか「高価」とか「異常」とか云ふ事が、いとゞ小さく見えるであらう。²⁶

以上の引用の始めと終わりで柳は二つの立場を比較しているが、これは工人と個人作家によるものの作りの比較にほかならない。個人作家は高度な知識や才能に恵まれた存在であるのに対し、工人たちは必ずしもそうしたものをもたない「力弱い」存在である。にもかかわらず、工人たちの手から美しいものが生み出されるのは「匿れた背後の力」が働くからであると柳は考える。すな

²⁴ 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編『岩波仏教辞典』第2版（岩波書店、2001年）「法」の項、901頁。

²⁵ 本節と次節の内容は、拙著『柳宗悦とウィリアム・モリス——工藝論にみる宗教観と自然観』（東北大学出版会、2024年）第1章「柳の工藝論と仏教思想」の内容と一部重複する。

²⁶ 柳宗悦『工藝の道』（ぐろりあそさえて、1928年）、『全集』8巻、62頁。

わち、工人たちは「自然の叡智」や「相愛の制度」といった、個を超えた大きな存在に自らを委ね、無心で働くことで、素朴で清らかな美を生み出すことができると柳は考えたのである。それゆえ工藝美は「他力美」であると柳は主張する。「他力」とは、仏教で浄土教の立場を表す概念であり、阿弥陀仏に頼ることを意味する。すなわち柳は、浄土教の信者が阿弥陀仏を頼って救われることと、工人たちが個を超越した存在に自らを委ねることで美しい品物を製作することとのあいだに、深い類似性を見出したのである。そして、工人たちによるそうした製作は、個人作家が美を狙って意匠を凝らすこととは対照的であることを柳は強調し、ここでははっきりと前者の道、すなわち無名の工人が生み出す「平凡な」美の世界こそが工藝美の本道であり、個人作家による個性的表現は、工藝の世界においてはいわば脇道に過ぎないと主張しているのである。

また、柳は同書において「個人作家の作は純工藝ではなくして美術である²⁷」と述べた上で、「個人的作品は主我の念に傷ついてはみまいか。自己の個性への過信がありはしまいか。個性の道が果して最後の道であるか。工藝は自力の道であるか²⁸」と語り、個人作家による制作の難点を指摘している。ここで「自力」とは、主に禅宗において自己の力で悟りに至ることを意味し、浄土教における他力との立場と対比される概念である。このように、『工藝の道』においては、個人作家は自力道に従い美術の範疇に属するのに対し、工藝の世界においては他力道に従う工人たちの製作がその中心をなすという、明らかな二分法的構図を見て取ることができる。それでは、『工藝の道』において、作家が工藝の世界に入り込む余地は認められていないかという点、そうではなく、柳は個人作家の役割について次のように語っていた。

店頭で鬻ぐ品々を見ると、伝統的なものを除く凡ての新しい品で、質の粗悪と工程の粗雑と、そうして美の低下とを示してみないものはない。(中略)既に美を失つた今日、誰か出て美の目標を示さない限り、正しい工藝が甦る事はあり得ないであらう。而も工藝は依然として民衆の力なくば成り立ち得ない。かくして吾々に残された道は一つよりない。理解ある個人と、民衆との結合、よき指導のもとに集る労働、此事をおいて来るべき工藝の正しい生長があらうか。²⁹

前近代においては、工人たちが自然や伝統に従い、無心でもの作りをするなかで自ずと美しいものが生み出されたが、近代においては工藝の分野において「美の低下」が著しいと柳は述べる。それゆえ「正しい工藝」を復興するためには、工人たちに「美の目標」を示す「理解ある個人」が要請されると柳は主張するのである。そして柳は、工人と個人作家による協力の一つのモデルとして、中世ギルドの「工匠 Craftsman」と「師匠 Master-artisan」の関係を参照している³⁰。柳

²⁷ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、166頁。

²⁸ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、173頁。

²⁹ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、175頁。

³⁰ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、175頁。

はまた「将来個人作家と民衆との関係は、丁度僧侶と平信徒との関係でなければならぬ³¹」と語っており、これらのイメージにおいては、個人作家と工人の間に、ある種の上下関係が設定されているようにも見える。

だが、そのように、個人作家が工人を導くという構図は、工藝美を「他力美」と捉え、個人作家の制作はそれとは異質な「自力の道」であると柳が捉えていたことと矛盾するように見える。三宅が、「原理の相反する立場にある作家が、分野をわきまえず、民芸に手を染め協会を指導するに至っては筋違いも甚だしいと言わねばならない」と語ったのは、まさにそうした矛盾を指摘したものにほかならないと言えるであろう。また、柳は工人たちによる無心の製作を称揚する一方、個人作家による作為的表現を厳しく批判していたことを踏まえれば、個人作家が工人たちを導くという構図は一層矛盾しているように思われる。それゆえ、中見真理が「このような事態〔三宅の民藝協会離脱〕を招いた原因のひとつには、民芸運動と個人作家の関係の規定の仕方が、明確さを欠いていたことがあげられる³²」と述べていることは、正鵠を射た指摘である。

さらに、以上のような『工藝の道』における工人と作家の関係についての曖昧な規定は、近年の研究においても、柳の民藝論がもつ欠点としてしばしば批判されてきた。

例えば、伊藤徹は『柳宗悦——手としての人間』（平凡社、2003年）のなかで、知識を持つ個人作家が工人たちを導くという構図が「美に関する知の優位」の観点を孕んでいると指摘し、「この図式は、柳が主張してきた『工芸美の源泉としての工人たちの無知無力さ』と矛盾するといわねばならない³³」と述べている。また、西岡文彦は『柳宗悦の視線革命』（東京大学出版会、2023年）のなかで「〔柳は〕作家が職人の世界に身を投じることが双方の利益になると説いているのだが、作家が自力の道を行き、民芸の美が他力の賜物である以上、民芸の作家が存在すること自体が矛盾しているともいえる³⁴」と述べている。この西岡の理解は、民藝運動への作家の関与を矛盾と捉える点で、民藝協会からの作家の分離を提唱した三宅の主張と軌を一にするものである。以上のように、『工藝の道』における工人と個人作家の捉え方には、矛盾する部分があり、それが混乱の原因となってきたと考えられる。だが、柳は戦後に書いた後期の工藝論（しばしば「仏教美学」と呼ばれる）において、矛盾を克服することを試みている。結論を先取りすれば、三宅や民藝理論の批判者たちの多くは、『工藝の道』をはじめとする前期の工藝論のみに依拠し、後期工藝論の内容を十分に考慮していない場合が多い。だが、柳の思想を正確に理解するためには、前期から後期にかけての思索の展開を正しく捉える必要がある。そこで、次に柳の戦後の著作における個人作家の位置づけを検討しよう。

³¹ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、176頁。

³² 中見真理『柳宗悦——時代と思想』（東京大学出版会、2003年）282-283頁。

³³ 伊藤徹『柳宗悦——手としての人間』（平凡社、2003年）193頁。

³⁴ 西岡文彦『柳宗悦の視線革命——もう一つの近代日本美術史と民藝の創造』（東京大学出版会、2023年）330頁。

4. 柳の後期工藝論における個人作家の位置付け

柳は1952年に出版された『鈴木大拙選集』の「解説」のなかで、仏教における自力と他力の関係について次のように述べている。

禅門をくぐるのと、浄土門をくぐるのとは、東と西とに分れるやうに云はれてゐるが、至り盡す所は同じなのではないか。自力他力、難行易行、聖道浄土と、はつきり分けはするが、それは道筋の違ひといふまで、何れも頂きを目指せば、一所に会うのだと思はれてならぬ。³⁵

ここで柳は、仏教における自力と他力の関係を登山のイメージで捉え、二つの道は異なっても、互いに究め尽くせば同じ頂きに至るという理解を示している。

さらに、2年後に書かれた論考「自力と他力」においては、茶道具に関する洞察を通して、以上のような仏教理解と工藝論とが結びつけられている。柳は、侘び茶の開祖である村田珠光(1423年～1502年)ならびに、千利休(1522年～1591年)の師である武野紹鷗(1502年～1555年)がいずれも禅宗と関わりの深い人々であったことを指摘した上で³⁶、次のように語っている。

ここで私が人々の注意を求めたいのは、茶器の美が自力門の禅僧や、すくなくとも禅教養のある人々から深く味はれたといふ事実であります。(中略)ですが実に面白いことには、茶器に現れたその無碍の美は、悉くが他力的な道を経て現れてゐることです。(中略)他力的な美しさが、自力的にも讃へられるといふその事実には、絶大な拍手をおくりたいのであります。なぜなら、そのことは、純乎たる他力の美が、自力の美と遂には一如であるといふことをかたるからであります。³⁷

柳は、自力門に関わりの深かった初代茶人たちが讃えた茶器の美は「悉くが他力的な道を経て現れてゐる」という逆説的な事態を指摘する。例えば、よく知られているように、侘び茶で珍重される井戸茶碗は、もとは朝鮮の無名の陶工が作った民衆の日常雑器であった。柳がそうした無名の工人の作る民藝品の美を「他力美」という概念で捉えたことは先に見た通りである。それゆえ、茶の湯の歴史は「他力的な美しさが、自力的にも讃へられるといふその事実」を示していると柳は述べ、「純乎たる他力の美が、自力の美と遂には一如である」という理解を示している。ここには『工藝の道』で示された自力と他力に関する二分法的な理解からの脱却の兆しが現れている。そして、他力美と自力美が究極的に通じ合うということは、無名の工人による製作と個人作家による制作も、最終的には通じ合うということにほかならない。そのことを、柳は晩年に著した「作

³⁵ 柳宗悦「妙好人の存在」、『鈴木大拙選集』6巻(春秋社、1952年)、『全集』19巻、431頁。

³⁶ 柳宗悦「自力と他力」、『在家佛教』2号(在家佛教協会、1954年5月-7月)、『全集』18巻、54頁。

³⁷ 柳「自力と他力」、『全集』18巻、59頁。

家の品と民藝品」(1960年)という文章において、次のように明快に語っている。

吾々は重々民藝品の美を見守つて参りましたが、その美しさに個人の道を通して少しでも近づいて行かうとするのが、右の作家達〔河井や濱田〕の心や技の遍歴の跡ではなかつたでせうか。どんな品が美しいかを、身を以て体験してゐる作家達は、その美の域に近づく努力を個人として、怠るわけには参りません。只個人の道を歩む事として、工人達の歩みと異つてくるのは、当然な成り行きであります。従つてその結果にも様々な違ひが必然に現はれて参ります。之を非個人的な他力の道と個人的な自力の道とに分けて考察は致し得るものの、自他に分けますと、如何にも互に矛盾する二つの道と考へられ易いのでありますが、果たしてさうでありませうか。それは丁度一つの山を登るのに、一方は右側の道から、他方は左側の道から登るやうなものではないでせうか。なるほど登る道は左右に分かれは致しますが、段々と登つて頂きに達すれば、同じ一つの高嶺で相会ふであります。之は丁度偉い禅僧と無学な妙好人との関係と同じで、両者の歩む道は違ひますが、信の場に於ては、同じではないでせうか。それ故民藝美と作家美とが共に至り尽すなら、お互に一つの点に結ばれて参ります。又さうであつてこそ、有難いと存じます。³⁸

ここで柳は再び登山の例を用い、作家と工人の関係を説明している。仏教において、自力の道と他力の道が頂きにおいて出会うように、作家と工人の歩みは異なつていても「共に至り尽すなら、お互に一つの点に結ばれて参ります」と柳はいう。また、柳は、河井や濱田等民藝派の個人作家たちが、民藝の美に近づこうと努力してきたと述べているが、これは『工藝の道』で語られた個人作家が工人に美の理想を示すという構図とは逆の関係になっている。さらに柳は、個人作家と工人の関係を禅僧と妙好人の関係に重ね合わせていることも注目される。妙好人とは、浄土真宗の在家信者のうち特に信仰の篤い人々を指す。すなわち、他力道を極めた妙好人の宗教的境地が、自力道の禅僧と同様に深遠なものであるように、個人作家と工人が互いに究め尽くした美に上下の区別はないと柳は考えているのである。それゆえ、個人作家の作品が工人の参考となることもあれば、工人の作が個人作家にとって手本となることもある。このように、柳の後期工藝論においては、仏教における自力と他力の関係についての理解に立脚して、個人作家と工人の関係に対する二分法的な理解が見直され、前期工藝論に見られた矛盾が解消されている。

そして、民藝運動における個人作家の役割を誰よりも厳しく批判したのが三宅であったことを考えれば、柳が戦後に展開した以上の思索は、三宅に対する応答でもあった。だが、柳の後期工藝論の内容が三宅の考えを変えることはなかった。1959年に『民藝』編集長の田中豊太郎(1899年～1981年)から、名指しこそされないものの「近頃一部で徒らに初期の民芸論を固執して、現実から遊離する偏狭の議論に耽る人もある³⁹」と批判された三宅は、「民芸理論に初期、後期と区

³⁸ 柳「作家の品と民藝品」、『全集』14巻、56-57頁。

³⁹ 田中豊太郎「編集後記」、『民藝』1959年3月号、54頁。

別できるものはないと私は固く信じている⁴⁰」と述べ、以下のように語っている。

民芸出版の初期のもの、「雑器の美」「民藝とは何か」等々数多の出版物をもって〔柳〕会長が強調された民芸理論は、わが国の美術と工芸に一線をひかれた誠に理論整然〔ママ〕たるもので、昭和初年以来今日までこの理論に対し訂正されたことは一度もなかった。私は訂正の余地を残さないいわば不変の理論、永遠不滅の民芸論であることを深く信じている。（中略）今日のごとき個人作家を混入したり、美しいものなら何でもよいという主義では正しい民芸は成立しないのである。⁴¹

こうした文章を読むと、三宅も少し意固地になってしまった感は否めない。三宅は上記で検討した、柳の民藝理論の展開を受け入れることを頑なに拒絶しているように見えるからである。だが、なぜ三宅はそれほどまでに初期の民藝論に固執したのだろうか。その背景には、個人作家問題とともに三宅が言及している「美しいものなら何でもよいという主義では正しい民芸は成立しない」という点が深く関わっていると思われる。こうした三宅の問題意識は、寿岳が三宅を支持した理由とも関係していると思われることから、最後にこの点を検討しよう。

5. 柳の工芸論における社会性——その濃淡の変化

三宅は、「民藝運動の道」の初回の連載において、自らの問題意識を次のように語っていた。

我々がいう民藝運動は民衆生活の美化を対照〔ママ〕としたものである。（中略）どんな貧しい家庭でも容易に受け入れることができる、美しい雑器を提供しようと努めているのである。（中略）然し、柳宗悦先生がこの道の標準を示されて既に30年が経過しているが、過去三十年の歴史の歩みと現在を考えてみるといささか恥ずかしい想いが湧いてくるのである。民芸理論が整然と打ち立てられ、美の標準が定められたのであるから、もっと深く大衆生活に喰い込んでいなければならないが、実際は一寸も前進していないようである。或る意味からいえば前進どころではない。後退した民芸になり、生活美化運動が趣味の遊びに堕ちているのである。⁴²

三宅は、民藝運動の目的を「民衆生活の美化」と捉え、それは「どんな貧しい家庭でも容易に受け入れることができる、美しい雑器を提供」することであると語っている。ここには、民藝運動を通じた社会改良を志す三宅の強い意欲が現れている。そして「生活美化運動が趣味の遊びに堕ちている」という三宅の批判は、民藝運動が社会運動としての性格を失い、純粋な美術運動となってしまうという危惧を表している。

⁴⁰ 三宅「民藝運動の道（38）」、『日本の工芸』44号（1959年5月）1頁。

⁴¹ 三宅「民藝運動の道（38）」、『日本の工芸』44号（1959年5月）1頁。

⁴² 三宅「民藝運動の道（1）」、『日本の工芸』6号（1956年2月）3頁。

さらに、三宅はこの3年後に民藝協会から去ることとなった際にも、次のように述べ、同様の問題意識を表明している。

私はついに意を決し民協結成以来の絆を切って新しく日本民芸協団を結成した。(中略) 貧なるが故に美しい品々を用いない毎日を思い浮べ、最低生活者にも楽しい食事の一時が得られる道はこれだ。自分は生涯この道にあってそういう生活者に光明を与えてあげたい。民芸は生活必需品なるが故に貧〔富?〕者のみに限らない。貧富の差別なく用いるものであるとすれば運動範囲も自ずから広まるだろう。よしこれだ。私は躊躇なく民芸運動に飛びこんだのである。⁴³

ここでも三宅は、民藝運動を通じて貧困問題や格差の改善に貢献することへの意欲を一貫して示している。これらの言説は、三宅の個人作家論の根底に、民藝運動を社会運動として発展させてゆきたいという意識が働いていたことを示唆している。

実際、三宅は次のように語っている。

美しいものなら何でもよい。勿論悪いことではないが、庶民生活を基準において考える場合、美だけを標準におくことは出来ない。価の問題、使い勝手の問題が大切な要素とならねばならない。私達が歩んでいる民芸運動の道は、どこまでも庶民の道であることを忘れてはならないと思っている。⁴⁴

作家は芸術家であるから職人にくらべてたしかに偉大な創造力をもっている。けれどもそれは決して大衆向の創作ではない。作家の創作は用者を主体としたものは決して作らない。⁴⁵

一般に、民藝は多量に生産され、廉価であることから、その生産を振興することは、民衆の生活を改善することに繋がり、社会的意義をもちうる。それに対して作家の制作する作品は、美しさの点では民藝品と同じ頂きに至るとしても、民藝品のように民衆の日常生活を豊かにすることは困難である。民藝運動に対するこうした捉え方について、濱田琢司は「民藝運動を少しばかり几帳面に捉えすぎているようにもみえる」と述べ、民藝運動は「単数形の絶対の存在」ではなく「最初から相反する事柄が同居した複数形のものとしてあった」という見方を示している⁴⁶。実際、民藝運動は無名の工人による民藝品の生産に光を当てた一方で、河井や濱田のように、それまでにない新しいスタイルで創作に取り組む工芸作家を生み出したのであり、その意味で民藝運動が複数の側面をもつものであったことは確かであろう。

⁴³ 三宅「民藝運動の道(45)」、『日本の工芸』51号(1959年12月)1頁。

⁴⁴ 三宅「民藝運動の道(31)」、『日本の工芸』37号(1958年10月)1頁。

⁴⁵ 三宅「民藝運動の道(33)」、『日本の工芸』39号(1958年12月)1頁。

⁴⁶ 濱田琢司監修『あたらしい教科書11 民藝』(プチグラフィック、2007年)51頁。

だが同時に、ここでも前期工藝論と後期工藝論における柳の主張の変化を考慮に入れる必要があるように思われる。というのも、前期から後期にかけて、工藝の社会的意義に関する柳の主張の強さには変化が見られるからである。

『工藝の道』では柳は次のように述べ、三宅と同様に、社会的な観点から理想の工藝のあり方について語っていた。

何故其〔作家品の〕美術性が作物に多くの制限を来すか。第一社会性の欠如に非難が加はるであらう。個人の世界である事、貴重品となる事、日用品となり得ない事、一言で云へば民衆への生活や社会への用途と殆ど何等の関係がなくなつてくる。だが社会性なき工藝を、正当な工藝と云へるであらうか。⁴⁷

個人作家の作品を「社会性なき工藝」と見なす柳の主張は、先に見た三宅の主張と符合する。というよりもむしろ、三宅の主張はここでも柳の前期工藝論の内容に依拠していると言う方が正しいかもしれない。柳はさらに「純に工藝美より社会相を見る時、私には資本制度の許す可からざる罪過に就て、もはや疑を挿む余地は残らぬ。その制度の勃興と共に工藝の美は急速に沈んだ。私は美に対する私の直観と理性とが、社会主義的結論と一致するのを発見する⁴⁸」と述べ、社会主義への強い共感を示していた。

だが、後期工藝論では、民藝生産がもつ社会性という論点が追求されることはほとんどなかった。例えば、「柳の晩年の美思想、佛教美学の四部作⁴⁹」と呼ばれる『美の法門』（1949年）、『無有好醜の願』（1957年）、『美の浄土』（1960年）、『法と美』（1961年）のいずれにおいても、柳は社会経済的問題については触れていない。

こうした点を考慮すれば、「庶民生活を基準において考える場合、美だけを標準におくことは出来ない」という三宅の指摘は、柳の工藝論における社会性の後退という事態に対する批判として読むことも可能である。同時に、そのことは三宅が柳の前期工藝論に固執する原因ともなつたと考えられるのである。

寿岳は、柳の思索の特徴について「柳の工芸美術論は、生活・経済・社会との関連においてはきわ立った展開を示さず、ただ宗教との関連においてだけは、独自の深い系を作り、晩年、妙好人を知るに及んで、禅と念仏を一如とする仏教美学の樹立にまで到達した⁵⁰」と辛辣に述べているが、この指摘は柳の工藝論のもつ一面を正しく捉えていると言うべきであろう。寿岳はまた、「年と共に柳さんの関心は民芸の宗教性に沈潜し、その点では、モリスなどをはるかに引きはなす深

⁴⁷ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、170頁。

⁴⁸ 柳『工藝の道』、『全集』8巻、180頁。

⁴⁹ 「解題」『全集』18巻、727頁。

⁵⁰ 寿岳文章「民芸の展開」、『淡交』増刊17号（1965年10月）、『柳宗悦と共に』113-114頁。

さに達したが、民芸の社会性への探求はうすらいだ⁵¹」とも述べており、寿岳の柳批判の背景には、日常の美の実現には社会変革が不可欠であると主張したウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) との比較があったことが分かる⁵²。

そして、以上のように、寿岳が民藝運動のもつ社会的側面に関心を持ち続けていたことは、寿岳が三宅を支持した最大の要因でもあったと考えられる。寿岳は三宅について次のように語っている。

私が三宅さんに敬服するのは、つねに消費者を大衆に求め、閉鎖的ではなく開放的であり、少数の鑑識者によるきびしい選択（それはどうかすると民藝を特殊化する危険を伴う）よりも、次善であろうとかまわないから、一人でも多くの人々を民藝の世界に結縁させようとの庶民的な態度である。⁵³

寿岳は、民藝においては、美的要素と社会的要素が等しく重要であるという考えを三宅と共有したことが以上の引用から分かる。

だが柳も戦後に社会経済的問題への関心を失った訳ではなく、すでに指摘されているように、柳は「美と経済に共通する原理の探求を放棄することなく、長期にわたって持続させている⁵⁴」。例えば、柳は1948年に「美と経済」と題した論考を発表し、「元来美と経済とは異なる範疇に属する問題とされてゐるが、併しこの両者を近づける道が考へられないであらうか。美的理念と経済的理念とが一致する点はないであらうか⁵⁵」と述べ、いくつかの経済学説を検討している。なかでも柳は『工藝の道』において高く評価したギルド社会主義の立場に対して改めて関心を示しているものの⁵⁶、柳の考えに目立った進展は見られない。もちろん、経済学を専門としない柳に経済論議を求めるのは理不尽な話だが「美的理念と経済的理念とが一致する点」の探求は未完の事業として遺された。

6. おわりに——協会と協団の対話に向けて

以上で見てきたように、三宅の個人作家論は『工藝の道』（1928年）を中心とする柳の前期工藝論の内容に基づいているが、前期工藝論では個人作家と工人の関係の規定に曖昧な点が残されていた。そのことが三宅の民藝協会からの脱退に繋がる混乱の原因となり、また、民藝論の分かりにくさの原因となってきたと思われる。しかし柳はこの問題について戦後に著した後期工藝論

⁵¹ 寿岳「私の民芸教室」、『柳宗悦と共に』73頁。

⁵² モリスの工藝論に対する寿岳の理解については、拙論「寿岳文章の工藝論——ウィリアム・モリスと柳宗悦のはざままで」、『向日庵』8号（2025年3月）19-35頁を参照されたい。

⁵³ 寿岳文章「三宅さんの仕事」、『日本の工芸』（1959年1月）、『柳宗悦と共に』331頁。

⁵⁴ 中見『柳宗悦——時代と思想』182頁。

⁵⁵ 柳宗悦「美と経済」、『心』1巻1号-3号（1948年7月-9月）、『全集』10巻、41頁。

⁵⁶ 柳「美と経済」、『全集』10巻、43頁。

のなかで再考を試みており、そこでは仏教における自力道と他力道の関係と同じように、個人作家と工人は、歩む道が異なりはしても、究極において両者が生み出す美は通じ合うという理解が示されていた。

後期工藝論で示されたこの構図においては、個人作家と工人が同じ美の境地を目指しつつ、互いの優れた作品を参考とし、時には模範とすることも可能であることが矛盾なく説明される。したがって、民藝運動に個人作家が加わることを矛盾であると主張した三宅の批判は、ここにおいて斥けられることとなる。しかし、その一方で、柳の後期工藝論においては、前期の著作で示された民藝運動を通じた社会改良への意識が後退し、そのことが三宅や寿岳の不满の原因となったと考えられる。その意味で、三宅の批判は、柳の後期工藝論がもつ一つの限界を示唆しているとも言えるであろう。

寿岳は「私の民芸教室」という文章のなかで、「私はこの教室で、しばしば柳さんに触れ、三宅さんに触れる。この二人を通じて顕現される民芸の「法」をとりだすのが、私の願いだからである⁵⁷」と語っている。熊倉功夫は寿岳について「一貫して、柳宗悦像の絶対視に反対し、民芸論の修正に積極的であった⁵⁸」と述べているが、寿岳が柳の思想を相対化して捉えることができたのは、柳の主張とともに、三宅やモリスの主張を広く参照し、互いを客観的に比較することができたからであると思われる。寿岳はそうした態度こそが、民藝の「法」すなわち民衆の工藝に関する万古不易の真理に到達する道であると考えていたのであろう。寿岳はまた、民藝協会と民芸協団の関係について、「真理はもともと一つゆえ、二つの民芸集団は一つに帰るのが本来の姿であ〔る〕⁵⁹」と述べているが、特定の権威に囚われずに「民藝の法」を探求した寿岳の態度は、民藝協会と民芸協団がともに理想を追求しながら対話を深めてゆく上で、示唆的であるように思われるのである。

*本稿は、大阪日本民芸館で開催された令和7年春季特別展「大阪の民藝運動——三宅忠一の眼」の関連イベント「民藝ゼミ」での講演原稿に加筆修正して成ったものである。同展は、日本工芸館の所蔵品を中心に、従来民藝館ではほとんど取り上げられることのなかった三宅による蒐集品を紹介する意欲的な企画であった。講演の準備に際して学芸員の小野絢子さんには、現在では入手困難な「民藝運動の道」のコピーを共有していただくなど、大変お世話になった。記して感謝申し上げる。

⁵⁷ 寿岳「私の民芸教室」、『柳宗悦と共に』86頁。

⁵⁸ 熊倉「解説」、『柳宗悦と共に』345頁。

⁵⁹ 寿岳「序」、富永『民芸如花』II-III頁。

読書空間としての「向日庵」—寿岳しづと読書—

長野裕子

寿岳文章（1900-1992）、静子（1901-1981）夫妻の住居「向日庵」に設置された書庫には、一万九千冊をこえる文章の蔵書が架蔵されていた。蔵書の多くは、文章の研究対象である英文学、書誌学、和紙研究に関する国内外の書籍である。この文章の蔵書は静子にも開かれたものであり、夫妻の著述からは互いに読書を共有する様子うかがえる。

「寿岳しづ」のペンネームで自伝小説『朝』を書き、W.H. ハドソン『はるかな国 とおい昔』や、オールコット『四人の少女』（『若草物語』）などの英米文学の翻訳家でもあった静子は、オピニオンリーダーとして雑誌新聞紙上に筆をふるうなかで、女性の読書の必要性を論じた。勉学が好きであったにもかかわらず、家庭の事情から高等女学校を退学せざるをえなかった静子にとって、わが身を生長させてくれたのは読書だった。本稿では「向日庵」を読書空間として位置づけ、夫妻がわかちあった読書と寿岳しづの読書論をひもといていきたい。⁶⁰

読書の共有

「読書の共有」とは単に蔵書を共有することではない。「私どもは婚約した時から一緒に本を読もうという約束でしたが、家事に忙しくなった私が夫に遅れるのは当たり前ですが、夫は、私が針仕事をしていると傍で、声を出して本を読んでもくれました。又、食後は、読んだ本の感想をよく話してくれました。翻訳をすすめてくれたのも夫ですし、難しい所は教えてくれる。訳し終ると一緒に好い題を考えてくれました。⁶¹」しづは文章とわかちあった読書についてこのように語っている。そして読書とは、人生の過程と心の成長ともに変化するものであるという事実を、自身の読書体験から次のように記している。

夫がブレイクの研究を長年続けております関係上、少しずつブレイクを理解するようになりました。夫が『ブレイク叙情詩抄』を岩波文庫版で出した時には「春」「みどり児の喜び」など、幼児の心を必要とする詩のいくつかを初めて訳してみました。…柳宗悦を中心とする民藝提唱の方々と親しく交わるうちに、「工藝」についてのものを一つ読み二つ読みして、思いもかけぬこうした世界へも、ごく自然にはいり得た機縁をいつも喜んでおります⁶²。

⁶⁰ 本稿では「寿岳しづ」の氏名を適宜「静子」「しづ」と表記する。

⁶¹ 「美しい家庭を築きながら自身の勉強にはげむ 寿岳しづ夫人」、『婦人之友』48巻7号、(婦人之友社、1954)、p. 75. [藤浪みや子記]

⁶² 寿岳しづ「読書自伝」、『読書人』1942年2月、『荒野に歌ふ』（西村書店、1948）、p.55-56.

やがてモリスやエリック・ギルや、コブデン＝サンダスの書物が、「私共の書棚」に数を増していき、「段々年を重ねて四十歳に近づこうちに、夫も私も、美しく厳かな調和と秩序を重んじる中世思想、カトリック教的な考え方、身の処しかたに心をひかれるように」なる。かつて読んだ藤村の『新生』やトルストイは、もう二十代の頃のような熱い心では読むことができず、万葉の歌やアーノルドの『教養と無秩序』の世界に共感する日々であった。しづがここに「夫の書架には年ごとに、読みたい書物があれこれと増していております」と記した1942年2月において、『寿岳文章蔵書図書原簿』には3,850冊目となる蔵書の記録が確認できる。一方で文章は、向日庵私版の読者のために刊行した『向日庵消息』に、「向日庵」での生活と近況を次のように綴った。

静子はこつこつとハドソンの翻訳をつづけています。その合間に、旧臘から年始にかけて、私等夫婦は、あるいは一人あるいは二人で、ショーロフの『ひらかれた処女地』、カサリン・マンズフィールドの短編集、山本有三の『女の一生』などを読み、それからそれへと、生きることについてのいろいろ大切な問題を考えさせられました。このつぎ、多分三月の終り頃お送りする消息で、静子は自分の考えを書いてみたいと言っています⁶³。

静子がこつこつと続けていた翻訳は、岩波文庫の一冊、W. H. ハドソン『はるかな国 とほい昔』(1937)として出版されることになる。『寿岳文章蔵書図書原簿』には、W. H. Hudson, *Far Away and Long Ago* (London: J. M. Dent, 1925). ([No. 3]⁶⁴1930年12月4日記入)、W. H. Hudson, *Far Away and Long Ago, With Wood Engraving Eric Duglish* (London: J. M. Dent, 1931, R. P.). ([No. 447]1932年9月30日記入)の書名がみられる。おそらくしづは、これらの蔵書を、文章の手ほどきを受けながら読み込んだにちがいない。

しづと文章は長きにわたり、それぞれが主体的にハドソンを読み続けた。両者のとりくみを整理しておく。まず、文章による *Far Away and Long Ago* の翻訳には、英語学習誌『英語研究』(研究社)の特集「ハドソン号」(第18巻第11号、1926年2月号、pp.1371-1381)に発表した「ハドソン三篇」⁶⁵、編註書として *Memories Sad and Sweet* (平野書店、1931)、*Far Away and Long Ago—A History of My Early Life by W. H. Hudson* (開隆堂、1939)⁶⁶がある。そして『自然・文学・人間 W.H.ハドソンの出発』(新日本出版社、1973)は、しづが翻訳したハドソン『はるかな国 とほい昔』の抜粋をうけて、文章による随想文が続く。文章が「身も心も正常にのびてほしいと願う若い世代を対象に、いつか書いてみたい」と考えていた本書からは、非戦と環境保護、

⁶³ 寿岳文章『向日庵消息』第五信(1935年1月記)、『寿岳文章・しづ著作集2 ある夫婦の記録』、(春秋社、1970)、p.83。

⁶⁴ 『寿岳文章蔵書図書原簿』(向日庵資料)に記帳された「受入番号」を[]内に記す。

⁶⁵ 「桃の園」、「常春藤の花にまつはる昆虫」、「親なき鶴」の三作品。『英語研究』誌の本「ハドソン号」については、藤原弘一郎「竹友藻風と寿岳文章」、『向日庵』5号(NPO向日庵、2022)、pp.33-34.に詳述されている。

⁶⁶ 本書は文章が英語の教科書として出版した *Memories Sad and Sweet* の増補である。中島俊郎「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」、『向日庵』1号(NPO向日庵、2018)、p.32。

人間性と自然の理を問う意思が読みとれる⁶⁷。

一方、しづが翻訳したハドソンの作品は、『はるかな国 とおい昔』（岩波文庫）のほかに、『博物学者の本』（*The Book of a Naturalist*）、『ラ・プラタの博物学者』（*The Naturalist in La Plata*）の抄訳が『少年少女世界文学全集』（講談社、1961）、『世界の名作図書館』（講談社、1961、1966）や『世界教養全集』（平凡社、1962）に収録されている⁶⁸。ここで、しづによるハドソン作品の翻訳が、とりわけ1960年代の子どもを讀者とした全集にくりかえし収録されていることに注目したい。子どもの本に対するしづの洞察眼は、イギリスの少年少女たちが読んでいた書物への羨望から芽生えたといえそうであるが、それを示すしづの読書論を次にみていきたい。

子どものための名作全集

この国で書かれる少年少女小説のほとんど大部分に深い失望と、時には憎悪さえ覚えます。子供の心を麻痺させたり甘やかされたりする読物ばかりが、どうしてこう多いのでしょうか。あの大物理学者ファラデーが、今から七十年も前に、英国の少年少女たちに語ってきかせた講義であるという『蠟燭の科学』のように美しい読物が、なぜ一般の少年少女雑誌にのせられないのでしょうか。…精神的な美しさと、科学的な事実の説明とが、こんなにしっかりと溶け合った表現はそうたやすく見出されるものではありません。…今から百年も前に初版が出たコールコット夫人の『アーサー少年の英国史』が今なお愛読されていて、去年の春その出版百年記念版が出た事実などを思うにつけ、子供を持つわが国の婦人に残されている仕事の多いのを痛感いたします。⁶⁹

これはしづが「心に残る書物」として『婦人公論』（1938）に寄せた記事であるが、まず、日本における『ろうそくの科学』の翻訳史に目を転じて、その後の子どもの読書文化の一端をみておきたい。『ろうそくの科学』（*The Chemical History of a Candle*）は、科学者マイケル・ファラデー（Michael Faraday, 1791-1867）が1860年にロンドンでおこなった講演を書籍化したものである。ロイヤル・ソサエティ恒例のクリスマス・レクチャーとしておこなわれたファラデーの公開実験講座は人気を博し、ヴィクトリア女王の十八歳の長男と十五歳の次男も聴講している⁷⁰。しづが読んだ『蠟燭の科学』は、最初の日本語訳として出版された、矢島祐利の翻訳による岩波文

⁶⁷ 佐藤光「W.H. ハドソンの共生思想と寿岳文章——ウィリアム・ブレイクの系譜の上で」、『向日庵』5号（再掲）に論述されている。

⁶⁸ 『少年少女世界文学全集 8 イギリス編 第5巻』（講談社、1961）および『世界の名作図書館 47 動物記 昆虫記』（講談社、1966）にはあわせて、『博物学者の本』より「あせりすぎたりす」「メアリーの小さな子ひつじ」「小さな赤いぬ」「ふるさとのじゃがいも」「はたらきもののモグラ」が、『世界教養全集 34』（平凡社、1962）には『ラ・プラタの博物学者』より「大草原パンパス」「アメリカのライオン、ピューマ」「鳥の恐怖本能」「動物の本能——母と子と」「くさいスカンク」「バッタの擬態と警戒色」「トンボのあらし」「カと寄生動物の諸問題」「自然がともす終夜灯」「クモについての事実と所感」「「そら死に」本能」「とさかをもつキョウチョウ」が、が収録されている。

⁶⁹ 寿岳しづ「心に残る書物」、『婦人公論』（中央公論社、1938年7月）、『荒野に歌ふ』（再掲）、pp.27-28.

⁷⁰ 「解説」、ファラデー『ロウソクの科学』渡辺政隆訳（光文社古典新訳文庫、2022）、p.191.

庫版（1933）であると推察できる。翻訳者の矢島は「わが国の特に若き読者への小さな贈りもの」としたい」とはしがきに記しているが、惜しくも子どもの読者にとって本訳書はむずかしく、その後、子どもにも理解しやすい新訳書があらわれるまでには、約二十年待たねばならなかった。北見順子著『ファラデーのローソクの科学』（さ・え・ら書房、1951）では、それまでにない思い切った編訳が試みられた。くわしくみていこう。

著者の北見は、本書の「まえがき」に「お話しがじょうずで、そのうえ、実験家としてすぐれたうでもつファラデー教授の講演が、いまから九十年以上もむかしのイギリスで・・・おこなわれていたのです。ロンドンのこどもたちは、まちかねたそのお休みがくると、あらそうように王立研究所の門をくぐったことでしょう。」「日本にすむわたしたちは、いまもなお、それをうらやまずにいられません。・・・『自然の世界をうごかす法則で、このローソクのなかにでてこないのは、ひとつもないといっているくらいです。』これが、この講演のまえおきのことばです。」とまず読者に示す。本文は講演会に参加する少女を主人公に物語がすすんでいく。原著書に沿った本文のあい間に、実験実演を目にしたときの驚きやひらめきが少女によって語られる。たとえば、開演を待つ会場の様子がこのように描写される。「わたしはギャラリーに席をとりました。席がとれなくて、階段にこしをおろす人も見えはじめます。さしもの講堂も、さだめの時間までに、すっかり満員になりました。こんやは、ひょうばんのファラデー先生のお話があるのです。」「・・・チン・チン・チン・・・正面の柱時計が九時をしらせました。準備室のドアがスーッとひらかれて、うれしそうな顔つきをしたおじいさんが、静かにすがたをあらわしました。——あのおじいさんが、ファラデー先生なのかしら。——」

のちに『少年少女科学名著全集』（国土社）に収録された、北見編訳「ロウソクの科学」（1965）は実験写真を掲載するなど、ファラデーによる講演本来の魅力を再現する工夫がみられる。ほかに子どものための全集に収録されたものとして、『世界ジュニアノンフィクション全集』（講談社）の北見順子訳（1962）、『世界の名作図書館』（講談社）の大野三郎訳（1969）が挙げられる。このような、いわゆる「子どものための名作全集」が多く刊行された1960年代という時期に着目すると、それが「読書運動」が普及しはじめた時期に重なることに気がつく。

児童文学作家の椋鳩十（1905-1987）が1960年に提唱した「二十分間親子読書運動」は、せめて二十分間だけでも母子が本を読み合おうというもので、当時、鹿児島県立図書館長をつとめていた椋が推進したこの読書運動はやがて、地方ごとにかたちをかえて全国的な広がりをみせてゆく。とりわけ封建的な農村地の母親にとって読書運動は、近代教育のなかで軽視されてきた、家庭での親子の対話の時間をとりもどすという教育的意義だけでなく、労働からの解放という側面をもっていた⁷¹。このような読書運動の普及を反映するように、いわゆる「子どものための名作全集」には、読者である子どもの親に向けた、作品解説や読書の手引きが付されることが主流であった。

寿岳しづによるハドソン翻訳に話題を戻そう。『ろうそくの科学』を収録した全集のひとつ『世

⁷¹ 尾崎秀樹ほか『子どもの本の百年史』（藤原政雄、1973）、pp. 299-300. を参照した。

界の名作図書館』(講談社)には、しづの翻訳による、W.H. ハドソン『博物学者の本』が収録されている⁷²。シートン『動物記』、ファーブル『昆虫記』、ハドソン『博物学者の本』の三作品を収録する本書の解説として、生物学史家の八杉龍一は、「この人たちが自然を観察し、それを本に書いた時代は、ちょうど、野生の動物の生活を科学の目で見ることがしだいにできあがり、その結果がまとめられはじめたときです。…これらの本を読んでいくと、文学者であることが自然の観察者であるために不利であるどころか、いっそう役だっているという印象を受けます。…動物の行動を本能だけで理解していくことは、動物を機械とみなす結果になりそうですが、じっさいにはそうでないばあいもあります。⁷³」と記している。また訳者解説としてしづは、「博物学者としてみとめられる一方、その文体は、くせのない素朴な独特のものだったので、ガーネット、コンラッド、ギッシングなど、多くのイギリス作家に文学的価値をみとめられ、その結果、死後、二十四巻の全集まで出版されました。⁷⁴」とハドソンを紹介した。「科学」と「文学」という、一見すると相反する性質をもつ両者が結びつくことによる面白さ、それが本書のねらいであったといえる。

もういちど1938年の記事「心に残る書物」に立ち返れば、「子どものための古事記物語」のような本を「優れた女性の手で試みれば、もっとしみじみした味わいの深いものができるのではないか」としづはいった。つまり、博物学者であるハドソンの文学的価値や、子どものための『ろうそくの科学』が好例を示すように、無味乾燥な言葉で語られがちな「科学」や「歴史」を、物語のように読む本として子どもたちに贈りたい、ということである。

『アーサー少年の英国史』と『工芸物語』

この点において「子供を持つわが国の婦人に残されている仕事の多いのを痛感」したしづは、範として女性の著者による二冊、コールコット夫人『アーサー少年の英国史』とマジョリー・ブルース『工芸物語』を挙げている。『アーサー少年の英国史』(Lady Maria Callcott, *Little Arthur's History of England*)は、19世紀のイギリスにおいて家庭向けの歴史書として広く読まれた書物である。本文は、まるで母親が息子に炉辺語りをするように、「昔むかし、国土は多くの木々に覆われていました…」とまず、古代の人々がどのような家に、どのような衣服を着て、どのような食事をしてきたかを少年アーサーに語り聞かせる。著者のコールコット夫人は、巻頭に「母たちへ」として「私は母親となる幸せを得ることができませんでした。…実在するアーサー少年にこの国の歴史を語るつもりで、ささやかな本を書きました。…子どもたちにこの本を手渡したあなたがた母親や家庭教師のみなさまならば、この本の章の見出しに示した、たとえば国王ヘンリー8世はどのようにして6度も結婚したのか、といった質問にも答えてあげることができるでしょう。⁷⁵」と

⁷² 『世界の名作図書館 47 動物記 昆虫記』(再掲、1966)

⁷³ 前掲書、pp. 301-302.

⁷⁴ 前掲書、p. 304.

⁷⁵ Lady Callcott, *Little Arthur's History of England*, New Edition (London: Jhon Murray, 1866) を参照した。(ウェブサイト 'Internet Archive' 2026年3月閲覧)

本書の効用を示している。

『工芸物語』(Marjory Bruce, *The Book of Craftsmen*, 1936)には、陶工、鍛冶職人、織物職人、建築家、仕立職人、パン職人など、子どもたちの身近にあるものを造る職人の仕事が豊富な図版入りで著わされている。著者は本書のねらいについて「人類の歴史のなかで磨かれてきた工芸技術と、生きいきとした職人の手仕事を子どもたちに伝えたい。すでに子どもたちは、粘土遊びや絵描き、刺繍、木工などの遊びをとおして手工芸への好奇心を持っているし、親たちや教師たちもそれを育ててやりたいと願っている。」と述べている。手仕事を歴史的な視点でとりあげた本書には、たとえば図版として、キューピッド像をあしらった古代ギリシャの黄金のイヤリングや、13世紀のチロル地方のものとされるキリスト像を彫り込んだ木製の十字架、日本の陶器、18世紀にイギリスのクロプトンが発明した紡績機などが掲載されている。このような人類の歴史を彩る身のまわりの品々がじっさいに人の手によって造られてきた、そして読者のだれもが職人として自分の手でこのような工芸品を造ることもできる、その可能性に読者は希望を持つだろう。それが著者マジョリー・ブルースが願った本書のねらいであった⁷⁶。しづは本書について、「少年少女たちへ、わが国の手で作られるものの美しさなどを説明して聞かせる本も、是非あってほしいと願っております。特に書物工芸の方面に関心を持つ私といたしましては。」と述べる。当時のしづは、文章とともに1937年から三年間にわたる日本全国の紙漉村調査旅行をおこなっていたさなかであったことを鑑みれば、本書の意義をとらえたしづの関心の深さがよみとれる。

『寿岳文章蔵書図書原簿』には、『工芸物語』Marjory Bruce, *The Book of Craftsmen* (London: Harrap, 1936)。([No. 1699] 1937年4月10日記入)、『アーサー少年の英国史』Lady Callcott, *Little Authur's History of England* (London: John Murray, 1937, R. P.) ([No. 2093] 1938年3月28日記入)の両書が記帳されている。記事「こころに残る書物」をしづが執筆した1938年7月において、文章の蔵書に加わった両書を開き、理想の書物を語りあう二人が想像できそうである。

女性と読書

記事「こころに残る書物」は『婦人公論』の読者である女性たちにむけた、寿岳しづの読書論でもあった。しづは「永遠の書と一時の書とを区別したラスキンの有名な読書論の意味を考えさせられた」、としてマシュー・アーノルドの『教養と無秩序』、『二宮翁夜話』『キュリー婦人の伝記』をとりあげ、「こういった書物は、教養と正しい賢明な生活の根本基礎となるものですから、性格や趣味がどうであろうと、したがって好きであろうが嫌いであろうが、必ず一度はお読みなさいと、おすすめせねばならぬ本かと思えます⁷⁷」と述べる。

ここに「永遠の書」として挙げた、マシュー・アーノルド(Matthew Arnold, 1822-1888)の『教養と無秩序』(*Culture and Anarchy*)は、しづと文章が共有した読書にとって、とくに影響をあたえた書物である。文章の言葉を借りれば、アーノルドは本書において「ものごとをありのままに

⁷⁶ Marjory Bruce, *The Book of Craftsmen* (London: George. G. Harrap & Co., 1937, R. P.) を参照した。(ウェブサイト 'Internet Archive' 2026年3月閲覧)

⁷⁷ 寿岳しづ「こころに残る書物」(再掲)、p. 29.

とらえ、今までの、いちばんすぐれた考えを世のなかにゆきわたらせるところに、本当の文化が見られる」と繰り返して説いた。それは簡単なことではない、と文章はいう。一切の偏見や固定概念を排除し、「ありのままに見た結果が、どんなに恐ろしいものであっても、それを、真実だと認めなければならないのですから、非常に勇気もいります。⁷⁸⁾」と本書を捉えて述べている。

19世紀イギリスの思想家、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) が著わした『胡麻と百合』(Sesami and Lilies) は、おもに女性の聴衆にむけた二つの講話をまとめたもので、第一講「胡麻」が読書論、第二講「百合」が女性論となっている。本書に関連して文章は、自身の関西学院高等部文科英文学科での学生生活について、教員の吉岡美国に「特に請うて『胡麻と百合』を購読してもらった」とふりかえっている⁷⁹⁾。したがって静子も、文章の学友で盲目の兄、岩橋武夫に付き添って通学するなかで、あるいは吉岡が購読するラスキンの『胡麻と百合』に親しんでいたかもしれない。しづが考えさせられたという「永遠の書と一時の書」についてラスキンは、次のように述べている。「永続しないものが悪書であるとはかぎらず、永続するのが良書だともかぎりません。…書物とは、本来、話されたものではなくて書かれたもの、しかも、たんに伝達のためではなく、永続をめざして書かれたものなのです。⁸⁰⁾」そして、かぎられた短い人生のあいだに、その書物を読むということはすなわち、もうひとつの書物はあきらめるということ、あなたは生きているあいだに読む本としてどの一冊を選ぶのか、とラスキンは聴衆に問いかける。

雑用のため無い筈の時間は、天引き貯金と同様に、まず一日一時間の天引き時間をつくり、読書にあてる習慣をつけましょう。私の経験から言っても、たしかにこれはできます。家庭婦人が消費するくらいのつつましい書物購入費は、きっと良書に育てられてゆくその頭脳が、立派に埋めあはあせをしてくれます。良い書物への正しい理解と愛との芽生えが生長するにつれ、くだらないおしやべりは面白くなくなり、薄つぺらなおしやれや見えは恥しくなってくるでしょう。

時は「心に残る書物」から十年移り、これはしづによる「書物を家庭の婦人に」(1949)と題した雑誌記事⁸¹⁾の一文である。しづの価値観を率直に示したこの言葉は、ラスキンが『胡麻と百合』に「永遠の書と一時の書」を説いた文脈において「もろもろの王妃・王侯たちと対話することが許されているときに、皆さまはわざわざ自家の女中や馬屋番の少年とむだ話をなさいますか。⁸²⁾」と例える言葉にも通じる。また本記事が書かれた年代の日本国内が、1945年の終戦後の混乱を経た復興期であったことをふまえておきたい。

⁷⁸⁾ 寿岳文章・しづ『櫛と菩提樹』(白風社、1966)、p. 158.

⁷⁹⁾ 寿岳文章『わが日わが歩み——文学を中軸として』(荒竹出版、1977)、p. 387.

⁸⁰⁾ ラスキン『ごまとゆり』木村正身訳、『世界の名著41』(中央公論社、1971)、pp. 170-171.

⁸¹⁾ 『寿岳しづのスクラップ帖』(向日庵資料)に貼付された本記事の切り抜きには、「『書窓』昭和二十四年五月弘文堂」と手書きされているが、出典書誌は確認できていない。

⁸²⁾ ラスキン『ごまとゆり』、(再掲)、p. 172.

本記事の冒頭にしづは、アメリカの蒐書家エドワード・ニュートン (Alfred Edward Newton, 1864-1940)が、著書『蒐書の愉しみ』(*The Amenities of Book-Collecting*) に掲げたエピグラフに触れている。それはこのようなものである。アメリカの詩人ユージン・フィールドが「もし天国で書物を愛する人々のために用意された場所があるとすれば、そこに入ることができる女性の数は非常に少ないだろう」と嘆いているが、それに対してニュートンは「よしやフィールドの言うとおりであろうとも、私は意に介さない。すくなくともそこへ入る資格をもった一人の婦人がある。共にすごした二十八年間の試練は、天上においてもここ地上においてと同様に、彼女が私と書物の喜びをわかちあえる資格を十分に証明したと私は申しひらくであろう。その婦人こそ私の妻である」としてこの言葉を夫人に捧げたのであった。しづはこのニュートンの言葉をうけてこう述べている。

女性の自覚がわが国よりもずっと早かったアメリカにあってさえ、エドワード・ニュートン夫人のような例は珍しいのでしょうか。…日本でも御多分にもれず、多少書物への関心を示す婦人はあっても、何をさておきあの本を手に入れたい、この本がよみたいというような、激しいつなかりを書物に対して持っている婦人は、なかなか見かけないといっても過言ではないでしょう。…けれども、人口の半ばが女性であり、その女性の大多数が家庭婦人であることを考えるとき、そしてより良いわが国を思念するとき、求める心が無いから仕方ないと言って、このまますまされる性質のものではありません。家庭婦人の深い反省を求める心の芽生えを、切に願わずにはおれません。

この課題にたいしてしづは、当時結成されていた全国の婦人団体や、地方の婦人会が見識ある良書案内機関と連携し、会費で求めた書物を輪読すること、そのなかから繰り返し愛読したい本を見つけて、自分のためにその本を新しく購入して手もとに永くおくことを提示している。『寿岳文章蔵書図書原簿』によると、『蒐書の愉しみ』A. Edward Newton, *The Amenities of Book-Collecting*, (Boston: The Atlantic Monthly, 1920, R.P.). ([No.957]1934年7月23日記入) は、1934年の夏、文章と交流があったアメリカの実業家カール・ケラーから贈られたものである⁸³。1930年に、ケラーが柳宗悦を通じて日本の「ドン・キホーテ」文献収集を文章に依頼して以来、愛書家である両者をつないだ友情が、この寄贈書にもその証としてあらわれている。本書を文章に贈ったケラーの意図を想像するならば、いわば日本のニュートン夫妻である、文章としづにこそ相応しい書物ではなかつたらうか。

本記事「書物を家庭の婦人に」においてしづは、「最後に私が、知識人⁸⁴を自認される男性がたにお願いしたいこと」として、「あなたがたの妻や妹や娘へ、どうか読書への親切な導きの手をの

⁸³ 寿岳文章は読書日記『瀬祭記』(1954年9月3日記)に「この本をケラーがくれたのは一九三四年の七月二十三日だった。丁度二十年の昔である。福原[麟太郎]氏の遷暦記念文集にS. Johnsonに関する一文を書かうと思って追読したが実に面白かった。著者は単なる蒐書家ではない。実によく読んである。…」と書き付けている。

⁸⁴ 寿岳しづは「インテリゲンチヤ」という語を用いているがここでは「知識人」と読み換えた。

ばしてあげてほしいのです。なんの学歴もない私が、書物なしで暮らされぬ人間に生長できたのは、その天性にもよることながら、夫のあたたかいかいぞえがずいぶん役立っているのですから。」と結ぶ。女性の読書習慣はまず家庭の読書環境から、と女性たちをこのように叱咤激励し筆をふるうしづの読書論を読むと、読書空間としての「向日庵」が果たす役割にあらためて気づかされるのである。

むすびにかえて——読書空間としての「向日庵」

さいごに、しづと文章の読書の舞台となった住居「向日庵」の間取りに想像をめぐらせながら、文筆家、翻訳家としての寿岳しづの日常をみていくことにしよう。これは「美しい家庭を築きながら自身の勉強にはげむ 寿岳しづ夫人」として『婦人之友』（1954）に掲載された記事である。

夫人の室はお座敷につづく南向きの六畳、鏡台と机がおいてあるだけ。一間の幅に天井まで戸棚が作ってあり、高い戸棚は三段に区切って、名札を貼った洋服箱がきちんと並んでいる。戸棚の隣に作りつけの洋服箆笥がある。その隣りの風雅な低い戸棚に、夫人の書き物のもの、字引、本等が一切入っている。机の上には何一つおかない習慣である。

…昼食後、後片付けがすむと、夕方五時までが自身のお仕事（今は、ドロシイ・オズボンの「愛の手紙」（岩波文庫）の翻訳⁸⁵）をなさる。五時から夕食の支度後片付けは章子さんの役。夜の八時から十時頃まで、また翻訳やお仕事をして、十時か十一時には、やすまれるとのこと。…一日五、六時間こういうお仕事に当てられるというのは、並並の主婦の出来ることではない、時間の使い方の上手さと意志力であろう。⁸⁶

昨年 2025 年の秋、旧寿岳家住宅「向日庵」を訪れる機会にめぐまれた⁸⁷。その記憶をもとに「向日庵」の間取りについて補足すると、一階にある静子の部屋と文章の書庫とは廊下をはさんで向かいあっている。静子の部屋に続く八畳の「お座敷」は、床の間側が書庫と隣りあっており、時には床脇の明かり障子に書庫の照明が透かし映されたことであろう。この障子を開閉することで、書庫の通風を保つこともできそうである。もうひとつ静子の部屋に隣りあう五畳半の茶の間は、機能的な台所に続いている。静子と文章が共有した読書空間はときにこの茶の間であった。書庫に架蔵された一万冊を超える文章の蔵書かのなかから、かの一冊が取り出され、ここで読まれてきたという事実想像をめぐらせると、「向日庵」の読書空間としての存在感がたちあがって

⁸⁵ 「愛の手紙」は岩波文庫として刊行されなかったが、文章としづによる「ドロシー・オズボーン 古風な恋文による伝記の試み」として『婦人之友』（1971年1月号～12月号）に連載された。長野裕子「寿岳文章・しづ——「思想と生活」の実践」、『向日庵』5号（再掲）、pp.110-111.

⁸⁶ 「美しい家庭を築きながら自身の勉強にはげむ 寿岳しづ夫人」（藤浪みや子記）、『婦人之友』48巻7号、（婦人之友社、1954）pp.72-73.

⁸⁷ 現地調査の機会を与您てくださいました高木博志氏、花井久穂氏、そして旧寿岳家住宅「向日庵」を懇切に案内いただきました田中弘氏に、ここに記して感謝を申し上げます。

くる。

読書空間とはなにか。まず書物があること、読者が存在することである。したがって図書館や学校でなくとも、電車のなかでも公園やカフェでも読書空間となりうる。しかし、読書空間としての「向日庵」は、常に選り抜かれた書物に満たされ、それらの書物をわかちあう読者を家庭内に持つという点において特別な存在であったといえよう。時代はさかのぼるが、日露戦争後には国の地方改良運動の一環として、国民全体の知的水準を向上させることを目的とした「読書国民」の創出が目指された⁸⁸。地方にも多くの図書館が開設されたが、現在からみればそれは公共性に乏しいものであった。「向日庵」が建てられた1933年は「改正図書館令」が公布された年でもあるが、これは図書館の統制強化であったとされている。しづが、自身の読書論において女性や子どもの読書の貧困を指摘した時代を経て、だれもが多様な「読書空間」を選ぶことができる現在であるが、読書空間としての「向日庵」の意義を、いまあらためて見つめなおす必要があるようである。

(引用にあたっては現代のかな使い、常用漢字に表記を改めた箇所がある)

⁸⁸ 永嶺重敏『読書国民の誕生』（講談社学術文庫、2023）、第五章「読書装置の政治学」を参照した。

書評 [福原麟太郎] 寿岳しづ著『朝』

婦人である著者が自らの恋愛を材料として書きしるしたらしい小説である。盲目の兄をもった妹が、その兄の友人をひそかに恋しているところから始まる。少し突然であると思った。しかし読んでゆくに従って、これは作者自身の感情が高まっているせいだと考へられた。そして後には、それが全篇の *overture* でもあるさえ思えるようになった。そしてその *keynote* が終りまでつづけられていた。だからこの小説は一つの叙情詩みたいなものだとも言へる。二十五六頁ゆくと、この主人公が盲目の兄を東京の病院で看護する一節が始まる。彼らは大阪を家郷にするらしい。兄なる人は理工科の間の中途で目をわずらって失明するのである。失明してついに望を失うまで、おおよそ七十頁ほどの間兄妹が互にいたわり合い運命をなげき日々の太陽を待っては恨む心持を描いた病院生活の記録は、すばらしい出来である。我々は序盤の恋愛の萌芽を忘れて、人間の上に降りかり科学も知識もどうすることの出来ない禍のために胸をいためる。表現は引きしまっており、描寫は克明である。ある朝ふと兄の眼がぼんやり物の形色をわけるようになる。二人の兄妹ともに我らもまた、涙ぐましくそれを喜ぶのである。けれどもそれは作者も書いてみる如く消えようとする燈火の最後の明るさであった。光を失った兄を、大阪から迎へに来た淋しい母、看病にやつれた妹とが汽車にのせてつれて帰るのである。帰ってから一発病後五年ぶりに兄は神戸のある専門学校で英文学を聴講にゆきその寄宿舎へ入る。主人公おしんが兄の友曾我（そが）を知ったのはこの頃である。それから序篇で開かれた恋愛—おしんも曾我も互に秘めあったが、盲目の兄の同情者であり恋人であるらしい房乃という女性の紹介によって、初めて打ちあけられ、そして最後に住吉の郊外の初夏の樹蔭で二人は初めて心の扉を一つにする。彼らの生活の朝が明ける。さういふ意味であらう。私などはもっと散文的な時代におりもっと散文的な人生を閲して来た。こういう深く見すえた叙情的に清浄な真摯な世界に住む人々の心を羨む。彼らの生活に祝福あれ。盲いたる兄も房乃も、この一すじの恋のうしろに同じく祝福あれ。（東京神田南神保町一六、岩波書店発行 ¥1.60—R.F. [福原麟太郎]）

『英語青年』6月号

K.D. 生 [土居光知] 「寿岳しづ『朝』を読む」

退職した鉦山の技師を父とし、失明した兄の惣吉の看病をし、惣吉に同情を寄せてくれる友人の曾我を想うようになるおしんがしんみりした筆で描かれている。初夏になって、母が送ってきた軽い単物に着がえても、心は軽くならぬ病院づまいの兄妹、戸袋の蔭に立って袖や前掛の端を毎日ぬらすおしん、戸を閉めても閉めてもしのびこんでくる風のように彼女の心に通ってくる恋人の面影が、やや幼いという感じのしないではない(長い引用文の点などで)、純粹な筆づかいで、

つつましやかにいかされている。

この作を読んでいる間、おしんは実際そこいらに生活している女であるこの感じをもつ。しかし本を伏せて思ってみるこ探し出すところが容易でない女であることに気づく。作者はおしんに純日本的な女性の眞露を静かにつましやかに歩ましめるここに成功した。

おしんは所謂モダンガアルの型から最も遠い、純日本の女性のイデェに近い少女である。それは弱い女さいう意味ではない。彼女は曾我さんを想っていることを自分の心の中で肯定する前に、うちあけて拒絶された時の心の持ち方を準備して、自分の心を擦るような女である。いよいよその覺悟ができたとき、思いつめた極秘の思いを男に知らそうとして、いろいろ思ひまどった末、兄の恋人である房乃にうちあけて、手紙を書いてもらう、その房乃にうちあける一節 (169-186頁)は『物や思うと人の問うまで』の歌に膾炙されてゐる我国の小説に幾度も繰返されたはずの主題でありながら、実際は描かれた事のなかつた少女心である。私はいかにもナイーブに描き出されたこの一節をよんでクラシックに對するような感をおぼえた。そして較べてみたく思ったのは、昔よんだことのある Heinrich von Veldeke ハインリヒ・フォン・ベルデケの中世の物語りエネアスである。もとより両者は全く別なもので、似ているのは内気な少女のころろあらわした美しさと、あまりに近くにあるように思われがちな事件をクラツシカルな純朴さをもって描く筆づかいである。この一節と対照せしめるため Veldeke の一節を引こう。

ラヴィニアの母は、夜々が休息にならずして、朝々顔色がわるくなるラヴィニアに意中の人を問ひたずねる。それが恋であることだけはうなずかれるが、名が容易に口へ出てこない。母は娘に筆をすすめる。

"Tremblingly she smoothed the wax and began to write. E was the first letter, then N, then again E—great was her anguish and pain—then A and S. Then mother spelled it and exclaimed: 'Here stands Eneas!' 'Yes, mother dear.'"

かかる境遇を少しのわざさらしさもなく、書き得る作者が、本篇の終りである二人の会合をも同様な筆で描いているここを紹介する必要もないのであらう。ただ曾我の態度を「運命」という言葉でかくしたのは、後篇を書く必要からであらうか。

要するにこの創作はゆかしみの深い作である。(昭和二年九月)

四六版 303 頁。岩波書店發行。定優一圓六十錢。

寿岳文章「退却また退却〈くらしのちえ〉」

向日町の今の家を建てて引越したきた。金のくめんだけを取りあげても、よくやり通したものだといふことも時々思うことがある。もうその頃（昭和8年）は不景気のどん底で、土地を買い家を建てた総額が、八千円にもならなかったのが、私たちには幸いであった。

木材もひのきがよいとわかっていながら、それが使えず、杉でがまんし、構造上さしつかえないところへは、安いので当時はやったアメリカ材を用いた。にもかかわらず、その後たびたびの風水害にも耐え、地震にも耐え、今でもそうくたびれた感じを与えないのは、のちに建築家として名を成した故澤島工学士に設計監督を依頼し、誠実な工務店を紹介してもらったためである。

澤島工学士は、茶室や数奇屋を中心とする日本建築の権威故藤井厚二博士の門下だから、私たちの希望条件を入れても、仕上がった家にはどこか藤井式のおいがただよう。ところがその時すでに私は、親しくしていた故柳宗悦氏の感化で、民芸の美しさに心惹かれていた。柳さん自身が集めた器物のほかに、柳さんの心友河井寛次郎さんや浜田庄司さんから、自作の陶器類が、新居祝いの意味でたくさん届けられた。それで、外観はとにかく、家の内部の設備や調度品は、今にいたるまで、できるだけ正統民芸調で統一する方針を守ってきた。

ところがこんど改造に着手してみると、台所や浴室やトイレの、あのどっしりした民芸風の構えをもちこむことはできない。第一、生活の便利と環境衛生をまず考える新しい世代に生きている娘や息子の感覚が、それを許さない。今までそれに慣れて暮してきたのだから、くみとりのあと少々くさくともそこに日本的伝統(?)の良さ(それともくささ?)に安住してがまんしよう、との私の諦観は七年間アメリカでの生活を身につけている息子に一蹴された。これが第一歩で、それからは退却また退却。少なくともこんどの改造部分からは、民芸のミの字も感じとられないだろう。

しかし私はそれでよいのだと結局考える、フローアにしても天井にしても流し台にしても、今までになかった新しい材料が、機能を主とした新しい構想によって、それこそ日進月歩の勢いでどんどんつくられてゆく。それならばそれで、機能的にすぐれており、機能的な美しさをそなえているかぎり、どしどし採り入れていってこそ、用から発足した民芸の歩みと一致するのではないか、とまで私は思う。新しい時代は、新しい材料によって機能的な美しさをつくらねばならぬ。そう覚悟をきめて、わたしは毎日現場の進みぐあいを見るのを楽しみにしている。

『フローア』第16号(東洋リノリウム株式会社、1963年10月1日)

寿岳文章「いのちなりけり」

思い出のつきせぬわが恩師新村出先生は、晩年のお話の中に、しばしば西行から「いのちなりけり」の一句を引き、その日その折の所懐となさいました。当時の先生よりもはるかに多く年を重ねた私が、このたびここにこのような書物展を開くに当たっての感懐も、「いのちなりけり」のそれに尽きましよう。

中学四年生の時、修学旅行で初めて上京した私が、自由時間にまず訪れたのは、丸善本店と神田の古書町でありました。しかし、それほどの本好きに生れついた我ながら、今に到るまで「丸善で書物展を」などと考えたことはございません。

本が縁となって、親交を結んだ先輩や友人も、多くは故人となりました。しかるに、その人たちの志をつぐ新進気鋭の方々のお骨折りで、ここにご覧のような催しを持つことができました。心からお礼を申しあげて、ごあいさつの言葉といたします。

向日居にて 寿岳文章

1989（平成元年）年5月、丸善創業120周年記念事業として日本橋丸善にて「寿岳文章と書物の世界一向日庵本とその周辺」展が開催された。

*西行「年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」『新古今和歌集』

アンケート「妻を歳だなあと思うとき」

なにごとにもひたむきな妻は、なるほどと納得するまで一步もあとへ引きません。文学、政治、宗教、そのほかどんな話題であれ、私たち夫婦の間に意見の違いができると、夜を徹してでも討論しあったものです。

それが過去十数年の間に、大手術を二度もうけて、からだの弱ったせいもあり、ちかごろは「もうこのへんでやめておこう」ということになってきました。

「彼女も歳だなあ」としみじみ私の思うのは、そんなときです。精神力は一向に衰えていないのですから、そうした彼女を見る私の気持は淋しい。

『婦人公論』（中央公論社、1972年5月1日号）

寿岳文章「本のしおり」

読みたい本を新しく買い求めると、私はまず二つの物理的な作業をいとむ。きれいにふき清めた机にその本を置き、表と裏の両方から、20ページぶんくらいのところを開き、右と左の小指に沿う手のひらのはしで、本のノドを、ゆっくりと丁寧に、上から下へなでおろすようにおさえこむ。それがすむと、また20ページくらい左右から開き、同じ操作をくりかえす。こうして本の

中央部に達すると、そのノドを左右どちらかの小指寄りの手のひらでおろす。そしてもう一度、逆に、こんどは中央部から同じ操作をくりかえし、本を閉じる。これで本は落ちつき、開きがよくなり、形もくずれない。操作中にくずれる本があるとしたら、それは本と呼ばれるだけの値うちがなく、落丁や乱丁と同じように、版元はまともなものを取りかえる道義的責任をもつというのが、年来の私の主張である。しかし現在の日本で、どれだけの数の版元が、この要求に応じてくれるだろうか。それははなはだ心もとない。

次の操作はちょっとめんどろである。横は、本のぶあつきよりも心もちひかえめの寸法、縦は四センチほどの長さに、用策のホゴで結構ゆえ丈夫な和紙を切り、その片面へ十分にノリをつけ、あらかじめ用意しておいた細い扁平なヒモの一端をノリづけのしてある紙面の中央に置き、へらか何かで、本の背中の上部の、折帖をはりあわせた本文の背の部分にくつつくようにさしこみ、背表紙の上からしっかりとなでおろし、紙片が折帖に十分密着したのをたしかめた上で、ヒモを本の紙葉の間へ逃がし、下方で小口から四センチほど出るようにして切断する。つまり本に定着したしおりを作るのである。製本するとき、こうしたしおりを作りつけてくれる版元もふえてきたが、その習慣はまだ行きわたってはいないし、外国出版の本には、ほとんど見られないのが実情なので、私はその本を読み始める前に、まずこれだけの手間をかけるのである。

しおり、漢字で書けば技折であり、山みちなどで、帰るとき迷わないために、木の枝を折りかけて作る道しるべが原義である。西行法師の歌に、「吉野山こそそのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねむ」とあるが、これは観念だけのきれいごとではなく、吉野山に住んでいた西行の、現実の行為をふまえているに違いない。山村に生まれ育った私は、まだ幼い日、すぐうしろの雑木山へ、よく一人で登った。200メートルそこそこの小山にすぎなかったが、村人のふみならした道もなく、幼童にとっては大きな冒険であった。それに尾根が長いので、思わぬ方向へそれてしまうおそれもあり、子供は子供ながらの知恵を働かせ、私は、5メートルくらいの間隔で山つつじの枝を折りさしにし、帰路の安全にそなえたことを思い出す。そこここに目白が鳴いていた。

本にしおりがなぜ必要か。まず第一に、どんな本でも数百ページともなれば、一気に読み通せるものではないから、次回の読みつぎにそなえ、どこまで読み進んだかを知る目じるしの役目。本を大切にしない無神経な人は、よく紙葉の耳を折って目じるしとするが、これは直接に紙をいため、ひいては書物の生命そこなうことになるから、私など、その光景を想像するだけでもぞっとする。もしそんな習性の人があるなら、即刻、しおりの使用にきりかえていただきたい。

読みさしの場所を知るのがしおりの主目的だとすれば、手間をかけて、一冊一冊、固定させなくても、ありうる紙ぎれ、布片などをさしこんでおけばよいではないか、との説がもち出されよう。その通りである。事実、昔の人は、もみじの葉をしおりにしたり、多少防虫のききめもあろうかと、黄ばんだいちょうの葉をしおり代りに使った。また適当な紙や布で仕立てた市販のものも見かける。しかし、このようなさしこみのしおりは、本を読みおえた後でも、そのまま置き忘れられやすいし、車中の読書などでは、知らぬまに落ちて、なくなったりもする。本にふさわしい気の利いたのを捜すのが、今は大変であり、費用もかさむ。だから私は、年間何百冊もの本を読む生活にはいつてこの方、固定式のしおりひもに切りかえたのである。

ところで人生は、内容のゆたかな、熟読を必要とする一冊の本にたとえられよう。何をしおりとすべきか。お互いによく考えたい。

『電信電話』第22巻1号（日本電信電話公社、昭和45年1月1日）

寿岳文章「温泉雑記」

どうした風の吹きまわしか、去年の秋は久しぶりにまだ見ぬ温泉への旅が実現した。志賀高原の紅葉・黄葉をめようと、私たち夫婦が湯田中の駅におり立ったのは十月の十日であった。日はすでに暮れていて、方角もさだかでない。しかし附近は非常にぎわいで、「東京一万人講歓迎」などとするした横幕が張りめぐらされている。私たちはとまどった。

実はその日、上林温泉の上林ホテルに泊るつもりで、ずいぶん早くから交渉したのだが、団体客を引きうけているとかで駄目。あわてて塵表閣へかけあったが、ここも駄目。この調子では混雑が思いやられ、案内書をあれこれ読みくらべた末、最もひなびっていて静かそうな角間温泉の養田屋へ電話したところ部屋があるという。さて行ってみると、数軒の温泉宿が袖すりあわせているような感じだ。その中で養田屋はモダン派らしいが、急な梯子段と言ひ、便所の不便さ（不便所と呼んだ方がよいかも知れない）と言ひ、想像したとおりの田舎風である。私はすっかりうれしくなった。

あたりのたたずまいがどうなっている やらわからない初めての宿に夜おそく着き、あくる日の朝まだき、縁ばたに立って風景をとらえる楽しみは、また格別である。

養田屋での私たちの室は、三階のはずれだったので、展望がよくきく。ここも 海拔七六〇メートルと言うから、かなり高い。湯治場の気分が濃厚で、都会人種に荒らされていないのが何よりよろしい。林檎畑の間の道を歩いても出あうのは土地の人ばかり。横山大観や林芙美子がこの土地を愛した気持はよくわかった。

宿の人たちに、何かにつけ家庭的な暖かさの感じられるのもうれしかった。私は再遊を期しているが、こんど行ったときは、願わくば野趣を、もう少し清潔で洗練したものとしておいてほしい。これはむつかしい注文であろう。へんな都会風になってしまうくらいなら、少々うすぎたなくても、田舎まる出しの方がはるかによい。

志賀高原の秋色は、まさに驚異であった。こういうスケールの大きい紅葉・黄葉の景観に接したあとでは、都会の近郊（京都ならば高雄、大阪ならば箕面）の秋色など、まるで盆栽である。今は高原の至るところにゲレンデがあり、リフトが調和を破っているが、全くの自然境であった明治時代、ここから渋峠を越えて芳が平へ降り、上州草津へと旅路をいそいだ人たちがうらやましい。雪の深い冬は道もとぎされたであろうが、春から秋にかけての道の美しさは、自然の景観に対してどんなに無感覚な人の心をも打ったに違いないと思われる。

私たちは、発哺温泉の薬師の湯で泊ったが、この宿には、正直に言って少々幻滅を感じた。約半月のうちに、天狗の湯に一泊した娘も同じことを言う。ここは私たちのように、屋外の静けさに浸ろうとする者を対象としているのではなく、夏はキャンピングを、冬はスキーを楽しむ元氣

な若者たちのホーム・グランドなのだ。健康なかれらにとっては、温泉の質がどうであろうと問う所ではない。設備も、サービスも、すべてこれらの若者たちのペースに合わされている。私たちは、宿の前からケーブルで東館山の展望台にのぼり、やっと俗界をはなれたような気になった。

湯田中から長野へ出る車中で、私は二十何年前に行ったことのある野沢温泉を思い出していた。その頃でも、野沢はすでにスキー場として有名であったから、今はもうすっかり面目を改めているだろう。

ついで十一月の下旬に、私は久しぶりで道後温泉に一泊したが、どの宿にも内湯が引かれていて、浴客が振鷺閣（しんろかく）まで足を運んだ昔の風情は求むべくもない。使利と言えば便利だが、何かもの足りなさが感じられる。

結局、温泉や湯治に関する限り、私は 戦前の正統派なのである。温泉の主体は、あくまでも治湯であって、遊興ではないというのが私の主張なのだ。いかに 日本は温泉にめぐまれているからと言って、今のように、都会の遊興人めあての宴会場化するのは、もったいないと思う。静かな環境に身を置いて、精神も肉体も共に休養させるのが温泉医学の眼目なのだ。だから私はどんなに誘われても白浜や別府や熱海は、必要があれば泊まりはしようが、湯治に行こうとは思わない。私の願いは、多くても数人の湯治客しか滞在していなかったりした山奥の湯につかって、精神のしわをのぼすにある。十津川谷の湯泉地などは、まさに私の理想郷であったが、十津川谷に幹線国道の開通を見た今日では、もう行く気がしない。

紀州の川湯も、私のすきな温泉だが、いつか行ってみると、新宮市の税務署員たちが多勢泊りこんで、夜を徹しての飲めや歌えの大散財ぶりに妨げられ、眠ることさえできなかった。へべれけに酔って、階段の踊り場にぶっ倒れている税吏を、階下へ蹴りおとしてやりたい衝動にかられたことを、今も私はまざまざと思いだす、その旅では、越の湯にも 一泊したが、アメリカ兵が商売女をつれこみ、浴場でふざけ散らしていたのが願にさわり、宿の者に口をきくのもいやな思いであった。紀州の温泉の私の思い出はこのようによくないが、去年の春、娘一緒に竜神へ行ってきた妻は、竜神は恐らく私の最も気に入る温泉だろうと言う、そうであってほしい。

紀州にはもう一つ、私の行ってみたい温泉に椿がある。ここ数年来、私を苦しめているリュウマチの治療のために、実はひそかに心を向けている温泉なのだ。いろいろと洋薬を試み、再三度、漢方も徹底的にやってみたが、どうもよくなる。三沢敬義博士の『温泉療法』（1947）を読むと私のような慢性リュウマチ疾患に効く温泉がいろいろあげてある中に、この椿もはいつているが、泉温の三三・五度というのが少し気にかかる。リュウマチの場合、四〇 度から四二度が適当らしい。そうすると鹿児島阿久根や、北海道の雷電へ行けばよいことになるが、忙しい仕事を持つ身には遠すぎて環である。いっそのこと、山口の山へ行けとすすめてくれる人もある。それというのも、リュウマチ には食塩泉、強食塩泉、硫黄泉、化素泉、単純泉、酸性泉、放射能泉がそれぞれに効果があり、これらの泉質の著名な温泉をさがすと、至るところに見つかるのだが、たとえば箱根など、もう俗化しきっているに違いないから、気が進まないのが困るのである。

私の友人の説によると、岡山県の湯原の近くにある真賀温泉は、泉温もちょうど四〇度ぐらいで、単純アルカリ性泉、田舎びた環境は私の趣味に打ってつけだと言う。鳥取県の関金にかぎる

と主張する友人もある。そうなるとうつりがしてかえって困るのだが、温泉が遊興地化したとは言え、私の知らない温泉がまだまだこんなにも多いのは、ありがたいことだと思う。何かしら「お前のリウマチはまだ大丈夫だ」との安心感をいだかせる。

『温泉』第39巻2月号（日本温泉協会、昭和36年2月1日）

寿岳文章「押部谷（おしべだに）」

私は山陽線明石駅から約16キロ東北の農山村の押部谷に生まれた。現在は神戸市の垂水区に編入され市の中心部からはすでにバスの往復もあると聞くが、西だけは開けてほかの三方をかこむ山なみも、その山なみの間を縫って流れる明石川の本流や支流も昔のままであるに違いない。私はその村の小学校へ五年をすますまで通ったが、いちばん忘れられない思い出は、まだ学校へゆかぬ六歳の春か夏、兄（第一生命、副社長の鈴木敏一）が勉強さきから帰省して、私に最初の英語の単語を覚えてくれたこと。それは「デインジャラス」（危険な）という言葉だったが、庭の松の古木のまわりを私が「デンジャラウス！ デンジャラウス！」と連呼しながら回るあとを、兄がたわむれに追っかけてくる。猿蟹合戦の白とむすびつけて、私はその最初の英単語を覚えたのであった。

『日本経済新聞』（昭和29年12月15日）

寿岳文章「私は明治生まれ」

学資と生活費を得るために私が初めて教壇に立ったのは1919年の秋、そして教育界からきれいに身を引いたのは1969年の春、まさに半世紀の間、私の表看板は教師であった。人の寿命はのびたが、物資の上昇率はそれをはるかに上まわるので、70歳をすぎてもなお教壇に立っている老先生を、この頃はあちこちに見かけるから、私の教壇暦50年などは、そう長い方でないかもしれない。しかし人生五十の昔の通念に従えば、私は生涯を教壇にささげたことになる。自分では気づかないが、またつとめてそれからの脱却を心がけてきたが、生き馬の目を抜く政・経・財三界のボスたちにはひどくまぬけて見える教師の姿勢を、私も身につけているかもしれない。そもそもこうした書きだしからして、まぎれもなく教師なればこそその発想であろう。

半世紀にわたる教師生涯をふりかえると、中学・専門学校・大学、それぞれに思い出はぎっしりつまっているが、ふりだしの何年かの、中学教師時代がまずあざやかにつかまれるのは、若い私自身はりきっていたせいであろうか、それとも異色のある先生や、よかれあしかれ多くの可能性を内に秘めた生徒がいたからであろうか。おそらくその両方であろう。名校長・森外三郎氏のもと、湯川秀樹・朝永振一郎両博士などのノーベル賞受領者がのびのびと育った京都府立一中の校風はすでに何度か触れたので、ここには大正の末から昭和の初めにかけて私が英語の教師をしていた東寺中学のことを、少し書いてみる。東寺中学というのは、その維持経費に東寺の宝物がおびただしく売られたとかで最近問題になった洛南高校の前身であり、また教授と学生の

数にほとんど開きがなく、こんな大学はぜひ残しておきたいと、NHK 番組日本史探訪の「空海」で湯川秀樹博士がほほえましく語った種智院大学の弟分にあたる。

「会田雄次氏の厳父で、今は世にない会田龍雄氏も先生の一人だったが、もともと真言宗門の子弟を教育するために建てられた学校なので、先生には坊さんが多かった。その一人、故・長谷宝秀師は、宗内切っつの碩学であり、若き日の上山春平氏(現京大人文科学研究教授)に求聞持法(ぐもんじほう)を授けたのもこの高僧。謹厳を絵にかいたような人がらなのだが、茶目っ気もあった。一生徒を処分するがどうかで、議論ずきの教師がはてしなく言い争っている会議の席上、私の隣にいてにこにこ聞きながら、何か鉛筆でむだ書きしていた宝秀僧正は、そつとその紙きれを私に渡した。読んでみると「教員は遊女[宿場]女郎にさも似たり時間がくればバタバタと行く」。

コンピューターでは計算しきれない人と人とのふれあいを尊ぶ気風が、その頃の教師にも生徒にもあったように思う。それは、明治憲法や治安警察法の金縛りにあいながらも、古今東西のすぐれた古典を心のかてとした明治人の筋金が、自覚した教師には通っていたからではあるまいか。生き残りの明治人である私は、それを感じる。近く生まれようとする赤ちゃんに名をつけてくれと頼まれた私は、男の子だったら、道生(みちお)にしようと考えている。論語学而第一の「本立而道生」に由ったのだ。その姉を、文字とひびきのよさから志保と命名したのは私の妻だが、私は私でそれにマタイ福音書第五章の「地の塩」を念じ入れた。明治生まれのゆえであろう。

寿岳文章「洋行はしなくとも」

英米文学を専攻していながら、私はまだ一度もイギリスやアメリカへ行ったことがない。そのどちらにも親しくつきあっている知人がいて、遊びにこないか、との招請を戦前すでにたびたび受けた。ことに戦後、年来の友人サー・ジョン・ピルチャーが、駐日英国大使として着任し、BOAC機が大阪空港へ乗り入れるようになったとき、その記念に、英国へ行ってくれないか、歩行が困難なら、飛行機からすぐ車椅子へ乗り移れるようにするし、君のすきな日程通りに滞在してくれてよいし、また君の行きたいと思う場所、たとえばギルバート・ホワイトの『博物考古誌』の舞台となっているセルボーンでも、詩人・画家のウィリヤム・ブレイクがしばらく滞在していたサセックスの海岸でも、いつでも案内ができる手はずをするから、とまるで国賓なみの至れり尽くせりの条件で招かれもした。

しかし私はそれに応じなかった。夏目漱石のように、英国へなど二度と来るものか、と意地を張ったわけではない。百聞は一見にしかずで、自分の学問や研究と深い関係のある土地へは、行くにこしたことはなからう。だが、私のとりかかっている仕事と、病弱な妻の健康への配慮が、私の腰をあげさせなかった。ふりかえって、私のこの選択はまちがっていなかったと思う。妻の病苦は、ずっと続いて今日に及んでいるからである。

その前、日本人の海外旅行がまだ今ほど自由でなかった頃、信用度の高い某旅行 公社が、英本土の、英文学と縁の深い土地を十数か所選び、見学旅行を企画し、支配人が私のところへその案

内説明役を頼みにきた。もちろんことわったが、英国へ行ったこともない私に、なぜ白羽の矢をたてたのかと訊ねたら、相手は驚いて、それは本当ですか、先生のお書きになったものを読むと、英国は隅から隅まで熟知しておられるとしか思われぬ、とけげんな顔をした。

私は苦笑したが、実地を踏みもしないのに、踏んだような印象を私の書いたものが読者に与えるとすれば、土地と結びつきの強い文学作品（例えばウィリアムズの『川うそタルカ』）を読む場合、私はいつも座右に、1 マイルを1 インチに縮尺し、天然記念物なども示した英国独特の詳密な地図を置き、臨場感に浸る習慣が身についていて、書くものにもおのずとにじみでるからであろう。

当節は金と時間があれば、猫も杓子も足を海外にのばす。英語実習の名目で、ぼやっとロンドンにおり立ち、せかせかとハイド・パークを歩きまわる日本人の鉢あわせも多いと聞くが、私のように、洋行の経験をもたぬ英文学者もいることを忘れないでほしい。

文化財保護審議会専門委員 寿岳文章

章

寿岳文章「古稀の春」

いつのまにか年を重ねた。私は一九〇〇年の三月生れだから満七十年をすでに越している。平均寿命がのびたというが、杜甫の時代に比べるとたしかにそうなのだろう。今までの年月をふりかえると、長いようにも思うし、つかのまとも感じられる大学の教師をやめてから二年に近いが、相かわらず書物の中に埋没している自分を見ると、垢がこびりついているようで、まださっぱりしない。任運無作、一日も早く全くの自由人になりたいものである。

中村葉月さんが主筆であった『越後タイムス』を私にむすびつけたのは、まだ新潟時代の式場隆三郎君だったから、まさに 四十年のつきあいである。私より前に向日町に住みついた河合卯之助さん夫婦も故人となられ今は息子の紀君が立派に向日窯を継承しているが、紀君に会うとついでに『越後タイムス』とそれに関係のある人々の上につる。世代は替っても柏崎とのつながりの続くのがうれしい。十数年来の固疾のリウマチと申しこんでいたのが、最近、専門医の精密な診察の結果、変形性膝関節症と判明した。リウマチに効くクロロキン製剤の数年の連用が、かえって骨をもろくし、目にもわるいと告げられ、私は新しい療養の途に上った。おかげでほとんど歩行不能であった両足も軽くなった。やり残している仕事にとりかかる意欲もわいてきたが、なんと言っても壮年期の元気にはほど遠い。あれもこれもというのが今までの私の生き方であったが、今はあれかこれかにしぼるほかはない。毎月のきまった仕事としては、二年近く前から、宮柊二さんの歌誌『コスモス』に『神曲』の翻訳を、そして筑摩書房のPR誌『ちくま』に「ほん・その目でみる歴史」を連載しているが、これだけでも結構いそがしく、あつと言うまに一月がすぎる。しかし、今年からの計画としては、多年構想を練ってきた『和紙歴史事典』の執筆になんとしてでも今年はとりかかりたい。

民芸運動の同志として親しかった柳宗悦・河井寛次郎・大原 総一郎の三氏にきき立たれたのは

淋しいが、浜田庄司・芹沢圭介両長老の元気な仕事ぶりを見ていると力づけられる。吉田璋也君も外村吉之介君も健在だ。私たち夫婦の選集の中の一巻、『ある夫婦の記録』のために、私はかなり詳しい年譜を作ったが、念頭を一番しげしげと往来したのは、『越後タイムス』との四十年のつきあいもこめて、民芸運動の同志のことどもである。『紙漉村旅日記』の中に出てくる多くの旅館の中で、最も印象に残るものの一つは柏崎の天京荘であるが、昔の面影をとどめているかどうか。公害問題が日本列島のそこここにふきあがっている昨今、柏崎の海は昔のままであってほしいと、古稀をすぎた私は心から願っている。

<筆者・京都府在住・元甲南大学教授・和紙研究者>

寿岳文章「京に40年」

私が播州の山奥から初めて京都へ出てきたのは、大正3年の春のことだから、41年の昔になる。今の東寺高校の前身、真言宗京都中学の2学年へ編入試験をうけるためであった。郷里の法類関係の寺院の子弟で、その大学(昔は貧大と言っていた。今の種智院大学の前身)へはいついた者の下宿先が七条通坊城上ルにあり、しばらくそこに同居していた。たしか薪炭業で、丹波口駅に近く、煤煙がひどかったことを記憶している。梅小路駅の原始時代で、雨でも降ろうものなら泥の海の踏切を渡らねばならなかった。しかし七条大宮下ったところには寄席などがあり、今日とはすっかり気分の違う狭い通りであった。

入学がきまって、私は校内の寄宿舎へ移り、それから四年間をそこで過ごすこととなる。夏休みがすんで寮へもどってきたら、血に飢えた蚤がばらばらと両脚へ飛びついてきたのを昨日のことのように覚えているのをみると、あの寄宿舎は随分きたなかった。今はどうなっているかしら。

その頃の東寺の境内は、杉や松の古木が鬱蒼と茂っていて、ことに五重塔の附近は、昼間でもうすぐらかった。門限が九時の日曜日に、たまたま南門から帰ってくるようなことがあると、昔と今と場所は全く別であるにもかかわらず、いにしへの羅生門のことが思い出され、金堂や食堂の横を走って通った。そして御影堂裏の蓮池まで来て、初めて歩調をゆるめたものである。

当時とあまり変らない風景は、恐らく毎月二十一日のにぎわいではあるまいか。尤も私はここしばらく東寺へも無沙汰しているので、何とも言えないが、今も昔と変りなく、こぼれ梅を売る店がかり、のぞきの小屋もあるような気がする。後年柳さんが民芸品を掘り出したのは東寺や栗薬や北野の縁日だから、大正初年はそういうものがもっとふんだんに出ていたに違いない。是非もないことであるが、それを誰も知らなかったのは何よりも惜しい。

中学を卒業した大正七年から八年にかけて、私はしばらく東寺の西の、たしか源町に下宿していたことがある。当時中学長であった岡本慈航師の隣家であった。南と西は人家がまばらで、冬の間は葱畑が遠くまで望まれた。しかしその頃から東寺の森や六孫王神社の境内には五位鷺が巢を作り、梅小路駅の煤煙と相俟って、古い木の緑を枯らし始めたように思う。

四ヶ年を神戸で送って、大正十二年の春、私はまた京都へやってきた。母校の東寺中学で英語を教えることになったのだが、旧師たちが学校に程近い西八条に借家を見つけておいてくれた。

ところが、新婚早々の私たちがその家へ着いて、鍵をかけ、世帯道具を買いに出かけている間に空巢がはいり、めぼしい私の和服類をごっそり持ち出してしまっていたのに腹を立て、その家を解約して聖護院東の福の川に移り、二階二間を借りた。京都中学の門前土手道の下で、現在の末川博士の居宅から程近いところである。そこでの思い出は、私が麻疹（ましん・はしか）にかかったこと。やがて追い立てられ、三条白川橋西入大井手町の奥まった家の二階を借り、初めて生活に落ちつきを感じるようになった。知恩院に近いので、学校の休みの日など私たちは朝早くからよく東山へ登り、將軍塚から清水の裏山あたりを散歩した。どこへ降りても、どこから登っても、東山は頃あいの散歩道を提供してくれた。

翌大正十三年の春には、一児の父となったので二階借りに不便を感じ、あちこち家を探して歩いた。借家の無い時で、口入屋に随分無駄金を出しもした。最初の経験にこりたので、用心のよい所を第一条件にし、やっと見つけたのが南座裏のうす暗い途子（ずし・小路）であった。その年私は京大文学部へ選科生として入学したが、先生の中には、私の家の近くまで来たけれども途子の入口が薄気味わるく、尋ねずに帰ったと言われた人もある。夏には大銀杏の葉が遠くから見ると女の髪の毛のように茂り、雨の夜などたしかに妖怪的であった。附近は私たちの生活とは最も縁遠い存在であったが、あすこでの三年足らずの月目をふりかえってみると、何とはなく忘れがたい思い出も数々ある。

同じ学校に教えていた関係で友人となった木村素衛君が転宅すると言うので、そのあとを襲い、南禅寺の僊壺庵に移り住んでからの数年のことは、度々あちこちに書いたが、いくら書いても書きつくせないあれこれの記憶がよみがえる。自然の景観から言えば、南禅寺附近が一番地の利を得ているのではなからうか。私たちはよく歩きに出かけた。疏水に沿って北上し、法然院から銀閣寺を経て北白川にゆく道も楽しかった。永観堂の裏山を登り山科街道へ下りる道も楽しかった。花山天文台から、歩きなれた東山の峯づたいに霊山のふもとへ出、高台寺の文之助茶屋で甘酒をすすすることも多かった。柳さんが神楽岡に住んでいたので、七日にあげず行き来し、黒谷の境内まで送ったり送られたりした思い出も忘れ難い。粉雪の降る厳冬の夜ふけ、夷川間の町まで家庭教師に出て帰る妻を、インクラインの橋の袂で待っていたのもついこの間の事のように思う。動物園ではライオンが吼えていた。マントの袖にトルストイ全集を入れて、橋絆の電燈の下で私は「アンナ・カレニナ」などを読んだ。

その南禅寺から居を向日町に移した頃は、五千円もあればちょっとした家が建つほどの不況時代であった。向日町に来て二十数年になるのだから、私の京都生活も、ここが一番長い。来た当座は、大原野から花の寺、光明寺、楊谷、吉峯と、気のむくままに足をのばしたものであるが、今は自宅のまわりの田舎道を散歩することさえ減多になくなった。ものぐさと言えばものぐさだが、それだけこの生活が身についてしまったとも言えるだろう。遠くへ行かなくても、停留場からわが家へ帰る道だけで、結構自然の景観は楽しいのである。竹藪はまだあちこちに残っているし、隣りはすぐ農家に続いている。飛びこもうと思えばいつでも田舎のふところに飛びこめる安堵の気持が、却って家にこもる気持をさそうのかも知れない。

四十年と言えれば決して短い歳月ではない。その間に私が歩いて見た京都の町や村は随分あろう

けれど、まだ一度も行ったことのない所も多い。そして町でも田舎でも、思いがけぬところにびっくりするような美しさがあるものだ。龍谷大学で教えていた頃、昼の休み時間には、私はよく西本願寺の庫裡の前から堀川に出る細い道の白壁の美しさを楽しんだものだが、あれと同質の隠れた美しさは京洛至るところに見出されるのではあるまいか。時間さえ許せば、今日は小川寺の内、明日は伏見という風に、洛中洛外のところどころを歩いてみたら楽しかろう。歩くうちに空腹を感じ、ふと見つけたうどんやに、私の好きなにしんそばがあったら、それこそ勿怪の幸というものである。

『洛味』第 50 号 (1955 年)

寿岳文章「母よ、永遠なれ」

十年ほど前に亡くなりましたが、今でも私の愛読しているアメリカの詩人、ロバート・フロストは、ある会見の席上で、こんなことを言いました。「母の愛情に値しようと努力する必要は無い。しかし 父の愛情に対しては、これに値しようとする努力が必要だ。父の方が気むずかしいからね。」

すぐれた詩人の言葉には、一般に余韻や含蓄があり、そのまま軽く聞き流したのでは、真意を汲みとりかねる場合も少なくない。フロストの言葉に、私は首をひねって考えてみました。そして次のような解釈に行きついたのでした。

本当に広く、深く、大きな愛は、愛する者と愛される者の間に、愛しているとか、愛されているとかの、意識の介入を許しません。つまり、愛することが愛されることなのです。それは無代償であり、無限界であり、無条件なのです。だから、母の愛に報いようとする子供の努力を、無意味なものにしてしまう。そこをフロストはとらえたのでしょうか。

しかし、父の場合だとそうはいきません。父の愛には、文句がつきます。フロストはそうした愛を、particular だというのですが、この形容詞、実は日本語に甚だ移しにくい。私は「気むずかしい」と訳しましたが、要するに、母の愛のように無限の奥行きや広がりをもつのではなく、特殊な部分だけを強調する感じなのです。つまり父の方が、母とはちがひ、自分のエゴを強く主張することになります。父にたいしてよい子であるためには、この父の欲求を満足させる必要があると、フロストはやや皮肉に、しんらつに言いました。このフロストの批評を、母親無視のすすめとうけとれば、それはとんでも無いまちがいです。父の句句たる愛にむくいることは、実はそう困難でない。しかし、無限大の広がりをもつ母の愛には、むくいようとどんなに努力しても、その努力は、寄せてはかえすのうちはげの浜のまさごを、数えつくそうとするに等しく、全く不可能である、とフロストは言おうとしたのだと私は思います。

「母と子の関係は逆説的で、ある意味では悲劇的だ。それは母親のがわに、最も烈しく緊張した愛を要求し、しかもこの愛こそ、子供が成長して母の懐を離れ、完全に自主独立する助けとならねばならないから」と言ったのは、ドイツ生れでアメリカに住む現代の哲学者エーリッヒ・フロムですが、それを逆説とも悲劇とも意識せず、春となれば雑草が寸土を求めて青く芽吹くのど

全く同じ自然さで、太古から今日まで生きてきたのが、平均した母なのでしょう。それはすべての愛の原点となりました。この愛を通して、平和への最も純粋な願いの火も燃えさかりました。女は弱いかも知れないが、母は男よりもはるかに強く、たのもしい。この母をより所として女全体を強くしましょう。母よ、永遠なれ。

『母のひろば』第116号（童心社、昭和49年1月15日）

寿岳文章「反骨の軌跡■私の戦中戦後史抄（8）——間話・詞華集あれこれ——」

エンライトの近業に触れたついでに、古今東西にわたる詞華集をなぜ私が年少の頃から熱愛したか、その足どりをここで少し辿っておこう。中国の詩文の美しさを初めて私が知ったのは、小学校を了えて中学へ進むまでの3年間に、江戸時代服部南郭が偽書と知らず翻刻開板して大いに流布した『唐詩選』が、私の育った寺に2冊もあり、その1冊をいつの間にか占有して、わからぬ箇所はわからぬままに愛誦したことによる。ほぼ同時に、私は『和漢朗詠集』や歴代の勅撰・私撰の和歌集の代表的なものにも親しむにつれ、日本人の資性が、この種の作業に適しているのではないかと思ひ知るようになった。だから、私の英文学修業のこと始めに、Robert Bridgesの編んだ詞華集 *The Spirit of Man* を入手したときには、まず親近感を覚え、それからしばらく、*Carmina Burana* や *Anthologia Palatina* のたぐいも含めて、西洋系詞華集あつめに熱中した。そして近代もしくは現代のすぐれた詞華集は、詩文としての表現美だけでなく、その奥にひそむ思想の深さに顧慮していることその点が、恋愛を中心とする叙情と、四季の移り変りに敏感な叙景に加重がかかり、思想詩としては釈教以外特に見るべきものが少ないことに気づいた。

しかし、それはともあれ、詞華集は洋の東西を問わず、編集した人の、美的感覚を経とし思想の深度を緯とした見識の、正直な自己告白とも受けとることができよう。この見地に立つなら、明治の終りから大正期を通じ、多くの年若い文学志向者に愛読された上田敏の『海潮音』や、さらに視野をひろげるなら、西洋近代文学の情報に飢えている若者たちのかわきをいやしてくれた厨川白村の『近代文学十講』は、広義での詞華集と言えるのではないか。少なくとも私には、そううけとられる。

エンライトの *The Oxford Book of Death* に触発されて、詞華集に寄せていた私の遠くはるかな情熱がよみがえり、生きとし生けるものすべてにとって不可避の公案「死」を彼は誰からどのように採録しているか、いささか立ち入って調べてみようという気になり、まず第一に、William Blakeを駢台にのせた。ブレイクは私が絵画と詩業の両方面から数十年来親しんできた画家・詩人であり、また、当時の所謂「墓場派」詩人たちのために好んで挿絵も銅版画化しているし、さらにつきつめて言えば、詩・画の二つとも、「生死一如」を生活を通じての主題とし貫いた。つまり全作品が「死」につながる。エンライトはそのどれを、どう摘花したか。ブレイクからはただ一つ、*The Book of Thel* を、しかもかなり長く採録しているのみである。私は思わずうなった。

昭和ひと桁の終りに、向日庵本の一冊として、私はこの *The Book of Thel* を作り、先輩や知友にも贈呈した。複製部分のコロタイプ印刷は便利堂に、訳詩の活字印刷は内外印刷にやませたが、ほかは表紙作りや製本にいたるまで全部私がやり、挿絵のある本文の彩飾は、ブレイク自身と全く同じ方法で忠実に原本を再現したミュアの複製を手本に、私の妻が手彩色した。それぞれ思い出のある向日庵本の中でも、言わばこれほど文字通りわれら夫婦が「手塩にかけた」本は他に無いのである。ところが、これをうけとった一英文学教授は、誰の目にも美しいと映ずる複製部分には目もくれずに(と私は想像する、なぜならその教授は、美への感受性が全く欠落していたから)、そのつぎ会った時、私の訳詩にふれて、「よくもあんな女学生の寝言みたいなもの訳してみる気になったな」とのご託宣である。これには私も、かえす言葉が無かった。文学作品にせよ、絵画作品にせよ、世に残る、つまり「古典」入りするほどのものならば、それぞれの美点をどこかに持っているはずだ。それに感応できない美学や文学の教授に、はたして自分の職分を遂行する能力や資格があると言えるだろうか。

土居光知教授からは、懇切な手紙が届いた。手彩飾部分の色調が、本文の主人公 Thel が展開するブレイク的世界とよく合っていて、この複製は成功だとあり、いたく私たち夫婦を喜ばせた。ここではからずも土居教授が登場したついでに書きそえておく。エンライト着任まもなく、現存英詩人に対する彼の評価の程度とその理由を私が訊く機会があった。R. Hodgson については、よく言わない。あまりにも古風で、これからさきの時代への機能力に欠ける、というような批評であった。そのことを後日土居教授に話したら、「そうかなあ。私はそう思わないけど」との答。ところがこんどの詞華集に、エンライトはホヂスンを採用している。しかもあの有名な“Stupidity Street”を。

この問話の筆を執っているとき、東京の福原雛恵夫人から封書が届いた。一枚の絵はがきがはいっており、その表書き用の空白に、今年は雪が多いこと、NHK テレビ評伝で私も出る「小泉八雲」の再放送を見ての感想などがしるされている。裏は大英博物館所蔵の *The Book of Thel*, p.4 の画面だ。思い出すと、この種類のブレイク原作の複製絵はがきを、私は故麟太郎大人から何度も貰った。夫人も大人のありし日をしのばれて、私へのこのご好意となったものか。ブレイクの画面はいつ見ても美しく、魅力的だ。できるだけブレイクの「真」に近づけようと、小さく簡素な机の上で、この絵はがきと同じ画面へ懸命に彩飾の絵筆を動かしていた生前の妻を、私は今、まのあたりに見る思いに沈んでいる。

『英語青年』(1981年6月号) p.7

ツバメとへび—私の童話—

寿岳文章

ついこのあいだのことです。新しく買ってきたバラのなえをうえようと、私が庭の土をほりかえしていたら、ぐにゃとしたへんなものに行きあたりました。おや、なんだろうと思ってよく見ると、冬眠している一匹のツチガエルなのです。カエルさん、びっくりさせてすまなかったね。と心の中でいい、そっとうめてやりましたが、そのとき私は、秋から春にかけての何ヵ月かをじっと土の中にひそんでいなければならないカエルやへびにくらべて、寒くなれば暖かい南の国へ飛んでゆけるツバメはしあわせだ、と思いました。

しかし、南から北へ、北から南へと、山をこえ海をこえて渡るツバメの行きかえりには、ひどい雨や風や、いろいろなんぎなこともおこるにちがいないから、ツバメはツバメで、いうにいわれぬ苦労がありましよう。鳥や虫やけものたちが、みんないっしょにより集って、苦しかったこと、つらかったことを話しあったら、その会議は何日も何日もつづくだろうな—私は、ふと、そんなことを考えてみました。

ことしの夏、私は、しばらく東京へ行っておりましたが、宿の近くの、こうがい電車の停留所の屋根の下に、ツバメが巣をかけて、もうだいぶ大きくなったひなのために、せっせとえさを運んでいました。電車を待っているおおぜいの人、えさをくわえた親ツバメがかえってくると、ひなが、くちを大きくあけて、えさをもらうありさまを、ながめていました。たべものをさがしに、また飛び立ってゆく親鳥のおとした白いふんが、つとめに出る若い男の人の、新しい紺色の洋服にくっきました。その人は「チェッ」と、いまいましように舌うちしましたが、まわりの人たちが、みんなにこにこしているので、おこるわけにもいかず、笑ってしまいました。



ツバメはほんとにかわいい鳥です。私が生まれた、いなかの家では、ツバメが巣を作りやすいようにと、屋根うらの大きなたるきから、じょうぶな木のぼうをつりさげ、そのはしに、三十センチ平方ぐらいの枝を打ちつけておきました。私の八つか九つのころです。八十いくつのおばあさんがいて、生きものはかわいがってやれ、といつもいっていました。耳はすっかり遠くなっていたけれども、まだ目が見えるので、おばあさんは奥のざしきにひきこもり、たいい針仕事をしていました。私はそうっと足音をしのばせて、そのへやにはいり、おばあさんのうしろから、耳もとに口をよせ、大きな声で「ウァーッ、おおかみやッ」といいながら、おばあさんのからだをゆさぶるのが楽しみでした。「なにするぞい」と、くちではおこりながらも、おばあさんの目はにこにこしていました。「キク（私の幼名）、ツバメをだいじにしてやったら、かえりしなに、しんじゅの玉をおいてゆくぞ」

おばあさんがこういうので、私は、いっしょうけんめいでした。朝は早くから入口の戸をあけてやり、夜は親鳥が巣にとまっているんを見さだめてから、戸をしめました。そのうち、もう一週間もすればひなが巣立つとおもわれたころのある夜、ふいに、親ツバメが、キーッ、キーッと

なきさげびますので、ランプをともして見にゆきますと、屋根うらから、大きなヘビの青だいしようが、巣をうかがっています。おおさわぎになりました。みんなは、ヘビを殺したかったのですが、おばあさんがヘビを助けてにがしてやれ、というものですから、キタヤンという名の作男が、たるきへはしごをかけ、ヘビをつかみおろしました。私は、キタヤンといっしょに、家のうらを流れていた小川の下流五百メートルぐらいのところへ、そのヘビを持ってゆき「もうくるな、こんどきたらいのちがないぞ」といいきかせ、はなしました。ところが、それから二日たって、ツバメの巣にまた同じさわぎが持ちあがったのです。それが同じヘビであったかどうか、わかりません。ヘビは人間とちがって、同じようなかっこうをしていますから。しかしおばあさんは、同じヘビだというのです。「こんどは、川のかみへはなすのだぞ。しもへ捨てたら、どないに這うても、きつとかえってくる」。そこで私は、またキタヤンと、ちょうちんをともして、小川のみなかみの、さびしいさびしい山奥へ、ヘビをすてにゆきました。「こんどきたら、ほんまにあかんぞ」と、いってきかせながら。

ツバメが巣立ってから、巣の中を探してみましたが、おばあさんのいうしんじゅはありません。来年は、来年はときばって、ツバメの世話をしましたが、何年立っても、しんじゅは見つかりません。やがて、おばあさんも死んでしまいました。しかしツバメがくるころになると、いまだに、しんじゅのことを思い出すのです。

(挿絵：川西英)

『朝日新聞』(1953年11月22日)

美作太郎宛寿岳文章書簡

東京、神保町の Y 書店で発掘された美作太郎宛寿岳文章書簡は、晩年の姿を克明に浮き上がらせてくれる文献です。とくに 80 歳代の日々を伝えてくれる貴重な資料です。美作太郎（みまさか・たろう、1903-1989）は、編集者、出版学研究者であり、日本出版学会を立ち上げるのに寿岳とともに尽力しました。文面から理解できるように、知友に先立たれ晩年の心を通わす数少ない知己でもありました。また、美作太郎の（同時に寿岳文章の）人間性を伝える「舌代」もここに翻刻しておきます。

寿岳文章書簡 (1)

冠省 過日は信濃の銘菓をお届けいただき御芳情厚く御礼申し上げます。

小妻の病院生活も半年をはるかに越え、病気の性質上、恐らく再び家へ帰ってくることも望みなくなく、小生の脚部不自由も日に日に悪化、病院へ見舞いに行くさえままならず、さすがにつかれはて、それが原因で親しい方々（その中に大兄もふくめて）へも心ならず失礼を重ねる結果となり、重々御海容を願うのほかありません。

小生にこうした晩年が訪れようとは全く予想はずれで、もう少し健康にもめぐまれ皆さまのお役に立つかと思っていました。それに知人が最近次々と他界し、そのショックも相当なもので、弔電を打ち弔文を書くたび自分自身の寿命が削りとられてゆく思いを痛感します。お礼がこんな弱音となってしまいました。お許し下さい。

一九八〇年五月二十七日

寿岳文章

美作大兄

寿岳文章書簡 (2)

冠省

気力も体力も日に日に衰え、東上など全く思いもよらぬ昨今、御芳情のおくりもの信州林檎が届き、目頭があつくなるほど友情のありがたさを感じたほどでした。

先般、朝日新聞があれこれいろんなことを聞きにきた時も、「友人」としては大兄と布川兄をあげました。小生としては、一番関係の深いはずの英文学界に一人の友人も今はないのは淋しい限りですが、逆に言うと、書物や出版とのかかわりが、友情のしがらみとなっているのを痛感（私の場合、最も濃い）いたしました。

今年もあますところ幾らもないのを思うにつけ、無常迅速が皮膚感覚となって迫ります。最近の私の娘は多忙を極め、一人ぼつねんと、時には夜も送ることもあり、孤独の情たえがたい場合も少なからず、甚だわがままな願いながら、どうぞ小生のためにも、ご自愛なすって下さい。

一九八三年十一月二十七日

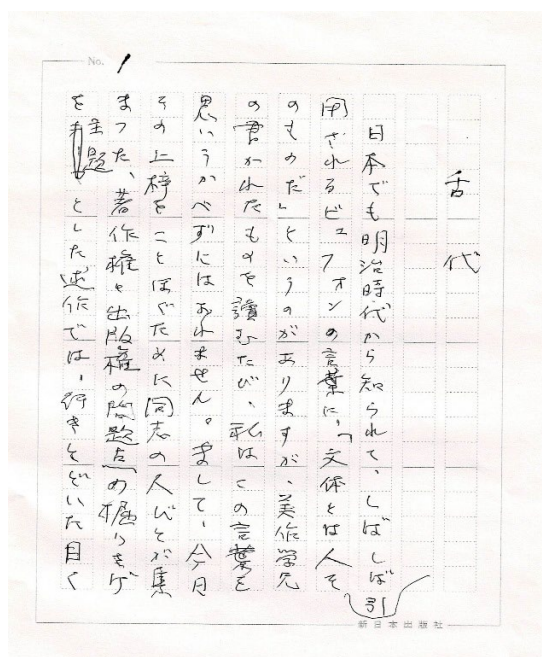
美作太郎盟兄

老文章

舌代

日本でも明治時代から知られて、しばしば引用されるビュフォンの言葉に、「文体とは人そのものだ」というのがありますが、美作学兄の書かれたものを読むたび、私はこの言葉を思いうかべずにはおれません。まして、今日その上梓をことほぐために同志の人びとが集った、著作権・出版権の問題点の掘りさげを主題とした述作では、行きとどいた目くぼりの奥に、言葉では表現されていなくても、同兄の血肉とつながる体験が、いつでも証言に立つ姿勢で端座しているのを私はありありとイメージに描きます。剛直の人・美作太郎の書く一言一句には、実はその苦難にみちたライフ・ヒストリーが、深々と彫りきざまれている事実を、あらためて思いうかべつつ、はるか西のかた京都より、心からのよろこびの言葉を送ります。

友人の一人・寿岳文章



増野 正衛「恩師列伝 私の会った人 寿岳先生御夫妻(1)」

寿岳文章という名を、私はかなり早くから知っていた。昭和二年に出版されていた静子夫人の自伝的小説『朝』を実際に私が読んだのは、不覚にも戦時中のことだったが、寿岳先生の『書物の道』は昭和九年に出版され、私はこれを大学在学中に入手したし、石田先生の『信仰告白』の研究社版らしからず渋く美しい装幀が、寿岳先生の手になるものであるのも知っていた。『書物の道』の巻頭には、その後しばしばお邪魔することになるとは夢想もしなかった向日庵の写真が掲げてあり、南禅寺山内からこの新居へ移られたのが昭和八年.....ということが、本文を読みすすむうちにわかる。

「自分のこと」という一章があり、先生の姓名を「ジュガク・ブンショウ」と正しく読んでくれる人が少ないのを嘆いておられる。「たいていの方はスガクと読みスヲカと読み、浪漫的な人は折折ヒサヲカと読む。嘗てこれをスシガダケと読んでくれた人があるが、思ふにこの人はすしを弁当にして角力見物に出かけるのを好むのだらう」というあたりで吹き出しながら、私は白髯(はくぜん)を貯えた老学者の風貌(ふうぼう)を思い描いていた。

卒業後三年ほど兵隊に行き、召集解除後に志定まらぬまま大学院に置いていただいていたころ、今は亡き中西信太郎先生のお勧めで、京都一中の同窓会が設けていた時習学舎という補習塾へ、先年まで大阪女子大にいた田下優君と同道してお手伝いに出向した。除隊の翌月に私が結婚したものであるから、無収入では格好わるかろうと、中西先生が配慮して下さったのである。この時習学舎で、私は初めて寿岳先生にお目にかかったのだが、白髯を貯えるどころか、国民服に身をかためた颯爽(さっそう)たる壮年で、御著書の文体から受けるむしろ枯淡老熟の気配など求めようもないのに仰天してしまった。

いつも旅行用のような鞆を携行しておられ、授業を終わった後にはきわめて積極的に食糧物資の調達に活動しておられた。戦時中の物資不足の中を、先生は長女を東北大に、長男を京大に学ばせながら、敢然と戦っておられたのだ。「行列すれば牛肉の買える所を見つけたよ」と私も同行させて下さったり、「うまい店を教えてやる」と言われるので一杯飲ませていただけのかと思ったら、蒸し饅頭の店だったりした。私は、この時代の活動的な寿岳先生を心底からなつかしく思うと同時に、その後、今日まで図に乗って甘えっ放しの自分をつくづく情なく思っている。

つまり、その後の私の生涯は、すべて先生に支えられて、なんとか一人前らしく歩いて来ることのできた道程なのだ。(朝日新聞 1979年3月27日)

増野 正衛 「恩師列伝 私の会った人 寿岳先生御夫妻 (II)」

戦争の末期に私は上京して情報局に勤め、後には大本営報道部で軍人の下でこき使われたが、外電と報道部発表との間の看過しがたい虚偽に憤慨して書いた私の便りに「冷静な批判精神を失わぬように」と戒めて下さったのも、やがて空襲で焼け出され、一冊の書物も持たず防空壕で生活していた私に、「これを読め」とてクリストファ・ドウソンの『欧州の形成』と『中世論集』を小包で送って下さったのも、終戦の年の暮れに「関西へ戻って来い」とて関西学院の専門部の教師に呼び迎えて下さったのも、昭和四十三年に甲南大学での先生の後任にして下さったのも、みな寿岳先生だったのである。

そして、静子夫人もまた、私にとっては厳しい恩師である。夫人が逆のような情熱の人であることは、『朝』を一読すれば誰でもわかることだが、「秩序と統制、その中で楽しくひろがる自由…をいつくしみたいと願っています」という昭和十年のお言葉にも察せられるように、自他の奔放を律する点では先生以上に厳しいお方である。「増野さん、男はね、三十前に一仕事してしまわないようでは、先は知れています。文章はちゃんとやりましたよ」と言われたとき、私はすでに三十四、五歳だった。

私がいただいた『朝』の扉の献辞には、「美が、宗教と愛の為に求められずして、快樂のために求められるや否や、美は求める者を墮落させる。エマソンの言葉より。寿岳しづ」と書いて下さった。年来の私の耽美主義的傾向に鞭(むち)を加えるおつもりがあったのかどうか。近年は病床におられることの多くなった夫人が、今春年賀に伺ったときには茶菓を運んで応待して下さり、しばし談笑することができて非常にうれしかった。そうしたときの話題にはあまり峻烈なものはなく、ほのかにユーモアを滲ませた話が多い。

恥をさらすことになるが、戦後関西に移住して数年目、私は生活費に困って先生のところへ借金をしに行ったことがある。どうにも切り出しにくく、いよいよ辞去すべく玄関で靴をはいてから思い切って、申し上げたところ、先生は撫然たる面持ちで「なんだ、そのことで来たのか」とつぶやきながら、奥さまに出してやるように申し付けられ、それから小声で「そういう言い出しにくいことは一番先に言うことだ」と私をたしなめられた。背中に脂汗を感じつつ向日町駅への道を歩きながら、先生も経験者なのかなと不埒(ふらち)なことを考えた。

教壇を去られてから後の七、八年を、先生は相次ぐ病魔と戦いながらダンテの『神曲』全篇を完訳されたが、入院中も配膳盤を机にして仕事を続けられた修験者のような努力のお姿をかいま見ている私には、この大業の意義が、とりわけ先生に身近かな関西では、正當に評価されていないように思われる。喜寿を見送られた先生に「御自愛を」と希望したところ、「いや、まだ『新生』が残っている」とのことだった。

(就実女子大教授)

(朝日新聞 1979年3月28日)

寿岳 潤先生のこと

平田 和代

私が寿岳潤先生やご家族とお出会いは、今から74年も前のことになります。

『出会い』

寿岳潤先生が私の家庭教師をしてくださることになったのは、私が同志社中学の1年生で、潤先生は京都大学理学部宇宙物理学科の院生の時ではなかったかと思います。なぜそのような運びになったのか、その経緯は残念ながら、私には正確には分かりません。その事情を知っている人たちは既に皆亡くなってしまい、尋ねることは出来なくなっています。

私は4人姉弟の長女ですので、母が初めての子供である私を心配して、柚木春雄先生（当時は衣笠小学校の校長）に相談した結果であろうと推測します。

柚木先生は私の小学校（乾小学校）の元教頭先生で、私の同志社中学受験を母に薦めてくださった方です。かつ柚木先生は潤先生のお姉さん・章子先生の恩師でもあったようです。その繋がりが事の起こりではなかったかと推察しています。

『家庭教師として』

1952年、中学1年生の私にとっては、潤先生は大人のおじさまに思いましたが、そのとき潤先生は25歳の青年で、なんと一回り上の私と同じ卯年生まれであったと、今回知りました。

情けないことに、もはやはっきりお顔が思い出せないのですが、お母さんであるしづ先生に似ておられたと思います。細面の色の白い物腰の柔らかい人であったという印象が残っています。そして、何故かちょっとお茶目でもあったなあとも思い出します。当時、潤先生に何をお習いしたのか、ただ「ひとつ」を除いては全く覚えていません。

1961年にガガーリンが人類初の有人宇宙飛行を成功してから、宇宙は身近なものになりましたが、あの時代に宇宙は、一般の人にはまだまだ遠い存在でした。潤先生の専攻が宇宙物理ということからでしょうか、私も興味が湧いたようで、ある日「宇宙って？」の問いをしました。

すると、先生は紙を細長い短冊に切り、片方の端を180度捻り、端と端をくっ付け、輪にしたものを私に手渡ししながら「宇宙だよ」と。（そうおっしゃったと今も思っています。）

「継ぎ目からスタートして、継ぎ目まで進んでごらん」の声に、私は紙の帯の継ぎ目から、鉛筆で線を引きながら、元の継ぎ目まで進んでみると、なんと、いつの間にかそこは出発点の真裏に到着しており、そこでは左右が逆になっていたのです。「なんで？なんで？」と不思議がる私に、先生は「うふふ」と笑われただけで、何も教えてはいただけなかったと記憶しています。

その輪が意味する「メビウスの輪」をこの時代に教わったことは、現在に至るまで、大袈裟に聞こえると思いますが、私という人間を作る重要な要素となりました。それは「さかさま」という観念（イメージ）にあります。

大学を卒業するにあたって、所属していた茶道部の冊子「関守石」に卒業生として書くエッセイに「さかさま」と題して書いています。潤先生に教えていただいた「さかさま」は、なかなか

手強く、折りに触れ自分なりに解釈したりして、今も反芻を続けています。自分の意識の底にいつも留まっており、その結果、少しへそ曲りな女になったのではないかと思います。

『潤先生・アメリカへ旅立ち・お別れ』

1953年、潤先生はアメリカでの勉強の機会である、フルブライト奨学金の試験に合格され、第1回フルブライト留学生となりました。そのため私が2年生になるのを機に、家庭教師は終わられることになりました。私はフルブライトが何か、詳しいことは全く分かりませんでした。

母は、私のこれからを心配している様子でした。しかし、先生はきっぱりと、次のように母に言うていただきました。

「和代さんには家庭教師は必要はありません。一人でやっていかれます」と。この「ひと言」は、それまで母の引いた線路を辿っていただけの私自身からの独り立ちの瞬間でした。道案内なしに自分の行く道は、自分で切り拓けとの、別れに際しての、潤先生からの最高の贈り物でありました。「さかさま」と同じく「独り立ち」への勧めは、私の生きる土台の一つとなりました。

最後の日は、潤先生の提案で、「二人で、映画を見にゆきましょう」という事になりました。私の実家は、味噌醸造・卸しを営む商家です。両親ともに忙しく、弟が三人もおり、親に映画に連れて行ってもらったことはありません。とても嬉しく、緊張もした覚えがあります。

観た映画は、エーリッヒ・ケストナー原作の『ふたりのロッテ』を映画化したドイツ映画でありました。帰りには、お茶とケーキをご馳走になり、背伸びした気分を味わわせていただきました。その後、どうサヨナラしたのか全く記憶がなく、思い出せません。

先生が2011年にお亡くなりになるまで、その日以来一度もお目にかかることはなく、大切なものを頂きながら、申し訳なく悔いが残っています。

『未知との遭遇』

現在「向日庵」として大切に維持されているご自宅へ潤先生にお連れいただきました。そこで初めて、文章先生としづ先生にお目にかかりました。

文章先生は出て来て下さり、ご挨拶したと思いますが、あまりお話は出来ず、ニコニコと優しく笑っておられた顔が、今も浮かびます。しづ先生はとてもお綺麗で、華奢な、でも背筋の真っ直ぐな方だと子供ながらに思いました。お家の中を案内していただいた思い出があります。収納や使い勝手などあまり理解出来ない私に、一人の女性として丁寧に説明いただきました。

先にも書きましたが、我が家は中京区で味噌製造・卸しの商売の家庭で、それに対して寿岳家は閑静な郊外にお住まいの学者ご一家。寿岳家の生き方に接し知ることは、私にとっても、私の両親にとっても、まさに「未知との遭遇」でありました。

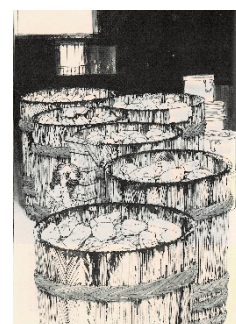
先生がアメリカに発たれた後も、年の瀬には、我が家の商品・白味噌をお届けしていました。阪急を西向日町で下り、静かな住宅の間を通過して、先生のお宅に白味噌をお持ちしました。味噌の取り持つ縁とでも言うのでしょうか、私の結婚の披露宴には、しづ先生と章子先生にお越しいただき、章子先生から祝いのお言葉もいただきました。

章子先生の著書『京都 町なかの暮らし』（*p.154）に「本田味噌」として沢田重隆氏の絵画と共に実家をご紹介いただいています。

思い出を書く機会を頂き、寿岳家の皆様とは、もはやお目にかかれない現在、何故もっと、とりわけ潤先生をお訪ねしなかったのか。後悔は尽きません。私も既に86歳になります。

南禅寺塔頭慈氏院墓地に、長い無沙汰のお詫びにお参りさせていただけたらと思います。

* 「本田味噌とわが家とが関係づけられたのは戦後である。それも、私の小学校時代の恩師である柚木先生からいわれて、弟が本田味噌のこどもたちに数学の家庭教師となったのである。いっち上のお姉ちゃんの大学受験のためと次の弟のために。そう長い期間ではなかったが、とても愉快な一家で、そのため家どうしのつきあいとなり、今にいたっている。パチンコ台の古いのをわざわざこどもたちのために買うようなおもしろいお父さん。家どうしのつきあいとなってからは、夫妻でわが家に来られたこともある。」 寿岳章子『京都 町なかの暮らし』



毎日新聞「惜別録」(1992年1月17日)

寿岳文章(じゅがく・ぶんしょう)さん。英文学者。甲南大教授。「神曲」の翻訳で昭和52年、読売文学賞を受賞。1月16日死去。91歳。

人間平等観と自由を好む豪放磊落(らいらく)な人柄と温かな家庭の雰囲気に引かれ、国内外から多くの文化人が、京都府向日市の自宅を訪れた。来訪の喜びをしたためた「仙人掌帖」には、バーナード・リーチをはじめ、エドモンド・ブランデン、新村出、河上肇、河井寛次郎らの名が残る。

英国の詩人、ウィリアム・ブレイク研究の第一人者。だが幅広い交友関係をベースに、手に染めるものは何でも専門にした。戦前、日本の手すき和紙にひかれ、しづ夫人(故人)とともに全国行脚。「絵本どんきほーて」やウィリアム・ブレイク詩集など彩色の「向日本」と名付けた美しい和紙の私家本は、人間と言葉の本当の姿を愛した学者の祈りでもあった。



全編百歌、一万四千二百行余におよぶダンテ作、「神曲」を七年がかりでイタリア語から完訳。翻訳を終えた時、「もしダンテが今の時点で生きていたならば、日本の戦争責任者たちをどの獄に入れたらどうか」と述べ、反骨精神は衰えを知らなかった。

亡くなる四日前、愛用の湯飲み茶わんを重く感じるほど衰弱していたが「用の美というのだから、民芸品(茶わん)も少しは病人のことを考えてもらいたいねえ」と冗談を飛ばした。

ライフワークの「和紙歴史事典」の編さんは未完に終わったが、自宅の納屋には「紙」と大きく記した未整理の資料箱が山のように残る。事典の完成は、長女で元府立大教授の章子さん(68)が引き継ぐ。

寿岳文章著『本の話』(白鳳社、1964年)の書評

寿岳さんのこと

紙と本とウィリアム・ブレイク。この三つについて寿岳文章博士は世界的に知られている。ただ権威であるというだけでなく、寿岳さんはそれらをこよなく愛している。だから、それらについて寿岳さんの書いたものは、ほんのちょっとしたものでもおもしろい。そして力強い。それから寿岳さんは生活が良い。だからその説に秩序があり、清潔で、美しい情緒を含んでいる。本や紙について単に技術的なことを書いたに過ぎないものにも随筆的な文学的なおもむきを感じるゆえんである。

福原麟太郎

編集後記

秋友 達也

昨年の会員のみなさま宛の年賀状は「向日庵が登録有形文化財に」でした。「向日庵」(旧寿岳家住宅)が文化財に登録されて、向日市では「向日庵」を保全し活用するために、土地を買い上げ、建物等は寄付していただき、公的所有に移管されました。

『向日庵9』に掲載された石川祐一さんの講演原稿「近代住宅としての向日庵」は、2回目の講演でした。1回目は10年前のNPO法人の前身ある「寿岳文章一家の文化的業績の調査研究会」の第1回講演「向日庵の建築史的価値」(機関誌『向日庵』に収録)で、「向日庵」の保存・活用活動は、この講演から出発しました。

「向日庵」は設計が澤島英太郎、施工が熊倉工務店です。今号には澤島英太郎のお孫さんの澤島哲郎さんの「満州の澤島英太郎」、中島俊郎理事長による「澤島英太郎の建てた家」が収録されています。

平田和代さんの「寿岳潤先生のこと」は、寿岳文章一家の天文学者、寿岳潤さんの思い出です。寿岳潤さんについては、「調査研究会」の最終回で、学友である今井六雄さんにお話していただいています(『向日庵』に収録)。残念ながら、今井さんは逝去されたので、貴重な記録になっています。

寿岳家の人びとが亡くなられて年数が経って、次第に忘れられています。NPO法人向日庵の会員の高齢化も進んでいます。たくさんのみなさまに、寿岳家の人びととの思い出などを記録に残しておいていただきたいと思います。

2025年は「民藝」が誕生して100年の年でした。京都市京セラ美術館の特別展「民藝100年—京都が紡いだ日常の美」は、「寿岳文章コーナー」が設けられ、シンポジウム「柳宗悦と寿岳文章」が開催されるなど、充実した内容でした。「世の中が合理的になるなかで、今改めて手仕事が目される。素朴に帰れ。民藝はよみがえる」というシンポジウム「民藝誕生の意味を語る」のことばが印象的でした。

島貫悟さんの論文「寿岳文章と三宅忠一」は「寿岳文章の工藝論」(『向日庵8』)に続くものです。寿岳文章の民芸運動について多面的に研究が進んでいくことはうれしいです。

昨年は大阪日本民芸館で特別展「大阪の民芸運動—三宅忠一の眼—」も開催されました。

昨年の「会員の集い 南禅寺北門界限(偃壺庵、聴松院、慈氏院)」に続き、今年は「会員の集い 河井寛次郎記念館」を開催しました。

今回は、民藝誕生100年にちなんだ企画です。あわせて「向日庵」の保存・活用の理想としての記念館のすがたをみたいという考えもありました。民芸の仲間から「寿岳のガラス家」と悪口を言われたという「向日庵」と河井寛次郎記念館とでは比較はできません。河井寛次郎記念館は特段の耐震工事はしなかったそうですが、「向日庵」の場合はハードルが高そうです。「向日庵」を見学したいという多くの声に応える活用を考えていただきたいと願っています。

私はこの機関誌『向日庵』の編集者ではなく、記事を読んでもいないのに、「あとがき」を書くのはおこがましいのですが、今後の期待も込めて書かせていただきました。

執筆されたみなさま、編集を担当されたみなさま、ありがとうございました。